

観世寿夫記念法政大学能楽賞 (第19回)

大槻文蔵氏 受賞

橋本朝生氏

法政大学（清成忠男校長）は、昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに十八回の贈呈が行われているが、今回も各方面の識者により推薦さ

観世寿夫記念法政大学能楽賞

受賞者の略歴

大槻 文蔵氏

観世流シテ方。日本能楽会会員。一九四二年（昭和十七）に観世流シテ方大槻秀夫の長男として大阪に生まれる。祖父大槻十三、父秀夫、観世寿夫・鏡之丞に師事。初舞台は四歳の「鞍馬天狗」子方。初シテは五〇年（昭和二十五）の「狸々」以来（鶴道成寺・望月恋重荷・卒都婆小町・朝長（儀法）などを披く。

この間、父や一門と協力して大阪に財団法人大槻清韻会能楽堂を再建、同門を指導する傍ら、大槻能楽堂自主公演を企画、東西の能楽師を招聘した低料金で質の高い能による新しい観客層を開拓、同会十周年記念公演「道成寺フエティバル」（九六年）は反響多大であった。一方、自身が主催する「能の会」では、関西の研究者グループと提携して八五年（昭和六十）から古作の復曲活動を展開し、「松浦佐用姫」（菊寛）（多度津左衛

れた候補者について、選考委員（福田太郎・法政大学常務理事、観世榮夫、馬場あき子、西哲生、表章の諸氏）が慎重に選考した結果に基づき、第十九回の受賞者と

して、観世流シテ方・大槻文蔵氏、山梨大学教授・橋本朝生氏の両氏を決定した。

なお贈呈式は、「催花賞」の贈呈式と合わせ、新春一月十四日（土）午後六時から東京・千代田区の赤坂プリンスホテルで行われる。

受賞者

大槻 文蔵氏

（贈呈理由）大阪の大槻清韻会能楽堂を本拠に、関西能楽師を代表する演能活動を展開するのみならず、自身が主催する「能の会」での一九八五年（昭和六十）以来の古作の復曲活動はじめ、国立能楽堂の企画公演や「能劇の座」の公演など、各種の復曲・新作

活動に積極的に参加し、大きな成果を挙げている。

（受賞者）
橋本 朝生氏
（はしもと、あさお）
（贈呈理由）氏の近著「狂言の

大原 紋三郎氏

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して一九八八年（昭和六十三）四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽継子方の功業者や能界を盛で支える人々を顕彰する「催花賞」を設けているが、その「催花賞」の第九回の受賞者として、法政大学能楽研究所の推薦に基づき、愛知県新城市の新城狂言同好会会長・大原紋三郎氏を決定した。

形成と展開」並びに「中世史劇としての狂言」は、狂言劇の性格やその展開過程の追求に正面から取り組んだ多年にわたる研究の集大成であり、広い視野と堅実な方法に基づき、成果によって、狂言研究を大きく進展させた見事な業績である。

（受賞者）
大原 紋三郎氏
（おおはら、もんぞぶろう）
（贈呈理由）愛知県新城市の中世末期以来の能楽との縁を象徴する富永神社の祭礼能を、自身が組織した「新城狂言同好会」の活動などによって支え、地域の能楽普及に大きく貢献している。郷土史家としての業績も多く、本年刊行の「新城祭礼能番組帳（全三冊）」は学界への寄与甚大な著作である。

大原 紋三郎氏

氏の時代から能が盛んだったが、一九三六（元文元）年以後、富永神社に氏子が祭礼能を奉納するようになり、現在もそれが続いている。市の無形文化財に指定されている。その伝統ある祭礼能の狂言の演者が絶えて上演不能になった際（一九五二年）、新城狂言同好会を組織して伝統保持に努めたのが大原氏で、八四年までは氏も狂言を演じていた。新城祭礼能の存続や同地の能楽振興には、同氏が大きく貢献している。特に小学生への狂言の普及に意を用い、今も祭礼能での狂言の二番は小学生が演じる慣習が続いている。

久田 観正会

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

久田 観正 会
馬場 信至
玉木 孝男
星野 路子
久田 舜一郎
前野 郁子
松山 幸親

井上 嘉久
（〒603）京都市北区紫野下島田町六

名古屋橋岡 会
名古屋市中区九屋町五ノ三五
山田紀子方

（株）大阪能楽会館
大西 智久
〒530-0015
大阪市北区中崎西2-3-17

武田謳楽会
武田 欣司
武田 邦弘

名古屋淡交会
橋岡 慈観
瀬戸 三津子
名古屋市中区高田町二ノ宮六瀬戸方
電話（〇五八七）三三八八番

雄謡会中部地区連合会
名古屋 和 会
一宮 竹石 会
岐阜 花 会
下呂 雄 会
倭文之屋社 中

下田 雄三
豊中市曾根東町四一―一二

山本 眞義
山本 章弘

初陽 会
武田 宗和

上田 観正会能楽堂
上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

山中能舞台
山中 義滋
〒545
大阪市阿倍野区阪南町六十五―八
電話（〇六）六九二一三八二五

松音 会
泉 泰孝
〒163
東京都杉並区宮前四―一九一四
電話（〇三三三）三三八二八〇番

佳泉 会
泉 雅一郎
〒181
東京都三鷹市牟礼二―三二―一
電話（〇四二二）七二二四〇四

春鶯 会
梅 若善高
〒565-0084
豊中市新千里南町三丁目18-12
電話（〇六）八三一―七八五四
TEL166-00003
東京都杉並区高円寺南4-27-7-903
電話（〇三三三）三二一〇五七〇

山本 眞義
山本 章弘

初陽 会
武田 宗和

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

上田 観正会
TEL078-15449
TEL078-15449

演 能 案 内

井上祐一舞台生活50周年記念
狂言鳳の会 第16回公演

平成十年一月十一日(日)

午後一時三十分始

名古屋能楽堂

番 組

素囃子 楽 河村総一郎 鬼頭喜太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

佐渡狐 佐渡の百姓 佐藤 融 越後の百姓 井上 靖浩
奏者 大野 弘之

川上 男 井上 祐一 女 佐藤 友彦

千切木 太郎 佐藤 友彦

前座 井上 祐一
太郎冠者 今枝 靖雄
立役 大野 弘之
藤田 茂樹
藤田 俊樹
井上 靖浩

○入場料(全席指定) A席(正面座) 4000円、B席(脇・中正前席) 3000円、学生2000円
(会員-A席2800円、B席1800円)

○チケット取扱

名古屋市内プレイガイド(愛知県芸術文化センター1、3、5、6、松坂屋、丸栄、名鉄地下1F)

○お問い合わせ

名古屋女子大学 林研究室 052-852-1943(直通)
ギヤラリーA.C.S 052-835-3780(夜間)
井上祐一方 05613-86430(夜間)
名古屋能楽堂 052-231-0088

大槻清韻会 第20回全国大会(第一日)

平成十年一月十五日(祝)

午前九時始

名古屋能楽堂

仕舞 小袖曾我 武富 康之
泉 雅一郎

難 波 大槻 文蔵

素囃子 松 風

緒方 陽子 志方つね子
伊藤ますこ 森 清子
木下 芙蓉 富田 初子
野村 和子 中垣 こう
佐藤加代子 伊藤るり子
浅野 芳子 山田 富美
岩田 正子 中村 善久子
水野 絹子 阿部 夕マ

連吟 朝 長 林本 政夫 中原 基夫
遊行柳 川崎 信義 尚雄 浅川 亨

舞囃子 卷 狸 須磨源氏 谷口 寛子
絹々 佐久間美親 伊藤 敏子
長島みつこ

仕舞 舞 舞 須磨源氏 谷口 寛子
長瀬 砂絵 伊藤 敏子
河内千奈美 加藤新一郎
加藤美智子

卒都婆小町 一度之次第 宝生 欣哉
河村総一郎 藤田六郎兵衛

連吟 松 虫 満谷寿賀恵
石濱 富香 翠

求 塚 山口 武子
五島 寛子 佐用雅水子

弱法師 川上富美子
藤井 昌子

放下僧 新居恵美子
須藤 充子 梅 弁慶 伊藤 圭子

梅 高砂 鬼頭貴代子 西行桜 岩佐 賢一
福間 克彦

独吟 薪之段 吉田 洋子
阿古屋松 深井 秋喜

能 羽衣 殿島 博子 宝生 欣哉
和合之舞 吉田 定男 柳原富司忠 観世 元信 藤田六郎兵衛

連吟 天 鼓 田中きくゑ
生野 道生 田中久仁彦 守屋 久男 置田 正之 佐々木哲也

仕舞 雨之段 岩田 嘉幸
梅之枝 安川 節子 鳥追 舟車 丸岡都世子 岩田 常子 岩田 常子 木村 敏子

舞囃子 安宅 菊池 純子 桑原 信夫 鞍馬天狗 富士道周明 大槻 一文

附 祝 言 (終了予定五時半頃)

〔御来場歓迎〕 主催 大槻清韻会



笙月会 中 川 雅 章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話(077)960-630番

洗心会 奥 村 富 久子
千66 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(075)772-0767番

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋市中区
電話(052)703-1503

翠 謡 会
名古屋市名東区社方丘3ノ1503
電話(052)703-1503

生 駒 里 翠
名古屋市名東区社方丘3ノ1503
電話(052)703-1503

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花 辰 の 会
加 賀 敏 彦
千463 名古屋守山区藤孝二丁目七〇九
電話(052)772-8945番

猶忠会 熊 沢 恵 美 子
名古屋守山区藤孝二丁目七〇九
電話(052)772-8945番

芳韻会 稻 生 芳 雄
半田市船入町三十一
電話(056)908-815

幸福会 近 藤 幸 江
岡崎市鶴田本町十一番地ノ三
電話(0564)252-29

重陽会 菊 池 重 郷
大山市大山字相生五九一六
電話(0568)450-1番

恵福会 三 村 恵 子
千45 西尾市住吉町三十一
電話(0563)572-594番

光盛会 熊 沢 光 俱
千45 小牧市篠岡3-2-11
電話(0568)791-9587

松盛会

小 松 勝 憲
松舞台
千311 三重県桑名市西別所一〇六一の五
電話(0594)231-4582

宝 生 英 照

名古屋異会

辰 巳 孝

近 藤 乾 之 助
千170 東京都豊島区巣鴨五-1-318

惠美寿会
衣 斐 正 宜

衣斐正直後援会
千466 名古屋市中区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話(052)882-1560番

佐 野 由 於
千150 東京都渋谷区東2-14-21
千921 金沢市泉野町四丁目12-14

倉 本 雅
千45 摂津市千里東3丁目11-13-302
電話(0726)721-26番

宝生流 嘉 宝 会
名古屋市中区川名本町二ノ五
鬼頭 嘉 男

司 宝 会
名古屋市中区天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二-130電話(052)772-772

金 剛 永 謹

金 剛 永 謹

廣 田 後 援 会

廣 田 幸 稔

廣 田 幸 稔

菊 扇 会

後 援 会

廣 田 泰 三

廣 田 泰 三

豊 嶋 三 千 春
豊嶋能の会
豊 春 会

金 剛 流

松 野 恭 憲

松 野 洋 樹

金 剛 流

名 古 屋 周 星 会

岐 阜 周 星 会

吉 川 周 子
名古屋市中区西崎町三十一
電話(052)761-1257

大槻清韻会第20回全国大会(第二日)

平成十年一月十八日(日) 午前九時始

名古屋能楽堂

仕舞 二人静 大槻 文蔵 多利局利之

連吟 阿 酒 鶴崎 啓子 西田 久子 東田 久子

仕舞 道江 村口 宮崎 祐輔 吉岡 邦夫 江副 邦夫

連吟 新之段 八谷 英子 宇野 英子

仕舞 阿鳥 追舟 岩井 紀美子 富田 久子 中島 輝子

連吟 富士太鼓 原口 元典 池田 博昭 横川 良孝 横田 楊成

能 碓 武富 康之 古井 佐季 福王 茂十郎 山本 孝 野村 又三郎

連吟 阿 酒 鶴崎 啓子 西田 久子 東田 久子

仕舞 玉 小 雙 山本 良子 大河内 美智子 藤岡 千代子 安藤 尚子

連吟 鳥 追舟 加藤 澄子 藤岡 久富 近江 八景 高嶋 啓子

舞臺子 松 虫 今野 茂 東方 朔 北宅 桂里代

仕舞 龍千 弱法師 植田 晴茂 大野 栄三郎 瀬古 道弘

能 海 御牧 紀代 福王 和幸 吉田 定男 鹿取 希世

小舞 祝 貝 尽し 野村 又三郎 大槻 文蔵

〔御来場歓迎〕 主催 大槻 清韻会

名古屋能楽堂定例公演

一月二十五日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

翁 千歳 井上 靖浩 野村 小三郎

毘沙門風流 毘沙門 野村 又三郎 西王 母 佐藤 融 充

半能 高砂 飯富 雅介 藤井 良治 助川 龍夫

後見 金春 穂高 地蔵 伊藤 雄二 前田 茂穂 小島 芳樹 加藤 正嗣

狂言後見 井上 礼之助 狂言 今枝 郁雄 野口 隆行 丹邊 文彦 井上 友彦 大野 弘之 鹿島 俊裕 奥津 健太郎

主催 能楽普及事業実行委員会 名古屋市・名古屋城振興協会 名古屋市文化振興事業団 協賛 能楽協会名古屋支部

〔入場料〕 前売一般四千円、学生二千円(当日一般四千五百円、学生二千五百円) (前売券取扱) 名古屋能楽堂(電話052-231-0088) チケットぴあ、チケットセブン、市内プレイガイド

青陽会定式能(第42回)

一月三十一日(土)十二時半始 名古屋能楽堂

仕舞 籠 太鼓 今沢 美和 星野 路子 野村 守 前野 郁子 地蔵 生駒 里翠

能 高砂 松山 幸親 相元 正樹 河村 真之介 鬼頭 好信 西村 信広 柳原 富司忠 竹市 学



金剛流 景雲会 国際能楽研究会 (I.N.I) インターナショナル能楽インスティテュート (日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾) 宇高通成後援会

宇高通成後援会 宇高通成後援会 宇高通成後援会

金 春 信 高 金 春 安 明 千67 東京都杉並区南荻窪3-17-16 電話03-3333-2571

金 春 欣 三 奈良市法蓮南町一四 電話074-221792

春 敲 会 名古屋春栄会 今枝 郁雄 野口 隆行 丹邊 文彦 井上 友彦 大野 弘之 鹿島 俊裕 奥津 健太郎

金 春 穂 高 廣 瀬 瑞 弘

本 田 光 洋 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二 電話03-3333-2641

伊勢金春会 村 富 次 伊勢市宮町一四一七 電話059-2456

伊勢金春会 宇 仁 田 吉 邦 伊勢市八日市場町5-16 電話059-65298

二 井 栄 逸 松阪市殿町1412の3 電話0598-231026

長 田 曉 後 援 会 千51-22 津市高野尾町三三三二一四六 電話059-2456

喜 多 流 和 楽 会 伊勢市中島二丁目26-12 電話059-2456

和 谷 衡 市 千516 伊勢市中島二丁目26-12 電話059-2456

喜 多 流 山 本 才 愛知県高浜市青木町三丁目七の五 電話056-605316

福 王 茂 十 郎

名 古 屋 高 安 会

高 安 勝 久 飯 富 雅 介 杉 江 元

葵 心 庵 舞 台 尾張旭市東大町原田二四九三ノ二 電話056-151533

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

宝 生 欣 哉 千176 東京都練馬区小竹町一五〇一五 電話03-3972-7230

豊 嶋 十 郎 千21 松戸市下矢切五五五 電話047-362-1982

谷 田 宗 二 朗 千693 京都市北区衣笠街道31-7 電話075-463-4875

森 常 好 東京都世田谷区世田谷一47-12 電話03-3422-4853

植 田 和 光 会 植 田 隆 之 亮 千673 明石市松ヶ丘4の3 A61301 電話FAX078-921-3374

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

高 安 流 岡 同 門 会 岡 次 郎 右 衛 門 清水 利 宣 高 坂 康 弘 森 野 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 雅 信 谷 口 雅 信

ワキ方高安流 山 崎 俊 輔 大牟田市大字歴木一四八ノ一 高泉団地一一二二

平成10年1月・2月放送

(1月)

◎NHK・FM能楽鑑賞 (日曜日・午前8時～8時57分)
1月4日 「老松・田村」 ～金春流～ 金春 信高
1月11日 「 砧 」 ～親世流～ 関根 祥六
～NHK能楽鑑賞会から～
1月18日 「熊・花月」 ～金剛流～ 豊嶋 訓三
1月25日 「西行桜」 ～親世流～ 杉浦元三郎

◎NHK教育テレビ (午後2時20分～2時30分)

1月19日(月)～23日(金)
「10min. ボックス——狂言特集・5回シリーズ」
出演:野村萬斎、山本東次郎 ほか
きき手:児玉 信
1月25日 午後3時～4時。教育テレビ
狂言 「釣 狐」 ～和泉流～
野村小三郎・野村又三郎

(2月)

◎NHK・FM能楽鑑賞 (日曜日・午前8時～8時57分)
2月1日 「小 塩」 ～親世流～ 武田 志房
8日 「百 万」 ～宝生流～ 未定
15日 「春日龍神」 ～喜多流～ 佐々木宗生
22日 「船 橋」 ～親世流～ 親世 喜之

◎テレビ

2月11日(水) 午前10時～11時30分 教育テレビ
能「砧」 ～親世流～ シテ 関根 祥六
～NHK能楽鑑賞会から～

名古屋能楽堂 演能カレンダー

(平成10年2月)

1日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
8日(日) 名古屋親世会定式能 (有料)
11日(水) 富耀会10周年記念大会 (無料)
13日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
21日(土) 三菱重工・自工・新CM連合大会 (無料)
22日(日) 親世九阜会定期能 (有料)

(要金員券)
当日券三千円

愛知県文化振興基金事業

附 祝 言

主 催 青

陽

会

能 鶴

祖父江修一

飯富 雅介
河村総一郎
後藤嘉津幸
大野 弘之
星野 路子
松山 孝親
三木 孝子
山本 幸親

狂言 粟田口

井上 祐一

佐藤 友彦
後見 浩彦
井上 礼之助

能 草子洗小町

高安 勝久

後藤 孝一郎
大野 誠

仕舞 巴

久田 徹二

梅田 邦久
地謡 須藤 江修

熱田神宮能楽殿演能案内

つぼみ会発会記念 恵美寿会初謡会

平成10年1月10日(土) 九時半始
熱田神宮能楽殿

名古屋能楽堂 演能カレンダー
(平成10年1月)
3日(土) 名古屋の文化を考えるライブ&トーク
(抽せん当せん者のみ招待)
(能・狂言の楽しみ方)
4日(日) 学生能・狂言の会 (無料)
11日(日) 狂言「鳳の会」 (有料)(番組③面)
井上祐一舞台生活50年記念
15日(水) 第20回大槻清顕会全国大会 (無料)(番組③面)
18日(日) 同上 (無料)(番組④面)
25日(日) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組④面)
30日(金) '98名古屋万之丞の会 (有料)
31日(土) 青陽会定式能 (有料)(番組④面)

熱田神宮能楽殿催能

(平成10年1月)
10日(土) 恵比寿会 (無料)



大倉源次郎

幸友会

福井啓次郎

福井良久

福井良治

桂 後藤孝一郎

亀井俊一

保忠雄

飯島佐六

谷口正喜

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

河村真之介

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

野村万蔵

◆晩秋の舞台から◆ 「花傳の會・蠟燭能」名古屋能楽堂定例公演「第15回鳳の會」と「金春會」

竹尾邦太郎

「鶯羽」平成三年、大規模文蔵主宰の「能の會」廿周年記念に当り四百年ぶりの復曲という。当地も同年四月廿七日に上演、今回の再演は蠟燭能の趣向である。舞台は、階を挟み正面左右各三基、脇正面四基は火袋が舞台面に出る高さ、一ノ松とシテ柱間の一基、一ノ松と二ノ松間、二ノ松と三ノ松間の各二基、更にワキ柱横の一基は火袋が勾欄上に出る高さで置かれる。計十六基の燭台の、火袋を透してたゆたう柔らかな明りは、海幸彦山幸彦の神話時代に誘うか、先ずは選曲の妙である。

釣針を取り戻した上に満干二種の珠を授かる彦火々出見尊、龍女豊玉姫は彼と契り懐妊するが産産は鶴戸の岩屋、産屋の屋根を鶴の羽で葺きも取えず生まれた子が即ち鶴羽葺不合尊（うのふきあわせずのみこと）という。その誕生日の嘉例として古を偲び、葺きさしの産屋を再現するシテ海女・文蔵（ツレ植友）、偶々この古跡を訪うワキ忠信僧都・茂十郎との問答の明快は、葺きさしの産屋に至る経緯の、語り口歯切れ良く説得力がある。ふく（吹く、葺く、更く）もの尽しの音韻の、膨らみのある地謡（晚夫・信隆ら）も耳に心地よい。ワキに満干二珠の在処を問われ、暈して話柄を逸らせつつ、豊玉姫と素性明かして消える中入は、キリリと小廻り二度、一ノ松へ走るところは如何にも含羞の心が初々しい。

アヒは所ノ者と末社ノ神ノ二様ある由だが復曲に際して替間を創作、「湯水龍女」に似る。鱗（うろくず）ノ精は

と衣被を引き剥がせば、この度は懐然、少々鼻下長の祐一とヒス気味の融が旨く絡み男女の機微中々とみだ。（22分）

「那耶」哲学青年盧生、粟飯一炊の間の帝位は榮耀榮華の夢、醒めて人生を悟る。シテ水鏡、面那耶男、黒頭・標淺黄紺・赤地厚板着付、半切と拾法被は金糸の煌やが、掛絡を着け水晶数珠を持つ。正に人生に悩める良家の青年の、求道の旅立ちめくく印象である。アヒ宿ノ女王・靖浩との問答も慎重に、徐に台上を渡り、「げにげにこれが」と熱々那耶の杖を見詰める辺りには些か深刻味。夢中仮眠を破られて帝位に就く夢の場は、「天にも上る心地して、と正先に居立ち、背後に真ノ米序（六郎兵衛・富司忠・敏一・龍夫）を開きつつ迎える（元・信広）に乗る体にてこの度は台上玉殿に上り掛絡を外す。同時に子方を先立てワキツレ延臣・雅介が出るが、延臣独りはいかにも寂しい。玉殿に納まるシテの、地（三千春・通成ら）との掛合に四方の光景を描写するところろは、東西をゆつたりと左右にウケ、春秋（時間）をも止めるの哀語を、日月運し、と背筋伸ばすや左袖巻き両手高く上げる勢いに見せ、スケールが大きい。子方は羽多野響子君、金風折・標赤・紅入笠箱着付・白大口・紫胡黄段単狩衣、宮廷の舞臺に相応しい品の良きで可憐、立ってシテに酌をする挙はまきはききと、「我が宿の、の一節も立派なら舞も美しく舞臺に華を添える。女鬼の子方としては親世安寿子君以来ではなからうか。

「因幡堂」大酒飲み妻・融を離縁し、良妻を授かるシテ、因幡堂に参籠するシテ祐一。そうと知る妻は一計を案じ、夫の夢枕に立つ。霊夢に、夫はしおらしげな風情の女人と出会うも、蓋事に衣被（きぬかすき）の下から大蓋三つを干され、更に強要されれば厭なムードにただ惚然である。蓋を奪って自身も手酌一蓋、やれ「蓋事は済んだ」

腰掛け休息の後は舞臺に出る。悠揚追らず「葉」を舞上げ、百花齊放を音う地との掛合は「一時に花咲けり、と後ろ手に作物の柱を掴んで返りを見る」と、不思議やな、では後ろ向きに跳び上がり台上に安座の放胆である。「頃去れば、と台を下りては地の裡にする」と三ノ松、飛び込みは長途一気走り、枕指シ左袖巻上げ拍子踏むや飛び上がった横隊、鮮烈な技の切れは舞臺の面目、見事の一語である。夢醒めた後の寂寥は粟飯一炊の間の不思議、「計り難しや」と唐団扇を抱え込むようにする辺り余情憫々、人生の儚さを沁々感じさせ上々の一番だった。ワキ勝久、後見は泰三幸松嘉樹。

「因幡堂」「那耶」と夢二題、主人公は夢醒め改めて現実を直視することになるが、その将来を見所に問いかける。好企画のこの催能は本年四月、何かと話題を提供した市立名古屋能楽堂定例公演の記念すべき第一回、盛會かつ立派な舞臺成果は御慶の至り、その将来の発展を祈るや切である。（1時間24分・10月17日）

「八幡前」一芸に達した者を合格させるのは当今の大学入試事情に似る。男山八幡宮下の有徳人・高義、舞臺集の高札を立てるが応募する靖浩は童の玩具破魔弓しか知らない。早速教へ手・祐一に窮状訴えるが、窮状とは言いつくあつけらかんの無邪気に靖浩いい持味を出す。弓は方便、秀句勝負と一首伝授されはしたが「いかばかり神も嬉しく思すらん八幡の前に鳥居（鳥射）たてたり」が覚えられな。余りの無知に呆れる祐一の、阿呆くさといつた気分、茶にされたと背筋立てんばかりに立腹の高義、小賢しく立ち回る太郎冠者・靖雄、四者上々のアンサンブルは雄大な曲趣すませて充実。（38分）

「運歌盗人」運歌初心講旅雁に托すカケリノ浮遊感

元不如意の友彦、背に腹は代えられず相棒・融を語らひ必雷雷調達は何某、小三郎郎へ囑入する。固より俗を離れ風雅を嗜む二人（と言いたい）が低俗の極みは盗みの意味を自覚しないのが可笑しい。机上の詠草に目が留まれば場所柄弁えず、早速付合に興じる。その騒ぎに押す取り刀の小三郎、同好の士と判れば忽ち連歌を巻きにかかり、心通えば気前よく酒を振舞い、太刀まで与える鷹揚である。趣味の世界に貧富貴賤は無縁、味のほのとした味わいは小三郎、堂々たる押し出しに器量を示し、友彦・融の能天気なキヤクターも捨て難い。（41分）

「文山賊」山賊仲間なら、「還るまいぞ」は「逃がすまいぞ」、「やれやれ」は「殺れ殺れ」だろう。それを「遣れ遣れ」は「逃がせ逃がせ」で獲物取り逃がせば、状況判断の相違に掃蕩させられるだろうか。祐一と友彦の対立は風雲急、果たし合いに至る。しかし犬死には不本意と文を残せば、読む裡そぞろ里心がついて無用の死と悟るのは目出度い。勝鬨上げんばかりに「どつと勝鬨上げて」帰られては、逸（はぐら）かさされたこちらとしてはどうして呉れる、と言いたい位。両者がつらつら四つの脚志剥き出し、脂の乗つた味もよろしかつた。（17分・10月19日・鳳の會・熱田神宮能楽殿）

「花籠」シテ光洋、正中下居で読む文（ふみ）、視線は動かさず文面に集中して名調子が自己陶醉的なら、シテを受ける地（汎・広明ら）も好調、書き置き給ふ水莖に感極まったシテは、文持つ右手をつと放し、シホルが、傷心の心持も一入である。文の左手で鉦（つる）を持ち、龍に右手をそと添えて起つて行く中入には深い情味も見せ、短かいが前が光る。後は唐織だけを替え、ツレ紳一と共に脱下ケ姿。思いの旅雁に托すカケリノ浮遊感

や、カタルシス（精神的痛手を情動に表出し、心の緊張を解く）を求めるかの狂はそのトメ、水の月を望む猿の無謀を自身に擬え、「叫び伏して泣き居たり」と正中下居シホリする絶望感、更には宣旨にあおられるかのイロエの高揚感、そしてクセの、陰翳に富む情緒纏綿の舞、と光洋力量を發揮する。ただ惜しむらくはキリ前、ツレから受取った龍をワキが平伏して差出すのに子方が知らん顔で居たり、「君の御心ぞ有難き」とシテが万感の思いで子方を見つめるのにも視線が台わな、など少々素っ気なく思われた。（1時間19分）

「鶯子遣子」野遊の靖浩と融、田圃の鳥成しに目を留め、鳴子だ、いや遣子だ、と喧しい。葎句腰の物を賭け、シテ茶屋・祐一に裁断を仰ぐ。それぞれ自説を認めさせて貰えば、靖浩は茶釜を、融は茶壺を、提供すると聞取り遣子を持ち掛けた茶屋、鳴子遣子を織り込んだ西行の歌を披露し、「論ずる物は中から取れ」と腰の物二振りを攫って逃げる。若手を束ね祐一余裕輝々。（16分）

「山姥」前シテ異美、面曲見・標淺黄・白摺箱着付・納戸地菊撫子文無紅唐織。ツレ百万山姥・俊之、ワキ雅介、ワキツレ等を前にし、右膝抜き斜に構えた姿にそこはかとない凄味がある。中入の、へ移り舞を、とツレに左袖アシラヒ、くるりと右へ回る呼吸も微妙。後シテは穂高、白頭・標淺黄・金鱗箱着付・金地山道三雲巴文半切・金地車文唐織笠折は崇高な趣すら。「一声の山鳥羽を搏くと、葉付鹿背杖でトントンと床をつく型が印象に残り、「山また山」と合膝から一ノ松へ走りトメまで力強かったが、山笠が鬼女と変じたという山姥の、鬱然の気は薄く思えた。（1時間30分・11月2日・金春會）

「おことわり」年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

「年賀欠礼致します」



ウシマド写真工房
〒602 京都市上京区北野上七軒
TEL0754611344

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
〒460 名古屋市中区正木二丁目16-25
電話052(333)7553番

鳳の會
林和利
井上祐一
佐藤友彦

能楽講座
能と狂言に楽しむ會
梅田邦久
藤田六郎兵衛

朝日カルチャーセンター
雛子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

狂言のり座
井上靖浩
佐藤融
野村小三郎

花傳の會
事務所 名古屋市中区新道2-17-17
電話052(571)3464 (FAXとも)

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五丁目一四
電話052(262)183番

彰諷閣
名古屋市中区白区植田西二丁目八〇二二
電話052(851)3301
名古屋市中区鳴海町有松裏401-9
連絡先 電話052(621)4238

能楽の友社
同人一同

大垣浦声會
浦田保利
浦田保浩
浦田保親

観修會
祖父江修一

富耀會
柳原富司忠

流 剛 流 世 宗 流 本 宗 元 行 元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通越路町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (052) 731-7984
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
— 部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

[平成10年2月]

- 1日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
- 8日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
- 11日(水) 富耀会10周年記念大会 (無料)
- 13日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (番組②面)
- 21日(土) 三菱重工・自工・新CM連合大会 (無料)
- 22日(日) 観世九草会定期能 (有料)

[平成10年3月]

- 13日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
- 22日(日) 名古屋壺泉会 (無料)
- 28日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)
- 31日(火) 龍鼓 (無料)
- [熱田神宮能楽殿]
3月1日(日) 大蔵狂言会 (無料)

岐阜県歴史民俗資料館 津島

能版画特別展

4月28日から5月24日まで

岐阜県津島の歴史民俗資料館では、今春四月二十八日から五月二十四日まで、「第六回特別展」として、能版画を中心に、装束、道具類が展示される。

この能版画は、大山在住の玉野宮夫氏のコレクションで、室町御所御能興行之図(文久三年、額入三枚続)、鎌倉御能興行之図(石橋、文久三年、額入三枚続)、さらに宝生太夫一世一代勳進能の額入六枚続、また青山御所の舞台抜きに初代梅若実の正尊の画、加賀藩前田家の「安宅」、江戸城の謡初式の画など貴重なコレクション。

版画は、江戸時代末期から明治にかけての著名な能版画家、一松斎芳宗(一八一七—一八八〇)、一雲斎芳形(一八四一—一八六四)、惺々狂齋(一八三一—一八八九)、月岡芳年(一八三九—一八九二)、号一魁齋、楊州周延(一八三八—一九二二)、尾形月耕(一八五八—一九二〇)、阪巻耕漁(一八六九—一九二七)の制作、また阪巻耕漁の能楽百番のうち三十六点が展示される。

このほか能装束、赤地・魚甲菊花唐織、伊勢門水画・狂言画、また能楽絵巻書、根付(能が彫つてあるもの)、革に絵がかかっている太鼓なども展示される。

なお特別展の最終日の五月二十四日には、津島町歴史民俗資料館主催、大山城能楽友の会の協力で、「第六回特別展記念能」が民俗資料館能楽舞台で催される。

番組は、仕舞「綱之段」「鉄輪」、舞囃子「胡蝶」「須磨源氏」、若囃子「二拍子之舞」「調山姥」、能「猩々」の上演。

「大衆能」の名称検討

能楽協会名古屋支部の謡初式

能楽協会名古屋支部(泉嘉夫支部長)では、一月三日午前十一時から恒例の新年謡初め式を熱田神宮能楽殿で催し、「四海波」を謡い、平成十年の初春を寿いだ。

ひきつづいて熱田で熱田神宮能楽運営委員会委員長・二橋一彦熱田神宮権宮司から「昨年は熱田神宮能楽殿の改修を能楽師の

方々、愛好者の方々の温かい熱意とご支援で完工することができ、改めて厚くお礼申し上げます。本年のさらなる活躍をお祈りする」と年頭のあいさつが述べられた。

泉支部長から「協会名古屋支部として、名古屋能楽堂のこけら落としはじめ支部主催の催能についてのご協力を感謝する」とあいさつが報告された。

なりのり座による 狂言づくし

3月3日 豊田市民文化会館

豊田市民文化会館で、なりのり座による「狂言づくし」として、狂言三番が上演される。

狂言「朝顔」(シテ井上靖浩)
狂言「隠狸」(シテ佐藤 融)
狂言「骨皮」(シテ野村小三郎)

開演午後六時三十分。入場料は全席指定、一般三千円、学生千五百円、チケット取扱いは、チケットぴあ(052-320-9999)豊田市民文化会館(0565-337111)、豊田市民中央公民館(0565-318804)コンサートホール準備室(0565-358200)。問い合わせは、豊田コンサートホール準備室。

歳末助け合い 義援金寄贈

愛知県名古屋支部へ

能楽協会名古屋支部主催による歳末助け合い協賛能は、昨平成九年十二月七日、名古屋能楽堂で行われ、能三番、狂言、舞囃子上演、愛好者の協力によりきわめて盛会であった。

この義援金として、愛知県へ二

平成十年度・能公演予定

能楽協会名古屋支部主催

◆熱田神宮納能

六月五日(金)
熱田神宮能楽殿

- 能「枕草子」(長田 輝)
- 能「巻扇」(星野路子)
- 能「鶴岡」(稲川寿二)

◆名古屋新能

- 八月八日(土)
能「敦盛」(二段之舞)
- 能「松風」(梅田邦久)
- 能「殺生石」(衣斐 愛)

◆大衆能

九月六日(日)

- 能「蟬丸」(久田徹二)
- 能「黒塚」(竹内澄子)
- 能「夕顔」(前野節子)
- 能「天鼓」(弄鼓之舞)

◆歳末助け合い協賛能

- 能「歌占」(衣斐正直)
- 能「楊貴妃」(長田 驥)
- 能「朝慈童」(三村恵子)

観世会定式能 予定番組

平成十年度

平成十年度名古屋観世会定式能は、二月八日(日)を初回(番組②面)として、年五回催される。予定番組は次のとおり。

- 第一回 四月十二日(日)十二時半始
「通盛」 小島一英
- 「半部」 梅若 六郎
- 第二回 六月十四日(日)十二時半始
「松風」 片山清司
- 「安達原」 大槻 文蔵
- 「急進之出」 見留
- 第四回 九月十三日(日)十二時半始
「清経」 古橋正邦
- 「船弁慶」 親世 芳宏
- 第五回 十一月八日(日)十二時半始
「密主鼓」 武田 志房
- 「女郎花」 親世 喜之

大阪能楽養成会 大の研究発表会

大阪能楽養成会はきたる二月二十七日(日)大阪市北区中崎西の大阪能楽会館で「第四回大阪能楽養成会研究発表会」を開催する。午後六時開演、入場無料。

- 能「高砂」(シテ今村一夫、ツレ井戸良祐、ワキ福王和幸、ワキツレ江崎敬三、福王知登、笛・今村徳和、小鼓・上田敦史、大鼓・山本哲也、笛・三島卓、間・善竹隆平、地謡・上野朝義、大西礼久、久保誠一郎、山口剛一郎、齊藤信輔、水田雄吾)
- 狂言「末広かり」(善竹幸四郎、善竹忠亮、善竹忠重)

名古屋宝生会定式能(第42期)

二月一日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

舞囃子「金札」(松井俊介)「老松」(上野朝義、笛・野口亮) 大阪能楽養成会は昭和三十八年より能楽後継者の養成にたずさわっており、この研究発表会は、現在養成中の生徒の研究成果の発表

の場として毎年四回行われている。平成十年度の研究発表会の予定は、平成十年六月二十五日(日)、九月三十日(日)、十二月二十七日(日)、平成十一年二月二十四日(日)。事務局は高槻市野田二二二-二、森田啓子方。

番組

- 竹内 澄子 杉江 元 寛 敏一 鹿取 希世
- 後見 辰巳 孝 松浦 祥子 玉井 博祐
- 辰巳 満次郎 阪口 泰子 倉本 雅
- 芳賀 カズ子 戸田 和
- 澤栗 幸子 衣斐 愛

狂言

野村小三郎 佐藤 融

仕舞

後見 松田 高義

難波

玉井 博祐

玉ノ段

倉本 雅

巻絹

戸田 和

須磨源氏

飯富 雅介 柳原富司 竹市 学

附祝言

- 橋本 幸 河村真之介 助川 龍夫
- 野村小三郎 松田 高義
- 竹内 澄子 中上 村 茂
- 衣斐 愛 竹内 淳一 馬場富四夫
- 後見 竹内 良伯 辰巳満次郎
- 村中 恵生 馬場富四夫
- 佐藤 融 佐藤 耕司

名古屋宝生会

事務所 名古屋市中区白鳥町二丁目三〇番地
電話 FAX 〇五二一八〇三二七三二
〇三〇一五六九一四三三五
携帯 TEL 〇三〇一五六九一四三三五

正月雅日記

(184)

萬葉の花紀行 (18)

えと文 二井 栄逸

カツラ

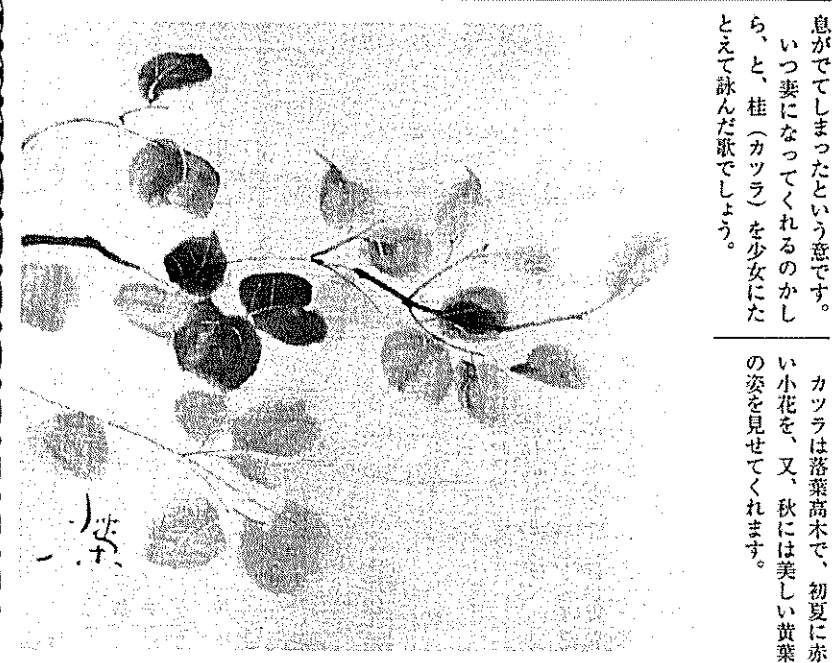
春霞のたなびく頃ともなれば、月の内のカツラ(桂)の木も花を開きます。此処は天上にあらずして然も亦佳境なりと、天女は雲路を風に暫し鎖させて、人界にとどまります。そして、この松原の春の景色を見て、清見濁の残月、富士の雪、いづれも春の曙のたぐいなき眺めとして、心にとどめるのでした。

これは、心にえがいた能、羽衣

の曲(クセ)を流れる夢の映像です。私は黄葉のカツラをバックにして、幻想の絵をかきます。

萬葉の歌に
向つ岡の
若楓の木
下枝取り
花待つ間に
嘆きつるかも
(巻七の一三五九)

という歌があります。この歌の意は、向かいの丘にある若いカツラの下枝を取って花が咲くのを待つていたけれど、待ちかねたため



息がでてしまったという意です。いつ妻になつてくれるのかしら、と、桂(カツラ)を少女にたとえて詠んだ歌でしょう。

カツラは落葉高木で、初夏に赤い小花を、又、秋には美しい黄葉の姿を見せてくれます。

新春能を楽しむ

「能・狂言の楽しみ方」講座

1月3日 名古屋能楽堂で盛会

名古屋市、名古屋城振興協会で、新春企画として「名古屋の文化を考えるライブ&トーク」能・狂言の楽しみ方」講座を一月三日(日)名古屋能楽堂で開講、千五百名の応募者の中から抽せんにより当せん者五百人が招待された。

当日は午後二時開演、能楽笛方藤田流十一世家元、藤田六郎兵衛氏によるお話と笛の演奏、舞囃子「高砂・八段之舞」シテ泉流夫、竹市孝、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村総一郎、太鼓・鬼頭喜太郎、地謡・久田徹二、清沢一政、松山幸親、八



名古屋能楽堂定例公演

4~6月予定

- ◎四月十日(金) 午後六時三十分始
狂言「成上り」 (和泉流) シテ 野村小三郎
能「忠度」 (喜多流) シテ 友枝 昭世
- ◎五月八日(金) 午後六時三十分始
狂言「水掛罌」 (和泉流) シテ 佐藤 融
能「大江山」 (親世流) シテ 武田 邦弘
- ◎六月十二日(金) 午後六時三十分始
狂言「鬼瓦」 (和泉流) シテ 松田 高義
能「殺生石」 (喜多流) シテ 長田 颯

藤田流笛方 三男氏逝去

病氣加療中のところ十二月二十一日午前六時五十三分逝去された。享年七十六歳。葬儀並びに告別式は十二月二十五日執行行われ、故人の冥福を祈った。喪主、妻あみ子さん。冥氏は日本能楽协会会员、呉竹会を主宰。多年にわたり能楽協会名古屋支部役員として力を尽くし、後進の指導に当たられた。また能楽の友紙の創刊以来同人として総務関係として尽力された。

両氏による能面トーク

名古屋観世会定式能(初回)

二月八日(日) 十二時半開演 名古屋能楽堂

富耀会十周年記念大会

二月十一日(建国記念日) 午前十時半始 名古屋能楽堂

能組	神歌	繪馬	目近	仕舞	梅田	田村	国栖	能	羽衣	附祝言
素謡 梅田邦久 武田邦弘	能 梅田邦久 武田邦弘	山本 順三 福王茂十郎 是川 正彦	野村又三郎	藤井 完治	藤井 完治	片山九郎右衛門 藤井 徳三	飯富 雅介 高安 勝久 杉江 元	飯富 雅介 高安 勝久 杉江 元	後見 久田 徹二 藤井 徳三	(終了四時半頃)
加藤 保彦 小島 一英 高橋 完治	河村 大 大倉源次郎 藤田六郎兵衛	三島 元太郎 藤田六郎兵衛	野村小三郎 奥津健太郎 松田 高義 後見 井上 靖浩	本 田 正邦 梅田 邦久 高橋 瞭一	高島 良一 幸親 梅田 邦久 須部 敏彦 加賀 武田 邦弘	河村総一郎 福井啓次郎 助川 龍夫	河村総一郎 福井啓次郎 助川 龍夫	河村総一郎 福井啓次郎 助川 龍夫	河村総一郎 福井啓次郎 助川 龍夫	
高砂 唯子組 八神 孝亮	天鼓 河村真之介 森本理恵子	鞍馬天狗 吉田 定男 鈴木 房子	吉野天人 吉田 定男 後藤美代子	班女 光松見知子	紅葉狩 河村真之介 中村 多榮	唐船 原田千恵子	一調難波 山本 博通	船弁慶 吉田 定男 遠藤 千代	海士丸 河村 大 野島 淑子	東北 水野 恵子
富耀会会員	久保 真理	大野 龍夫	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	大野 誠	

※初回に限り当日券発売はありません

主催 名古屋観世会

明治村 重要文化財 呉服座で
5月10日 「能楽の集い」
栄謡曲クラブが主催

1つ、悪くいえば、寄せ集めで、非常に不安定であったが、継続は力なりで、今日クラブの皆さまの厚い友情のもとに、安定した謡会を催すことができるのは夢のよう」と回顧しているが、名古屋にはじめて移ってきた愛好者にとつて、「こうした謡会があることは嬉しい」との声もきわめて強い。

きたる五月に催される「能楽の集い」も勿論自由参加、来聴歓迎である。

楽しみながら能に親しむ能楽サロンとして、会結成以来十八年、月例会二百回を数える栄謡曲クラブ(世話人代表、三浦謙介氏)は、きたる五月十日(日)、犬山・明治村の重要文化財「呉服座」で、犬山カラクリ保存会、小牧謡曲連盟協賛、能楽の友社後援で「能楽の集い」を開催することになり、主催、協賛の各団体以外にグループ又は個人での参加を歓迎している。

栄謡曲クラブは、謡曲愛好者による自由参加の組織で、当初は栄能楽堂を中心として毎月欠かさず謡曲会を開催、最近では、各地の舞台、名園などでも例会を開催、世話人の三浦氏は「広汎な能楽愛好者を対象とするので、良きいえば束縛を離れた自由に謡えるグループ、悪くいえば、寄せ集めで、非常に不安定であったが、継続は力なりで、今日クラブの皆さまの厚い友情のもとに、安定した謡会を催すことができるのは夢のよう」と回顧しているが、名古屋にはじめて移ってきた愛好者にとつて、「こうした謡会があることは嬉しい」との声もきわめて強い。

狂言・井上祐一氏
舞台生活50年
で記念の小宴

和泉流狂言方・井上祐一氏は、新春一月十一日名古屋能楽堂で催された風の会で、同氏の舞台生活五十周年を記念して「川上」を上演した。井上氏は昭和二十四年一月に「朝霧」で初舞台をふみ、このとして五十年、狂言共同社のなかで中心的な役割を果たしてきた井上氏に、



井上祐一氏

上家に生まれ、その芸風を継承するとともに、東京在住の狂言師の影響も受け洗練された芸風を身につけ、名古屋狂言界を担っている。「風の会」は名古屋の狂言の活性化を図ろうと、佐藤友彦、井上祐一師らが中心となって平成四年に結成された。

風の会上演の当日午後六時から名古屋・栄のNHKセンタービル東山サロンドで、狂言共同社同人、能楽関係者などを招き、林和利名古屋女子大学教授の司会で祝賀の会が催され、参加者として、小林貞武蔵野女子大学教授、河野光雄名古屋演劇ベントクラブ理事、野村又三郎氏の諸氏が祝辞、花束の贈呈とともに、井上祐一氏から丁寧な謝辞が述べられ、午後八時すぎ終了した。

(写真は、挨拶をする井上祐一氏)

船弁慶

河村総一郎 鬼頭喜太郎
内藤昌子 山田千穂

羽衣

河村真之介 助川龍夫
内田睦子 藤田六郎兵衛
飯富雅介
後見 小島一英 地謡 高島良一 清沢一政
泉 嘉夫 地謡 八神孝充 中川雅章
高橋 瞭一 古橋正邦

〔御来場歓迎〕

主催 富柳原富司忠
附祝言 (五時終了予定)

名古屋能楽堂定例公演

二月十三日(金)
午後一時三十分始
名古屋能楽堂

仕舞 屋島 片山清司 八神孝充
地謡 中川雅章
武田邦弘 正邦

狂言 文山賊 野村小三郎 佐藤融 野村又三郎

楊貴妃

梅田邦久 河村総一郎 藤田六郎兵衛
高安 勝久 柳原富司忠

〔入場料〕

主催 能楽普及事業実行委員会
協賛 能楽協会名古屋支部
前売一般四千円、学生二千円
当日一般四千五百円
学生二千五百円
名古屋能楽堂(電052・231・0088)
チケットぴあ、チケットセン、市内プレイガイド

名古屋観世九阜会定例公演

二月二十二日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組 花月 外山圭一
雲林院 加藤保彦 地謡 坂真太郎
羽衣 高木美智子 小島英明

三輪 中所 宜夫 河村真之介 鬼頭好信
高安 勝久 柳原富司忠 鹿取希世

鶯

狂言 井上祐一 佐藤友彦

弱法師 高橋瞭一 地謡 坂真太郎
駒瀬直也 五木田三郎 奥川恒治

巻絹

駒瀬直也 地謡 坂真太郎
五木田三郎 奥川恒治

玉之段

観世喜之 地謡 坂真太郎
五木田三郎 奥川恒治

鉢木

飯富雅介 元 坂真太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

後見 小島英明 地謡 坂真太郎
親世喜之 高橋瞭一 奥川恒治
観世喜之 高橋瞭一 奥川恒治

附祝言

主催 名古屋観世九阜会
事務所 名古屋南区元塩町一―一七 加藤保彦方
当日券 自由席五千円
学生券二千円
※チケットぴあでの取扱いも始めました(052・320・9999)。

名古屋能楽堂定例公演

三月十三日(金)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

仕舞 網之段 中川雅章 地謡 八神孝充
祖父江修一 嘉夫

狂言 膏藥煉 那の者 井上靖浩 鎌倉の者 佐藤融
後見 井上礼之助

鞍馬天狗

飯富雅介 河村真之介 鬼頭喜太郎
後藤嘉津幸 竹市学
井上祐一

主催 能楽普及事業実行委員会
協賛 能楽協会名古屋支部
名古屋文化振興事業団
名古屋能楽堂(電052・231・0088)
名古屋市文化振興事業団
名古屋能楽堂(電052・231・0088)
チケットぴあ、チケットセン、市内プレイガイド

平成10年2月・3月放送予定

〔2月〕			
●NHK・FM 能楽鑑賞 (日曜日・午前8時から)			
1日 「小塩」	～観世流～	武田 志房	三川 淳生
8日 「百万」	～宝生流～	三川 淳生	佐々木 喜之
15日 「春日龍神」	～喜多流～		
22日 「船橋」	～観世流～		
●NHK教育テレビ			
2月11日(火) 午前10時～11時30分	能「砧」	～観世流～	シテ 関根 祥六
			～NHK能楽鑑賞会から～
〔3月〕			
●NHK・FM 能楽鑑賞 (日曜日・午前8時から)			
1日 「忠度」	～観世流～	野村 四郎	金井 章三
8日 「西行桜」	～宝生流～	金井 章三	金井 欣三
15日 「鞍馬天狗」	～金春流～	金井 欣三	泉 嘉夫
22日 「頼政」	～観世流～	泉 嘉夫	大蔵 彌太郎
29日 狂言「千切木」	～大蔵流～	野村 小三郎	
	「釣狐」	～和泉流～	

演能案内

第17回 名古屋能楽鑑賞会

三月二十八日（土）
午後二時三十分始
名古屋能楽堂

解説 演劇評論家 堂本 正樹

復曲 狂言 鷺 野村万之丞 野村万蔵

能 弱法師

齊藤 信隆 坂苗 融 山本 孝 藤田六郎兵衛
大槻 文蔵 宝生 閑 曾和 博朗

後見 赤松 慎友 寺沢 康之 上野 祐三
泉 嘉夫 味方 幸祐 藤井 完治
山本 正人 野村 四郎 拓司

※能「弱法師」は世阿弥自筆本による

主催 名古屋能楽鑑賞会

事務局 名古屋市中区大幸4-19-26 (岩田方)
TEL 052-722-4000

〔会員無料〕 指定席二万二千円、一万円、七千円
〔臨時会員〕 申し込み、お問い合わせは事務局へ

放送

〔3月〕 NHK教育テレビ

□3月21日(出) 午後3時～午後4時

- ① 能楽界の話題
石橋、宝生流宗家継承披露能から
新しい試み「伽羅沙」ほか
- ② 能囃子による組曲「田園の驟雨」
金春惣右衛門ほか
- ③ 狂言「鐘の音」～和泉流～
野村万之介ほか

□3月29日(日) 午後9時半～11時のうち

狂言「萩大名」
大藏彌右衛門・茂山千作・野村万作
～NHK古典芸能鑑賞会から～

◆深秋から仲冬への舞台点描◆ 「観世会」「宝生会」なのり座「第二回 名古屋能楽堂定例公演」と「大阪梅猶会」

竹尾邦太郎

「鉢木」シテ持六の代動は志房。賢明な見所は察するだろうが、憲法第十九条に謳う「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。」に由る鏡板の松への意志表示。急病欠勤は苦渋の選択であろう。「それが何だ」と息巻く向きも無からうが事実は事実。重く受けとめなければならぬ。さて佐野源左衛門常世、硬骨は祥六の持ち味だろうが志房の常世は内面に粘性を秘める外面の良さ。その機微に清藤を印象付け好演。就中前場、秘蔵の盆歌を深く焚火にと申し出る常世に、思いも奇らずと選るワキ旅僧・閑、そこに割って入るツレ老妻・徹二は、貧窮に予て夫の盆歌道楽を疎んじていた風情、この際とばかりにへただ徒らなる鉢の木を御身の為にとワキに視線を遣うところ、コトを見面白さだした。（一時間37分）

「今参」今参りは即ち新参者（又三郎）、秀句好きのシテ大名・小三郎に抱えられるや巧みに目配りに反応して取り入るが、太郎冠者アド高義にわか仕込みの秀句に鑑賞が出る。しかし固より渡り奉公押れの新参者、剣先鳥帽子がいかにも道化た風で、マイペースに大名を引き込み取り繕うところなど天晴れ、狡猾な味わいに又三郎の力量。（35分）

「殺生石」ワキ勝久、錦襦の沙門帽子に掛絡の、玄翁道人の風格。シテ芳伸、唇厚く切れ長の目の官能的な面が牡丹文唐織によく映り、そこはかなき妖気は中入前、へあら恥かしや、と挑むかにワキにアシラフと、へ（昼は浅間の）夕煙の、でグツと居立つ凄味はシャープ。後シテは小飛出・赤頭、野千のしなやかな華措が軽快であるだけに、化生の奇怪味は薄れたように思えた。（一時間3分、11月9日観世会）

「吉野静」義経を無事落ち延びさせ様と時を稼ぐワキ忠信

や地一杯に後見座へ物着に退くところ、惹きつける。後場は、唐織被さ、ひそと蹲って加持のワキ小聖・勝久を窺うところ鬼気を見せるが、唐織腰に巻くのがもどかしい。折りに三ノ松からの逆襲、ワキを舞台へ押し返し、シテ柱に左手掛けて橋懸からワキを威嚇するのは中々だった。（57分、11月16日・宝生会）

「墨塗」訴訟叶い圓元に戻るシテ大名・融も怒りになった女婿浩には優柔、暇をいすすべきか否かを太郎冠者・小三郎に問う。万事を心得る太郎冠者と純情な大名の胸中を吐露するクセに義経を思慕する心も優しかった。（46分）

「弱法師」シテ朝。遊境を甘受して信仰に縋り、救いを得た心優い少年の印象は、型少な内面の充実を感じさせ清々しい。亀甲花菱地紋彩色縫箔は向と鶴菱文、敷石文腰帯・濃緑水衣も洪く、面は品の良い少年の面慈童を思わせる。（石の鳥居、は舞台に入る前、一ノ松先からさりげなく当てる、梅の香を開き施行を袖に受けるのも慎ましく。居グセの端正は敬虔な心、日想観は時節をなべし、と杖取って立つと正中で簪柱に東門を見て左手片合掌、へ入る日の影、を慕う様なイロエが面白く、貴族の人の行き当る辺りのまごつき様のおとなしさが、キリでワキ雅介を父と知って廉恥を覚えるところに効いた。（一時間3分）

「杭か人か」留守居の脱け出しを牽制された太郎冠者・又三郎、外出と思わせて張込む主・友彦とは露知らず、闇に佇む影に怖々、杭か人かと誰何する。くいの応えに合点の又三郎だが、そのうちにハテと気付け問合のよき。（14分）

「襲上」ツレ巫女が座着き、裏上の象徴出小袖が本幕で出る。先に切戸から出小袖、次いでツレが発つてくる観世との手順の異同は、宝生に肅然緊張の雰囲気濃厚。シテ耕司、六条御息所（ノ生霊）には少々猛々しい嫉妬はシオリも直情、へ今は打たでは、と居立つ激憤はいかにも浅まし。杭ノ段は扇投げ捨て唐織引き脱ぐと大小前から出小袖へ、覗み下ろす

れても頭として馴染まず却って反発する。持て余されて戻されるも拗ねて背を向けたまま、未だ胸に一物の主・高義は気圧され暫時沈黙。何某細君の悪口や鬼共への仕打ちを喋り立てる前の、緊張した空気の無気味。（18分）

「野宮」シテ嘉夫、へ野の宮の森の木枯れ更けて、と独り感懐に浸りかけるところ、「我がこの森の」ワキ旅僧の、問答の先取りがある。名直以下ワキ（雅介）自身はシテワキの問答、掛合も言葉に含蓄、互いの静かなる力が好ましい。後シテは氣骨の老武者実盛の氣魄が見事。強烈な個性を、強々とした足拍子と力一杯の型にアビールし、そこにはもどかしげに見える老いの表現も微妙に、ワキ茂十郎の高僧の風格と相俟って修一的好舞台だった。（一時間31分）

「口真似」酒の相手欲しきの主・忠一郎にシテ太郎冠者・隆平が伴った客は酔狂人・良介。粗相は禁物、とばかりに主は自分の命を懸けて対応せよと言え、主の指示を鵞返りに客に言い返す太郎冠者。純真無慮な隆平の爽やかな口跡と、坦々とした経過のそこはかとない可笑しさが佳。（17分）

「夕顔」シテ恵美子、彷徨する気分の一ノ松、へ山の端の、と

右に速く眺めて一首を詠む心も上の空の趣。楚々として可憐な女人の魅力は大輪の夕顔、端無くも光源氏を惹きつけ、行きずりとも思える恋の、惚さを言う居グセの端正が出色。後シテは露芝文白摺箔着付・淡黄色大口・淡黄長相の姿がいかにあわあわと、序の引く足で些かの取遣はあるも舞は大きく優しい。舞上げて清らかな感謝の氣持は、へ英も、の扇扱いに円滑さが欲しかった。（一時間24分）

「鉄輪」シテ光之助、搦浅黄・紺無地坂斗着付・納戸地無紅縫箔腰巻・茶萌黄段唐織腰折・面涙眼。丑ノ刻詣での途上、常座から間を透かすかに右ウケルへ月選き夜の鞍馬川、の露の滋味は、笠の内に籠る重く暗い情念。

後シテは金沢繁文赤地箔着付・青灰色地金立湧丸紋縫箔腰巻・面襦袢、クドキにへ控られて、と安座シテとる女の哀れ憫惻。ワキ晴明・和幸との対決は神々の堅守、時節を待たんと三ノ松へ敗走気味のトメは左膝着くと立つ。後場は不完全燃焼の湿っぽい印象に思えた。（56分、12月7日・大阪梅猶会・能楽会館）



株式会社 セントラルパーク

本社 名古屋市東区泉1丁目23-36(NBN泉ビル)

PHONE 052-961-6111
F A X 052-953-2910

親世流・金剛流
宗家本発行元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

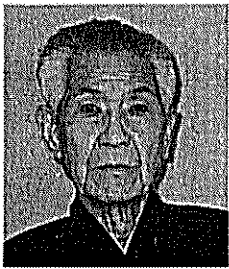
名古屋能楽堂 演能カレンダー

(平成10年3月)

- 13日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組①面)
- 22日(日) 名古屋壺泉会 (無料) (番組②面)
- 28日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料) (番組②面)
- 31日(火) 龍鼓会 (無料) (番組③面)
- [4月]
- 5日(日) 梅若嶺義27回追善名古屋獨演会春の大会 (無料) (番組③面)
- 10日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組④面)
- 12日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組④面)
- 18日(土) 能で観る平家物語シリーズ (有料)
- 19日(日) 邦謡会社中発表会 (無料)
- 25日(土) 青陽会定式能 (有料)
- 26日(日) 久田観正会春季大会 (無料)
- 29日(水) 中日能 (1部・2部) (有料)

熱田神宮能楽殿催能

- [3月]
- 29日(日) 邦謡会 (無料)
- [5月]
- 10日(日) 下田雄真会中部地区連合会 (無料)
- 17日(日) 初陽会大 (無料)
- 23日(土) たまも花会 (無料)
- 24日(日) 名古屋正花会 (無料)
- 31日(日) 幸友会 (無料)



井上 禮之助氏

第39回CBC クラブ文化賞「くちなし章」 井上禮之助氏が受賞

多年にわたる功績を顕彰

狂言方相泉流・井上禮之助氏は名古屋狂言界の長老として、多年にわたる功績を顕彰された。このたび第三十九回CBCクラブ文化賞(くちなし章)を受賞、二月二日(月)午後五時からホテルオークラレストラン特別会場で授賞式が行われた。CBCクラブ文化賞は、すぐれた技術をもっていたり、社会的に意義ある仕事をしていながら、一向に報いられず、また報いられようともせず、黙々と自分の使命をさも当然のように果たしている人がある。そうした人をCBCクラブで表彰しよう。(中部日本放送「黙もく一芸一能」より)という趣旨で昭和三十五年制定され、今日まで三十八年間くちなし章の名で知られている。能、狂言界としては、昭和四十六年、ワキ方高安流西村弘敬氏が受賞、また笛作り師菊田東徳氏が顕彰されている。

〔井上禮之助氏略歴〕
祖父に名人井上菊次郎、父新三郎の長男として、大正四年一月名古屋で生まれる。
大正十一年六月興能楽堂にて初舞台以後、布池能楽堂、焼失後は御園座、大池町の商工会議

名古屋能楽堂 老松の鏡板

陽春には新しい装い

名古屋能楽堂の鏡板については本紙既報のように「名古屋能楽堂に鏡板を寄贈する会」が主体となつて募金活動が行われ「老松」の制作は松野秀世画伯によつて制作がすすめられてきている。「寄贈する会」世話人からの本紙に寄せられた情報によると、松野画伯は二月十一日まで尾張旭市の広徳寺を制作の仕事場として描かれてきたが、お寺の事情などもあつて二月十二日から中川区の魚津工務店の仕事場で引きつづき仕上げに向けて進捗している。

当初の昨年末までの完成予定は下絵の手直しなどがあり延びているが、「いくつかの紆余曲折もあつたが関係者一同努力をつづけており、三月中旬には完成の予定」とされておられ、名古屋能楽堂竣工一周年の四月には舞台にお目見得することが期待されている。

関西観世花の会

3月24日 大阪山本能楽堂

女性能楽師の横のつながりによる会として、女性友人の会「関西観世花の会」が結成され、昨年三月神戸でその第一回公演が行われたが、その第二回公演がきたる三月二十四日(火)大阪中央区徳井町の山本能楽堂で催され、能、松風、素謡、舞囃子、仕舞が上演される。午後一時始、全自由席六千円。

番組は次のとおり。中部から近藤幸江、前野郁子の両師が出演する。舞囃子「西王母」(シテ池内頼子)

仕舞「難波」(森壽子) 屋島(前田和子) 梅枝(岡田すみ子) 「天鼓」(前野郁子)

素謡「藤戸」(シテ勝部育子、仕舞「三輪」(上田知代) 「雁」(佐伯紀久子) 「班女舞」(森勝子) 「阿彌」(藤井千鶴子) 「船弁慶」(山崎美紗子)

舞囃子「野宮」(橋本貞子) 「山姥」(若ノ型) (今村宮子) 仕舞「老松」(生一左兵衛) 笠之段「山中義経」(花筐) (クルイ) (山本勝) 「女郎花」(大

45周年記念 広田後援会能

4月5日 金剛能楽堂

第九十回広田後援会能は、四月五日(日)京都・金剛能楽堂で催される。とくに今回は四十五周年になり、記念として能「内外詣」狂言「素袍落」が上演される。

演能は次のとおり。

舞囃子「熊野」花之留(シテ広田隆一)

狂言「素袍落」(茂山千作、茂山千三郎、茂山七三三)

仕舞「西行桜」(広田泰三)

能「内外詣」(シテ広田幸枝、ツレ広田泰能、ワキ植田隆之亮)

主催 広田後援会、指導・宗家金剛能

入場料 前売券四千五百円、当日券五千円、学生券二千円(当日売)

電話申込み取扱いは、広田後援会〇七五(七八二)一八八五、(七三三)九二二三

故大槻十三、大槻秀夫師進善 能「桧垣」「鷺」

3月21日 大槻能楽堂

大槻十三師の三十七回忌、大槻秀夫師の七回忌追善能が三月二十一日(祝)大阪・大槻能楽堂で催される。主催は大槻文蔵師・大槻清韻会。

能「鷺」(シテ大槻一文、ツレ梅若六郎、ワキ福王茂十郎、笛・野口伝之輔、小鼓・大倉源次郎、大鼓・大井忠雄、太鼓・三島元太郎、主後見片山九郎右衛門、地頭山本勝一)

能「桧垣」(シテ大槻文蔵、ワキ宝生南、笛・杉市和、小鼓・荒木照雄、大鼓・山本孝、間・茂山千之丞、主後見・観世清和、地頭・観世鏡之丞)

ほか狂言、一調、連吟、仕舞、正午始、

入場料 指定席A二万円、指定席B一万五千円、自由席一万円、問い合わせは、大槻能楽堂(電話06・761・8055)

名古屋能楽堂定例公演

三月十三日(金) 午後一時三十分開演

名古屋能楽堂

狂言 膏薬煉 都の者 井上 清浩 鎌倉の者 佐藤 俊 後見 井上礼之助

仕舞 網之段 村 武田 邦弘 地謡 八神 孝元 祖父 江修一 加賀 敏彦

能 鞍馬天狗 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭喜太郎 後藤嘉津幸 竹市 学

舞囃子 久田 徹二

久田 徹二 河村真之介 柳原 麻里 上田 宜照 久田 徹二

後見 中川 雅章 地謡 黒田 須部 清沢 一政 幸親 梅田 邦弘 祖父 江修一 正邦

主催 能楽普及事業実行委員会 名古屋市中千種区千種二丁目18-18 名古屋文化振興事業団

協賛 能楽協会名古屋支部

〔入場料〕 前売四千円、学生二千円 (当日一般四千五百円、学生二千五百円) (前売券取扱いは) 名古屋能楽堂(電話052・231・0088) チケットぴあ、チケットセゾン、市内プレイガイド

平成10年3月・4月放送予定

- [3月]
- NHK・FM 能楽鑑賞 (日曜日・午前8時から)
- 15日 「鞍馬天狗」 ~金春流~ 金春 欣三 泉 嘉夫
- 22日 「頼政」 ~親世流~ 大蔵彌太郎 野村小三郎
- 29日 狂言「花盗人」 ~大蔵流~
- 「釣狐」 ~和泉流~
- [4月]
- NHK・FM能楽鑑賞 (日曜日前8時から)
- 5日 「杜若」 ~親世流~ 山本順之ほか
- 12日 「腰」(右近) ~宝生流~ 三川 泉ほか
- 19日 「桜川」 ~親世流~ 五木田武計ほか
- 26日 「花月」 ~金春流~ 金春晃実ほか
- NHK教育テレビ
- 3月21日(土) 午後3時~午後4時
- ① 能楽界の話題 石橋、宝生流宗家継承披露能から新しい試み「伽羅沙」ほか
- ② 能囃子による組曲「田園の驟雨」 金春惣右衛門ほか
- ③ 狂言「鐘の音」 ~和泉流~ 野村万之介ほか
- 3月29日(日) 午後9時半~11時のうち 狂言「萩大名」 大蔵彌右衛門・茂山千作・野村万作 ~NHK古典芸能鑑賞会から~

三月雅日記

(185)

萬葉の花紀行

(19)

えと文 二井 栄逸

なずな

能、求塚前段の前半は、春まだ浅い生田の小野に、若菜を摘む女性の一団を登場させて、美しい謡と型のうちに、豊かな情趣をただよわせるところです。

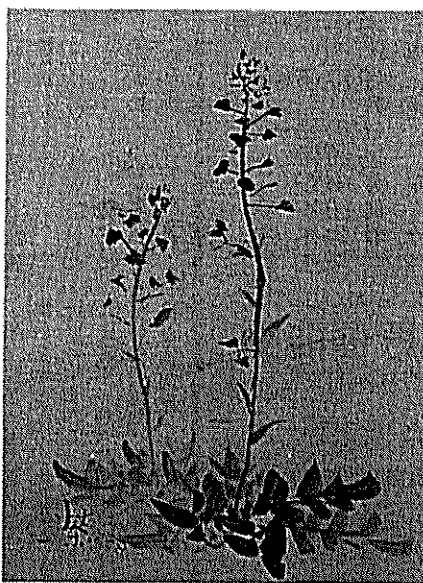
若菜は古くから、正月七日に万病を除くとして、これをあつものにして食べる風習が伝わっています。正月七日を若菜の節句とも、人日(じんじつ)の節句ともいいます。

五節句の一つになっていきます。若菜は、せり、なずな、おぎょう(ぎょうとも)、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろの七種です。

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ
——山辺 赤人——
(萬葉 卷八の一四二七)

歌の意は、明日からは、若菜をつもうとシメを結っておいた野に、昨夕も今日も雪が降っているという意味です。歌の中の標めし野というのは、今でも、共有地の野や山に入って、シバやカヤを刈るときに、数本のカヤの頭を結んでシメをするところがあるそうです。

ついでに、ナズナの葉はロゼットと言っ、根出葉が地面に放射状に広がっています。スケッチは、三月から四月の姿で、ロゼットから莖をのびし、白い花や三味線のばちのような実をつけた姿です。七草節句の時は、ロゼット風にのびた葉だけでその葉を食べる理です。



国立能楽堂で邦謡会能

邦謡会(梅田邦久師主宰)は、東京・国立能楽堂で邦謡会能を開催してきています。が、本年は第二回を迎え、きたる四月四日(土)梅田師による能「木賊」と観世清和宗家による能「葵上」が上演される。演能は次のとおり。午後一時始。

能「木賊」シテ梅田邦久、ツレ分林道治、味方玄、片山伸吾、子方・田中義人、ワキ宝生剛、ワキツレ井藤鉄男、則久英志、高井松男、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曾根博朗、大鼓・柿原崇志、後見・片山九郎右衛門、武田欣司、地謡観世鏡之丞、観世曉夫ほか
狂言「入間川」野村万蔵、野村良介、野村万之丞
舞囃子「実盛」観世鏡之丞
舞囃子「碓」片山九郎右衛門
能「葵上」梓之出・空之折・シテ観世清和、ツレ片山清司、ワキ宝生剛、ワキツレ大日方寛、間・野村品人。
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・河治、後見・観世鏡之丞、武田欣司、地

「道成寺」古式 宇高通成後援会

3月29日 金剛能楽堂

宇高通成後援会では三月二十九日(日)金剛能楽堂で「第十回能楽しむ会」を開催し、「道成寺」古式を上演する。午後二時始。

狂言「道成寺」(茂山七五三) 能「道成寺」古式(シテ宇高通成、ワキ植田隆之亮、ワキツレ広谷和夫、和田英基、笛・杉村和、小鼓・幸清次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・前川光長、間・茂山正邦、茂山千五郎、後見・金剛殿、広田泰三、広田幸松、地謡・豊嶋三千春、松野恭憲、今井清隆ほか、鐘後見・金剛水蓮ほか)
前売券A・一万五千円(指定席) B・一万二千円(一般席) C・六千円(二階自由席)

平成10年度金沢能楽会定例会

9月に別会能開催

金沢能楽会主催の平成10年度の定例会は、金沢市の石川県立能楽堂で開催されているが、四月から五月に別会が催される。

四月十二日(日) 能「八鳥」山田太佐久 狂言「竹の子」野村 英丘 能「藤」 玉川 博
五月三日(日) 能「蟬丸」佐野 由於 狂言「柿山伏」鍋島 憲 能「融」 高橋 右任
六月七日(日) 能「羽衣」金森 孝介 狂言「地蔵舞」野村 英丘 能「高野物狂」佐野 萌
七月五日(日) 能「小袖曾我」寺田 成秀 狂言「昆布売」炭 哲男 能「雲雀山」 蔵 俊彦

壺泉会大会

三月二十二日(日) 午前九時半始 名古屋能楽堂

番組
仕舞 弓八幡 黒田 博
仕舞 松 虫キリ 恒川明日香
杜 若キリ 水福友香子
松 風 平野 園
竹生鳥 佐藤 華織

素謡 羽衣 長屋 文裕 中川 真澄
攝待 中川万里奈 倉田由紀子 藤島雄一郎 篠田 三郎
山姥 内藤 悦子 石川 晴子
隅田川 中川万里奈 橋本不二子 倉田 一郎
俊寛 長屋 文裕 戸松 博史
仕舞 水無月鼓 内藤 悦子
独吟 勳進帳 柴田うた子 南方 幹子

素謡 檜垣 宮部 悟 大槻 文蔵
舞囃子 高砂 前川 和子 河村総一郎 鬼頭喜太郎 福井啓次郎 鹿取 希世
囃子 朝長 大森萬里子 後藤孝一郎 鹿取 希世
能「語り」前「いかに申し候」ヨリ「青墓の宿に帰れり」マテ
舞囃子 小袖曾我 亀井 信子 寛 敏一 鹿取 希世 山本 和子 後藤孝一郎
能 乱 片岡な、子 高安 勝久 河村総一郎 鬼頭喜太郎 福井啓次郎 鹿取 希世 及之舞

仕舞 嵐山 中川万里奈
天鼓 中川 真澄
素謡 定家 寄田 嘉子 八神由季代 卒都婆小町 大池 長人 泉 嘉夫 八神 孝充

〔御来聴歓迎〕

舞囃子 松 嶋田都彌子 寛 敏一 藤田六郎兵衛
花 筐 八神 敦子 吉田 定男 藤田六郎兵衛
融 石川 晴子 寛 敏一 助川 竜夫 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
十三段之舞
加藤 春枝
半能 高砂 飯富 雅介 吉田 定男 助川 竜夫 榎元 正樹 柳原富司 鹿取 希世
狂言 竹生鳥参り 野村又三郎 野村小三郎 後見 松田 高義
仕舞 巴 泉 雅一郎
昭君 泉 泰孝

第17回名古屋能楽鑑賞会

三月二十八日(土) 午後一時三十分始 名古屋能楽堂

解説 演劇評論家 堂本 正樹

復曲 狂言 鶯 野村万之丞 野村万蔵
能 弱法師 大槻 文蔵 坂苗 融 山本 孝 藤田六郎兵衛 間 野村万蔵 則久 英志 曾根 博朗
後見 赤松 嘉夫 武富 康之 上野 祐三 寺沢 幸祐 藤井 完治 味方 玄 野村 四郎 山本 正人 上田 拓司

主催 名古屋能楽鑑賞会 事務局 名古屋市中区大幸4-19-26 (岩田方) TEL052-722-4000
〔会員無料〕
〔臨時会員〕指定席一万二千円、一万円、七千円
〔申し込み、お問い合わせは事務局へ〕

龍 鼓 会

三月三十一日(火) 午前九時半始

名古屋 能 楽 堂

番 組

連調賀 茂 助川 龍夫 伊藤 幸祐 助川 治

舞囃子 右 近 富田 雅子 後藤嘉津幸 杉 市和

吉野天人 今沢 美和 河村真之介 日比野逸子 後藤嘉津幸 竹市 学

狸 々々 三吉 徹子 吉田 定男 荒井以久美 福井啓次郎 杉 市和

玄 象 須部 市 吉田 定男 高橋 昭若 後藤嘉津幸 大野 誠

山 姥 祖父江修一 河村総一郎 内田 睦子 柳原富司忠 鹿取 希世

難 波 鷺野未千代 河村真之介 鷺野 令奈 柳原富司忠 杉 市和

邯 鄲 清沢 一政 算 敏一 川口志満子 後藤孝一郎 鹿取 希世

獨鼓 鶴 龜 熊沢忠美子 服部 安子 瀬戸三津子 真壁 紹子

羽 衣 中所 宜夫 岩崎 雅大

雲 林 院 近藤 幸江 河村真之介 小井須磨子 福井啓次郎 竹市 学

卷 絹 梅若 修一 河村総一郎 鷺野未千代 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

一調 山 姥 関根 知孝 入江 知子

遊 行 柳 野村 四郎 井美 昭子

野 守 武田 宗和 橋本 和子

(能) 西 王 母 坂部 恭子 吉田 定男 中島 康夫 柳原富司忠 竹市 学

(能) 融 究 古橋 正邦 河村総一郎 彦坂 夏子 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

(能) 葛 城 治田 英子 河村真之介 鈴木 崇史 柳原富司忠 鹿取 希世

(能) 狸 々々 加藤 誠子 河村総一郎 米山 泰子 後藤嘉津幸 大野 誠

一調 小 塩 山本 博通 川瀬 絹子

唐 船 武田 邦弘 佐藤 英雄

能 菊 慈 童 山本 勝一 飯富 雅介 寛 敏一 中川 芳子 橋本 幸 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

連調 紅葉狩

狸 々々

鞍馬天狗

野 守

和合之舞

龍 田

絃 上

連調 六 浦

枕 慈 童

(能) 藤

三 笑

獨鼓 右 近

胡 蝶

養 老

六 浦

須磨源氏

杜 若

龍 田

竹生島

番外 一調 春日龍神

西行桜

昭 君

後見 山本 博通 地謡 高島 良一 中野 宜夫

植田 規子 安福 幸子 中田 美智子 大塚 松子 山田 典子 渡辺 和子 田村 信子

千葉 美子 吉田 玲子 田淵 裕枝子 金子 恵美子 上沼 弘子

松本 文子 赤松 千恵子 中村 栄子 中村 瑞枝

岩本 睦子 狭間 かつみ 岩本 信子 高橋 成子

野村 四郎 寛 敏一 宗像 市和 福井啓次郎 杉 市和

鈴木 マチ子 河村総一郎 長阪 清子 後藤孝一郎 鹿取 希世

森 峯子 河村総一郎 小林 福子 後藤嘉津幸 大野 誠

神品 富士子 神品 幸子 中村 睦子 小野 テル子

鈴木 節子 山本登美子 志摩 桂子 栗田由紀子 松原 桂子

須賀 幸子 塩崎 孝子 吉岡 一恵 徳水 みどり

坂井 智子 富田 笑微子 氏家 良子 片岡みのり 柿山 千代子

衣斐 正宜 広中 みどり

前野 郁子 吉田 定男 船橋 里美 柳原富司忠 大野 誠

佐治 光幸 河村真之介 足立 由起 柳原富司忠 竹市 学

林田 哲子 吉田 定男 滝川 五月 後藤孝一郎 杉 市和

松山 幸親 吉田 定男 山内 弘司 後藤孝一郎 鹿取 希世

中川 雅章 河村総一郎 伊藤 昌子 柳原富司忠 杉 市和

高橋 瞭一 吉田 定男 大野 功子 後藤孝一郎 大野 誠

竹内 澄子 河村真之介 高科 峰子 後藤嘉津幸 竹市 学

久田 徹二 池田 茂

梅田 邦久 鬼頭喜太郎

泉 嘉夫 観世 元信

主 催 助 川 龍 夫 名古屋市中村区下米町三二二七 電話〇五二(四五二)九六一一

梅若猶義二十七回忌追善 名古屋 猶諷会春の大会

四月五日(日) 午前九時始

名古屋 能 楽 堂

番 組

狂言 花 争 井上 靖浩 佐藤 融

舞囃子 杜 若 井藤美枝子 服部志ま子 紅葉狩 牛田 早織 政木美貴子 飯盛 興子 社本千寿子 岩田 宏子

弱法師 上 加藤 清美 福原 真弓 今枝 早苗 安田 明義 梅田 てる 梅若 盛彦

舞囃子 卷 絹 田辺 和水 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取 希世

邯 鄲 榎橋 重聡 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取 希世

海 五段替ノ型 河会 敦子 松久 素子 鬼頭喜太郎 鹿取 希世

連吟 鸚鵡小町 梅若 盛彦 梅若 敏子 梅若 盛義

披キ 清 經 飯富 雅介 後藤孝一郎 鹿取 希世 梅若 敏子

披キ 隅田川 富田みどり 野々垣芳子 小寺 好子 堀 喜久子

舞囃子 檜 垣 井上 種子 岡田 朗詠

舞囃子 花 筐 篠田 幸子 河村総一郎 鹿取 希世 後藤孝一郎

能 砧 梅若 善久 高安 勝久 福井啓次郎 藤田六郎兵衛 鈴木 八寿 河村総一郎

舞囃子 羽 衣 後見 梅若 修一 地謡 橋本 雅一 池内幸三郎 岡田 朗詠 寺岡 佑子 梅若 盛彦 梅若 盛義 井上 生香

濱島十一子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

敦 盛 山崎 壺子 吉田 定男 藤田六郎兵衛 後藤孝一郎

舟 辨 慶 前 中村 明美 吉田 定男 藤田六郎兵衛 福井啓次郎

安 宅 小松 勝彦 吉田 定男 藤田六郎兵衛 福井啓次郎

歌 占 梅若 盛彦 吉田 定男 藤田六郎兵衛 福井啓次郎

西行桜 梅若 盛彦 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

(御来聴歓迎) (終了予定 午後五時三十分頃)

主 催 名古屋 猶 諷 会 梅若 盛 義

朝日カルチャーセンター開講三十五周年を記念して、多彩なイベントが企画されているが、その幕開けとして、狂言師野村萬斎氏による特別講座が四月三日、名古屋国際ホテルで開催される。主催・朝日カルチャーセンター、後援朝日新聞社、名古屋国際ホテル。

野村萬斎氏は、NHK連続テレビドラマ「あぐり」のエイスケ役で話題を集めるなど、狂言のほかにも現代劇出演で幅広く活躍している若手狂言師の旗手である。

講座のテーマは、「野村萬斎 狂言を語る」で、第一部午前十一時から「対談」。聞き手は名古屋女子大学教授林和利氏、さらに昼

食をはさんで、萬斎氏の活躍の軌跡のビデオ上映、一時から「萬斎氏を囲んで」参加者の質疑にこたえる。

定員は二百人、申込順に座席指定、会費一般一万九千五百円、会員一万八千五百円(消費税込)

問い合わせ、申し込みは、朝日カルチャーセンター柳橋教室(電話052・581・3631)

◆短 信◆

名古屋能楽堂では、三月二十一日(土)から四月十二日(日)まで、展示室で「道成寺展」を開催、装束、面などを展示する。

地謡上田貴弘、笠田修(か)

あさひ能は、平成七年十一月に震災の復興の願いをこめて、震災後に残った数少ない繁華街のなかにある朝日ホールで初演、朝日能として五回上演された。このたびお客の要望、また演目もホールでの上演に限界があり、新しく能楽堂でスタートするに当たって、「あさひ能」として名を改めて上演されることになったものである。なお上演の前に、当日の演者とアナウンサーの対談を設け、観客の方々の理解を深めるよう企画、設置された。

演能の記録

第6回あさひ能

湊川神社能殿で

神戸

社団法人上田親正会、アイト・エイト・神戸実行委員会主催の「第6回あさひ能」は三月一日、湊川神社能殿で開催。狂言(宗詔)「茂山七五三」番竹忠重、高井秀規、熊鞍馬天狗(シテ上田拓司、子方上田宜照、ワキ植田隆之亮、間、茂山宗彦、

演能案内

名古屋能楽堂定例公演

四月十日（金）午後六時三十分始

名古屋市中区三の丸一丁目一
電話052・231・0088

仕舞

〔喜多〕西行桜

長田 駿 和谷 衡市
長島 茂 大村 定

〔親世〕嵐山

祖父江修一 地謡 高橋 昭博
須部 嘉夫

〔和泉〕成上り

太郎冠者 野村小三郎 主人 井上 靖浩
すまじ 野村又三郎 後見 松田 高義

〔喜多〕忠度

飯富 雅介 河村総一郎 竹市 学
相元 正樹 後藤嘉津幸

〔入場料〕

前売一般 四千元
学生 二千円
当日一般 二千五百円
学生 一千五百円

主催 能楽普及事業実行委員会
名古屋市中区三の丸一丁目一
名古屋文化振興事業団
協賛 能楽協会名古屋支部
（前売券取扱）名古屋能楽堂（電話052・231・0088）
チケットぴあ、チケットセゾン、市内プレイガイド

名古屋観世会定例公演（第二回）

四月十二日（日）十二時半開演

名古屋能楽堂

能

〔小高〕一英

山本 勝一

〔通〕盛

中村 和夫 寛 敏一 助川 竜夫
中村 宜成 柳原富司忠 竹市 学
井上 靖浩

〔後見〕

武田 雅章 地謡 加藤 敏彦 古橋 正邦
高橋 昭博 梅田 邦久
祖父江修一 久田 徹二

〔鈍根〕草

井上 祐一 佐藤 融
後見 井上礼之助

仕舞 屋島 祖父江修一
采女 中川 雅章 地謡 本田 徹二
藤戸 山本 順之 小島 一英 一政

〔半〕

梅若 六郎 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世
後藤 友彦

〔附祝言〕

高島 良一 古橋 正邦
松山 幸親 武田 邦久
須部 一政 梅田 邦久
清沢 中川 雅章

一九九七年師走の舞台から
第三回名古屋能楽堂定例公演
「壺泉会」「久習会」「第二回尾州座」

竹尾 邦太郎

「千鳥」溜まった付けをその儘に、酒屋・祐一の虚実を尽くした駆け引きに知恵を絞るシテ太郎冠者・友彦、口も八丁手も八丁のあざとさが際立つのも酒屋が好人物に過ぎるからか。してやったり、の太郎冠者へ喝采が送られず酒屋へ同情が集まりそうである。主は融。（38分）

「海人」シテ正宜。他国の同業を羨み諸念の心を言うサシ。下歌を省き直ぐワキ雅介との問答。ために逞しい海女の印象は母性愛の発露、玉ノ段の厳しさは、乳の下をかき切り珠を押し籠め、の型の具象に鮮烈。へ剣を捨て、と扇捨てて小さく廻り安座する呼吸も、危機を逃れ得た安堵の吐息、地（良雄・輝和ら）と相俟ち上々。後シテ龍女は面泥眼でなく橋姫、黒垂・龍殿・緋大口・赤地長絹。地との拵合に経を読むと、押し載せて二つ折りに子方へ進み、左手へ渡し舞となる。燃えるような赤い装束に、早舞は情熱的

出の呼掛けに非ず常の如く出るも、地取（信之・利之ら）にワキ正で右膝着いて木葉を置く直ぐ立ち、サシ下歌・上歌を省き植樹を怪しむワキと問答になる。呼び掛けて先に言葉の掛けるか、不意を突かれて返答をするか、イニシアチブ（主導権）の在り方をみれば本来の小書演出、一気に悲劇の場の狼狽に僧を案内した方が、と思わぬでもない。その悲劇のヒロインの、事跡を言うシテの語りから中人への悲愴な気持ちは、中入地へ及びなき水の月、と薄く右ウケて下を見ると、へ狼狽の、と詰メルところに極まる。

後シテは采女ノ霊、水に浮遊するかに白地葉平婆文の箔を抜いて出ると二ノ松にひそめ沈み、へありがたや、とサシ。藍色大口に白地長絹、髪帯は白地での撫子文を水草の河骨文のものに替え、水をイメージする繊細は、へ池の運の、と被衣を脱いで立ち、へよくよく引ひ給へよ、と遠くワキを見込むところ、縋る思いも切ない。成仏を約束され、変成男子に再生の自信はへ頼もしいや、と舞台に入ると返シに大小前廻り、クリ・サシ・クセを省き序ノ舞になつた。

楚々とした舞は途中一ノ松に抜け、勾欄に寄つて扇カサシ下を見ること暫時、様々な思いを沁々反芻するからである。舞台に戻ると正先に沈み、ハネ扇から右連手扇持ち替へ右袖返すとサシヒラキは水騒ぐ趣。キリは二ノ松、左袖被いて静かに波に沈む心持に清涼の感があった。

（1時間41分・12月14日・壺泉会）

「舟ふな」主・右近は「ふね」、太郎冠者・祐介は「ふな」に固執して古歌の例を引用に及ぶが主は一首しか知らない。対抗策にこの一首を小声やら早口やらで強引に凌ぐがそれも限度。応酬に大量の右近の軽妙は、付け上がる祐介にビシヤリ一言、「時々は主にも負けて居よ」の重みにも巧味。

「藍染川」ワキ方の重習で稀曲。ワキ太宰府ノ神主・敷弘を慕いシテ都ノ女・亮が子（吉村勇輝君）を伴い西下、投宿先のワキツ

レ左近尉・能弘に文を託すが、神主ノ妻アイ右近は返事を捏造し、絶望の女は入水。実を知った神主が鮮生を祈念すると、後シテ天満天神が光臨して奇蹟を暗示する。

前シテは白々とした面曲見（？）・襟浅黄・白摺箔着付・白浅黄段蒲公英文無紅唐織、へ父を尋ねて、が思いたつぷりなら、文の委託に快諾を得「あーら嬉しや候」と喜ぶところ手を打たればか候。二ノ松で受け取るアイは文を勝手に開封して内容に憤怒し、文を二つに裂くと丸めて握り潰す激しさを、右近の巧さは舞台を締め、返事を待ち帰るワキツレ、それが渡される前に両手もどかしげに差し出すシテの、期待が裏切られ悲歎場は、へ孤児となすべき事に、子と共にシオルところや、初回（久馬・久太郎ら）の切り、自我を覚悟してへ一人子を残し置く悲しさ、に再びシオルところ、更には子に覚悟の程を察知されて語気荒れる「うたてやな父こそ変り給ふとも」が一転詠嘆調にへ母が帰さる待ち給へ、となること、また更に中人地の中、へ亡き跡如何と、と類れるかに腰を折り下居に憂き身をシオリ、へとにかくに、と抱うように子を見て立ち、

「木六駄」シテ太郎冠者・又三郎、角梅を主、陸行から託されて思わず綻ぶ顔が、雪道を峠の茶屋・小三郎に辿り着いて樽を抜く相好に重なる。その雪道は一ノ松、真黒になつて降る雪を殊更に仰ぐことなく、笠の楯の先に呆然と見るところに雪の深さが知れる。

「飲む気になつては爛をする間も待てん」寒気、それを伝える身体言語の微妙は飲んで小舞「柳の下」の自己陶醉へ。「いっせ皆飲うでしまはう」の騎虎の勢いは再び牛を追う下山の途次、火照った顔に「雪のちらりちらり」とかかると、伯父・高義宅に着いてからは、伯父が太郎冠者持参の文を読まず、「木六駄」の何たるかも問わないのが物足りなかつた。

（1時間46分・12月20日・第二回尾州座公演・熱田神宮能楽殿）

〔三輪・白式神楽〕シテ邦久、一九八五年の片山博通追善以来当地十三年振りの再演。小書はもと片山家のもの、先回地謡（九郎右衛門・朗ら）同様片山一門（慶次郎・邦弘ら）が主。作物は笛座角かけ引廻は師家へ遠慮か白に非ず紫。前は里女、へ軒の松風うちしぐれ木の葉かき敷く庭の面、と右ウケ薄く仰ぎ、また下を見ること、山栖の秋懐一人を感じさせる。

後は、へ神体新たに、と引廻下ると、注連を張つた背竹も滑々しい作物に、面増・喝食登・襟白二・白綴着付・白大口・雷輪地紋白単狩衣（金霞文）を衣紋に着た神々しい姿が、左手の木綿幣付神を膝に立て床几に居る。クセ中、へおだまき（麻糸の玉）に、と作物を出る。昼は姿を見せない夫、その跡を、裳裾に縫付けた糸を辿ればその先は、という三輪の神婚説話、淡々と見せ、昔語りはへ恥かしや、とクモルのも自製の趣。へ千早ぶる、と作物へ神を振つて押し載くと舞は途中正先に下居、神を載せ打ち振り立ってスミから常座へ、小廻り二度、ワカになる。へ天の岩戸を引き立てて、に進み出て両袖被きへ常間の世と、なつて下居すると、八百万の神はへこれを歎き、と立ち神楽である。この辺り、天の岩戸神話のイメージ鮮やか。細かく羨る神の持技を扇に替え、神舞に直ると囃子が鎮まるなか三ノ松へ抜け、右左に小廻り各二度、袖被き扇面に当たる翁の型に三鼓の流シと笛でするすると作物に入り下居、リズムミカルな舞の流麗も亦鮮やかである。

地となりへその時に、と左袖返シ雲ノ扇に岩戸を開ける態は、作物出てキリの数拍子から舞台大きくなる。へ今更何と磐座や、とワキへサシヒラキ、へその関の戸の、と橋懸へ、へ夜も明け、と一ノ松、袖巻上げそのまま幕に入り、ワキが常座に出て合掌留、邦久の精彩は静閑気品のワキ勝久、アイ里人・祐一の謹直、六郎兵衛・啓次郎・総一郎・龍夫の囃子の力演と相俟ち好舞台だった。後見は欣司・道治。

（1時間46分・12月20日・第二回尾州座公演・熱田神宮能楽殿）

観世流・金剛流
宗家本発行元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231) 1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7 9 8 4
F A X (052) 733-2 8 3 7
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円
一 部 1 0 0 円

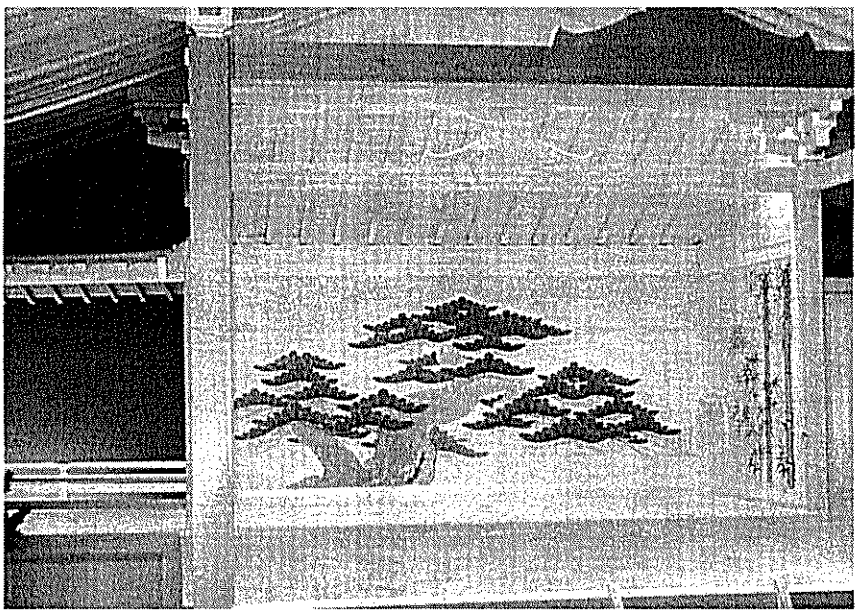
演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

- [4月]
- 10日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
 - 12日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
 - 18日(土) 能で観る平家物語シリーズ (有料) (番組①面)
 - 19日(日) 邦謡会社中発表会 (無料) (番組①面)
 - 25日(土) 青久陽会定式能 (有料) (番組②面)
 - 26日(日) 久田観正会春季大会 (無料) (番組②面)
 - 29日(祝) 中日能(1部・2部) (有料) 番組
- [5月]
- 2日(土) 豊水会春季大会 (無料)
 - 4日(月・休) 幸謡 (無料) (番組③面)
 - 5日(火) 古橋正士3回忌追善能 (有料) (番組③面)
 - 8日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組③面)
 - 10日(日) 翠謡会春季大会 (無料) (番組③面)
 - 16日(土) 名古屋観世九章会 (有料)
 - 17日(日) 名古屋異会大会 (無料)
 - 23日(土) 能で観る平家物語シリーズ (有料)
 - 24日(日) 第41回狂言やるまい会 (有料)
 - 30日(土) 松月会 能と囃子の会 (無料)

◆熱田神宮能楽殿◆

- [5月]
- 10日(日) 下田雄謡会中部地区連合大会 (無料) (番組③面)
 - 17日(日) 初陽会大会 (無料)
 - 23日(土) 初陽会大会 (無料)
 - 24日(日) 初陽会大会 (無料)
 - 31日(日) 初陽会大会 (無料)
- [6月]
- 5日(金) 熱田祭奉納能 (無料)



名古屋能楽堂に設置された老松図鏡板

名古屋能楽堂に「老松図鏡板」設置

年余にわたる運動実る

名古屋能楽堂の鏡板は、既報のように「名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会」が主体となって募金活動をくりひろげ、昨年夏に、日本画家・松野秀世画伯により制作がすすめられてきたが、このほど完成。三月二十七日名古屋市役所市長室で、能楽協会名古屋支部(支部長泉嘉夫氏)より、名古屋市への贈呈式が行われ、四月一日、魚津工務店により「老松図鏡板」設置工事が行われた。

名古屋能楽堂では、新しい鏡板設置にともない、四月四日に報道機関に公開、五日の名古屋猿蓑会の演能から一般公開としてお目見得した。

新しい鏡板は、幅六メートル、高さ二・八メートル、松野画伯の渾身の大作としての老松図であるとともに、「名古屋に公立の能楽堂」という二十万人の建設請願署名に表わされた能楽愛好者および一般市民の湧きでるような物心ともども熱意と要望が「老松」の鏡板に凝集したものと見える。

能楽協会名古屋支部の泉嘉夫支部長は「ほぼ一年余にわたり、皆

様と努力を積み重ねて参りました名古屋能楽堂へ老松図鏡板を贈る計画は、予想を越えた多くの方々の協力、松野秀世画伯のご努力、市のご好意などによって完成の運びとなったことを厚くお礼申

芸術選奨文部大臣賞

観世栄夫氏が受賞

芸術の分野で昨年一年間に優れた業績をあげた人たちに贈られる一九九七年度(第四十八回)芸術選奨の受賞者が三月十六日文化庁から発表され、古典芸術の部門で観世流能楽師・観世栄夫氏(七〇)が文部大臣賞を受賞、能楽師のすぐれた演技が顕彰された。

授賞式は三月二十六日、日本芸術院会館で行われた。

鳳の会公演

4月18日
いりなかスクエアで
鳳の会は、四月十八日(土)、

能で観る平家物語シリーズ

◆第一回演能◆

四月十八日(土) 午後二時始
名古屋能楽堂

お話し 井沢元彦

能 復曲 松山天狗 森 常好 河村 大 助川 治
問 山本東次郎

春風の小天狗 味方 道治
白雉の相模坊 片山 伸吾
前老人 後 松山天狗

後見 赤松 頼英 清沢 一政 橋本 磯道
大槻 文蔵 地謡 武富 康之 梅田 邦久
青木 道喜 古橋 正邦 片山 清司
上野 雄三 武田 邦弘

主催 観世流シテ方 大槻 文蔵
藤田流笛方 藤田六郎兵衛

【入場料】一回券五千円(自由席)年間リザーブシート(全12回)六万円。
※問い合わせ・申込みは花伝の会(052・571・3464)
藤田六郎兵衛事務所(052・571・3464)
※なおイヤホンガイド(有料五百円)の用意あり。日本語と英語、二カ国語で行われる。フリーチケット(6枚分)二万八千円も用意。一回ごとの入場券はチケットぴあでも販売。

邦謡会春の会

四月十九日(日) 午前九時半始

名古屋能楽堂

番外仕舞 綱之段 今沢 美和
素謡 実 盛 佐藤 英生 都築 健二
高橋 良一

弱法師

舞 敦 盛

班 女

小袖曾我

素謡 松 風

独調 東 北

仕舞 白 樂

素謡 大原御幸

仕舞 卒都婆小町

舞 養 老

采 女

三 輪

素謡 木 賊

仕舞 昭 君

舞 葛 城

胡 蝶

玄 象

素謡 求 塚

仕舞 錦 木

素謡 正 尊

番外仕舞 風 山

〔御来場歓迎〕

起請文

梅田 邦久

梅田 邦久

梅田 邦久

石原 明子 河村真之介 竹市 学
南原彩穂子 河村真之介 竹市 学
三浦百合子 河村真之介 竹市 学
森 幹子 河村真之介 竹市 学

高橋 和成 高橋 和成
二木 暉子 高橋 和成
佐藤 淳子 高橋 和成

深川寿美子 深川寿美子
西川喜代子 西川喜代子
加藤井知子 加藤井知子

田中 美子 田中 美子
牧野あい子 牧野あい子

河村真之介 河村真之介
柳原富司忠 柳原富司忠
藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛

河村真之介 河村真之介
柳原富司忠 柳原富司忠
藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛

河村真之介 河村真之介
柳原富司忠 柳原富司忠
藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛

河村真之介 河村真之介
柳原富司忠 柳原富司忠
藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛

河村真之介 河村真之介
柳原富司忠 柳原富司忠
藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛

三月雅日記

(186)

萬葉の花紀行

(20)

えと文 二井 栄逸

くくたち

上毛野（かみつけの）。
佐野の基立。
折りはやし。
吾は待たむ。
今年来すとも。

（巻一四一三四〇六）
今年は何も来られなくても、私はあの方のために、この上野の里に生育する野菜のくくたちを摘んで、あえ物なんかをこしらえて待つています。たとい、あの方が来られなくても……。
萬葉のおとめの切ない心根が伝わってくるような歌です。

くくたちというのは、あぶらな、又は、菜の花のこと、多くの人に親しまれてきました。しかし、明治以来次第にセイヨウアブラナに変わり、昭和になると、ほとんどがセイヨウアブラナとなり、でも花の構造も変わりました。でも花の構造も変わりのないで、私は日本のアブラナとしてつき合っています。
尋常小学校の「臘月夜」にある「菜の花島に日薄れ、見わたす山の端霞深し……」の調べがなつかしめます。
今は少なくなりましたが、黄色いじゅうたんをしきつめたような菜の花島をするとするような走るローカル列車に乗るのも好きなことの一つでした。
忘れ得ない能として私の頭にきざみこまれた能の一つに、金沢で行われた求塚があります。私は求塚が好きであつたので見所でスケッチをしていました。
シテの宝生英雄氏とツレ三人で早春の残雪が消えやらぬ生田川の清らかさを舞台一杯にみまぎった

時の事です。
佐野のくくたち若立ちて、と、ロンギも終る頃、何よりも目を奪われたことは、シテやツレの白の白衣と、美しい女面がそろうていたことでした。私は今度の個展には、これを是非かいて見たいと思っています。



青陽会定式能(第42期)

四月二十五日(土) 十二時半開演

名古屋能楽堂

②登場人物……五名程度(原則として)
③上演時間……三十分以内。
◆募集期間……平成十年五月十五日より六月三十日まで
◆賞金……入選作(一作)賞金五万円
◆審査員……本多静雄(花伝の会顧問、狂言作者) 藤井知昭(国立民族学博物館名誉教授、愛知県芸術文化協会理事長 安田文吉(南山大学教授) 井上祐一(名古屋狂言共同社同人)
◆発表……七月初旬に通知をもって発表にかえる。
◆応募先および問い合わせ先……名古屋市中区新道2-7-17(〒451-0043)「花伝の会」事務局
電話052-571-3464
(関連記事号掲載)

狂言台本を広く募集

名古屋城夏まつり実行委員会および「花伝の会」(代表・笛方藤田流十一世家元・藤田六郎兵衛氏)は、ことし平成十年の名古屋城夏まつり能・狂言特別公演のうち、八月十六日の公演について、「名古屋発信」の狂言台本を公募、入選の台本にもとづいて上演することになった。

〔募集要項〕

◆応募資格……年齢、性別、国籍等、一切問わない。
◆応募内容……①題材……すべて自由(例/名古屋井での上演、名古屋の名所、名物を登場させる等々)
◆狂言台本として完全なものでなくても受付ける。

◆応募資格……年齢、性別、国籍等、一切問わない。
◆応募内容……①題材……すべて自由(例/名古屋井での上演、名古屋の名所、名物を登場させる等々)
◆狂言台本として完全なものでなくても受付ける。

東	西	北	南
須部 能	三村 恵子	須部 能	三村 恵子
杉江 元	飯富 雅介	杉江 元	飯富 雅介
河崎 勲	西村 信広	河崎 勲	西村 信広
柳原富司忠	井上 靖浩	柳原富司忠	井上 靖浩
鹿取 希世	吉田 定男	鹿取 希世	吉田 定男
	福井啓次郎	鹿取 希世	福井啓次郎
	大野 好信	鹿取 希世	大野 好信
	星野 路子	鹿取 希世	星野 路子
	地謡	鹿取 希世	地謡
	高島 孝男	鹿取 希世	高島 孝男
	山崎 幸親	鹿取 希世	山崎 幸親
	中川 雅章	鹿取 希世	中川 雅章
	加賀 敏彦	鹿取 希世	加賀 敏彦
	武田 邦弘	鹿取 希世	武田 邦弘
	山崎 幸親	鹿取 希世	山崎 幸親
	玉木 孝男	鹿取 希世	玉木 孝男
	祖父江 修一	鹿取 希世	祖父江 修一
	久田 徹二	鹿取 希世	久田 徹二
	清沢 一政	鹿取 希世	清沢 一政

久田観正会春の大会

四月二十六日(日) 午前十時始

名古屋能楽堂

昭	太刀	笠	仕	後見	星野	高橋	藤	善	天
梅田 邦久	佐藤 融	近藤 幸江	武田 邦弘	星野 路子	高橋 正邦	藤 戸	善 知	天 鼓	志賀 禮子
高安 勝久	今枝 靖雄	地謡	地謡	高島 良一	加藤 保彦	大久保由実	岡田 康子	神谷 貞子	河村真之介
井上 祐一	後見 井上礼之助	三村 恵子	高島 良一	加藤 保彦	藤 戸	久田 徹二	吉田 定男	河村真之介	河村真之介
河村真之介	竹市 竜夫	三村 恵子	加賀 敏彦	武田 邦弘	藤 戸	久田 徹二	吉田 定男	河村真之介	河村真之介
後藤嘉津幸	竹市 竜夫	三村 恵子	加賀 敏彦	武田 邦弘	藤 戸	久田 徹二	吉田 定男	河村真之介	河村真之介

〔第一部〕	〔第二部〕	〔御来場歓迎〕
増田 正造	増田 正造	久田 徹二
梅田 邦久	梅田 邦久	久田 徹二
河村真之介	河村真之介	久田 徹二
後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	久田 徹二
大野 誠	大野 誠	久田 徹二
元伯 誠	元伯 誠	久田 徹二
須部 能	須部 能	久田 徹二
杉江 元	杉江 元	久田 徹二
河崎 勲	河崎 勲	久田 徹二
柳原富司忠	柳原富司忠	久田 徹二
鹿取 希世	鹿取 希世	久田 徹二
三村 恵子	三村 恵子	久田 徹二
飯富 雅介	飯富 雅介	久田 徹二
西村 信広	西村 信広	久田 徹二
井上 靖浩	井上 靖浩	久田 徹二
吉田 定男	吉田 定男	久田 徹二
福井啓次郎	福井啓次郎	久田 徹二
大野 好信	大野 好信	久田 徹二
星野 路子	星野 路子	久田 徹二
地謡	地謡	久田 徹二
高島 孝男	高島 孝男	久田 徹二
山崎 幸親	山崎 幸親	久田 徹二
中川 雅章	中川 雅章	久田 徹二
加賀 敏彦	加賀 敏彦	久田 徹二
武田 邦弘	武田 邦弘	久田 徹二
山崎 幸親	山崎 幸親	久田 徹二
玉木 孝男	玉木 孝男	久田 徹二
祖父江 修一	祖父江 修一	久田 徹二
久田 徹二	久田 徹二	久田 徹二
清沢 一政	清沢 一政	久田 徹二

主催 中日新聞放送社

幸 謡 会

五月四日(祝) 午前十時始
名古屋能楽堂

Table listing performers for '幸謡会' including names like 高砂, 近藤, 幸江, 河村真之介, 大野, 龍夫, etc.

古橋正三三回忌追善能

五月五日(祝) 十二時三十分始
名古屋能楽堂

Table listing performers for '古橋正三三回忌追善能' including names like 海士, 武田, 志房, 河村真之介, etc.

名古屋能楽堂定例公演

五月八日(金) 午後六時半開演
名古屋能楽堂

Table listing performers for '名古屋能楽堂定例公演' including names like 狂言水掛, 船弁慶, 仕舞夕顔, etc.

拝啓 若葉薫る爽やかな季節となりました。私ども日頃、能楽芸術の魅力に心を寄せ、生涯学習の友と成しつつ、中日文化センター・翠謡会会員一同、素謡・連吟・仕舞・舞囃子などの出演を励みに、地域文化の振興に根ざし、明日の活力へ繋ぐ事を心からの願いとすもの。敬具 平成十年四月 生駒里翠

翠謡会春季大会

五月十日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

Table listing performers for '翠謡会春季大会' including names like 波, 正, 松, 富士太鼓, etc.

熱田神宮能楽殿演能案内

下田雄誦会 中部地区連合大会
五月十日(日) 午前九時始
熱田神宮能楽殿

Table listing performers for '熱田神宮能楽殿演能案内' including names like 賀, 屋, 鳥, 松, etc.

半 素謡 小笠原賢司 柴田 康行

羽 舞囃子 太田 一栄 後藤嘉津幸 大野 龍夫

船弁慶前 栗田あき子 後藤嘉津幸 大野 誠

融 沢田美智子 後藤嘉津幸 大野 誠

鞍馬天狗 山本 正直 後藤嘉津幸 大野 誠

中 日 文化 セン タ ー 名古屋(老) 岐阜 四日市

鶏 飼 長谷川満二 平田 仁史

連吟 龍 田 小西 綾子 黒野 幸江

舞囃子 花 丸 小西 武久 吉田 定男

仕舞 連吟 佛 原 大岩千寿子 加藤 博子

舞踊子	富士太鼓	村瀬登美子	後藤孝一郎	鹿取 希世	(竹)
遊行柳	坂野 儀子	吉田 定男	鬼頭喜太郎	鹿取 希世	(和)
花 筐	小島 佳代	国島とし子	上木 礼子	平野 邦子	(後)
天 鼓	森 宏子	吉田 定男	鬼頭喜太郎	鹿取 希世	(竹)
砧	加藤 順子	吉田 定男	鹿取 希世	鹿取 希世	(和)
安達原	諏訪 隆	杉山久次郎	阪田 信夫	菅野金太郎	(後)
仕舞	藤 衣子	徳原 良子	平野 綾子	武川 澄子	(後)
唐 船	鈴木 幸子	吉田 定男	鬼頭喜太郎	鹿取 希世	(竹)
通小町	わたなべあきら	吉田 定男	鹿取 希世	鹿取 希世	(和)
仕舞	松下 綾子	高田 義子	上木 礼子	山腰 浩一	(後)
連吟	景 清	山腰 浩一	竹中 宏	岩佐 和信	(花)
舞踊子	玄 象	北村 利弥	吉田 定男	鬼頭喜太郎	(和)
養 老	黒宮 義輝	吉田 定男	鬼頭喜太郎	鹿取 希世	(花)
番組仕舞	葛 城キリ	下田 雄三	橋岡 慈観		
附 祝 言	道明寺				

◇初春の舞台点描◇

「鳳の会」第四回名古屋能楽堂定例公演「青陽会」と「宝生会」「第五回定例公演」「九皇会」

竹尾邦太郎

「佐渡狐」奏者・弘之の、役得にありつく世知辛さの表情が精彩なら、佐渡に狐の有無を気色ばみ口論する越後(靖浩)と佐渡(融)の若いお百姓が如何にも清新。(32分)

「川上」失明十年、川上土地蔵へ治療祈願に参籠の男シテ祐一、鯉口の音を聞き付けると両手に杖操って右手に鯉口の紐を探り、鳴らして正座、杖置き扇を開き膝先に置く。両手を大きく掲げ合掌するところなど、一連の流れは所作の手締麗さに品があり、妻アト友彦の庇護の下、おだやかな日々を暮らす。しかし一旦目が明ければ、利己の煩惱は妻を離別の危機。ここへ来て妻の、貞淑な内面にあるわい女のヒステリックな一面が曝け出され、友彦も存在を大いに主張、挙句元の鞘に収まるまで、夫婦間の愛情の機微の在りように両者の持ち味がよく出た。(54分)

「千切木」口喧しさに連歌講の連中から疎外されるシテ太郎、友彦と愛情過多が自身を猛妻と自覚させない若い妻・靖浩、このコ

ンビが実にユニークで配役の妙。(33分・1月11日、第16回鳳の会)

「翁・毘沙門風流」シテ安明、翁鳥帽子が床に着く程の深々とした拝礼に、春日大社参仕の古儀の風は、奈良金春の面目、敬虔な祈りの心が翁舞の恭敬に透む。シテ下掛なので千歳は狂言方の面箱・靖浩の兼役、上掛のシテ方の千歳に比べて鋭気にもどろろか飄逸味が感じられる。翁舞り済み、既に土鳥帽子を剣先鳥帽子に替えている三番叟・小三郎は、膝で立ち出るとシテに走り出る。氣で舞うという様子はきつぱりとした足拍子に力強い掛声、鳥飛を高くと飛ばす。舞上げ物着に後見座にゆくと、二百七十三年ぶりと喧伝する風流(フリウ)である。

風流とは、一般にスベクタクルな舞台展開の、華やかと賑わしさを謂ふ「玉井」や「河水」「花車」など風流能と呼ばれることもあり、狂言風流も趣旨は似る。上演は極く稀で、旧幕時代は国家的慶事や幕府の祝賀以外用いられたなかったという。この度は名古屋能楽堂が初めて迎える正月の慶祝である。さて物着の間に、限定十人(先代東次郎著「問狂言の研究」)の狂言方地謡(祐一・友彦・弘之)が橋懸に居流れ、黒色尉の三番叟が戻り、常の様に千歳との問答があつて翁を受け取るが、すぐには舞わず、笛前に控え(千歳は脇座)で毘沙門天・又三郎を待つ。風流には翁舞り後の千歳相手のものと、この「毘沙門風流」の様に、採ノ段のあと翁ノ段で三番叟相手のもの二種があり、この種のものを三番叟風流と呼び習わしている。因に毘沙門天は四天王の一、多聞天が独尊として祀られる時の名、甲冑を纏った又三郎の姿は東大寺戒壇院の、多聞天に非ず持國天に酷似、そのリアルさが可笑しい。めでたいからと翁ノ段に相舞を申し出る毘沙門天の稚氣、その舞も毘沙門天に取り残されまいと慌しく狂言早笛で走り出る翁アフリノ実ノ精(子方・藤波充君)に妨げられはするが、腐らず再び舞い出せば、この度は狂言下り端の浮きやかな囃しで登場の西王母(融)に中断されてしまう。有実ノ精とは梨が無シに通ずるのを忌む梨の異名なら、天冠・黒垂・緋大口・紫長絹の西王母は三千年の齢を授ける仙桃を持つ仙女、面は醜女の乙(オト)だが悪巫山戯に非ずお遊ばしのがいつそ可憐。

三度目の正直でやつと三番叟と翁ノ段を相舞する毘沙門天も、だかここへ来て少々草履れ気味は早々にリタイア、翁を、持ち馴れた鈴に替ると一ノ松の床几に掛けて見物の為体である。しかし三番叟が翁ノ段を舞上げると、祭りの庭を浄めに降魔の鈴を把つて勇躍とび出してゆくところなど、スタンドブレイとも見えて微笑ましく、ついで鈴を三番叟に渡せば、西王母も仙桃を捧げてめでたやな、と喜びの舞を共に舞い切地、西王母を先立鞍馬へ帰る毘沙門天は「有難かりける奇蹟かな」と一ノ松で留拍子を踏む。

狂言の囃子事の多彩もあり、珍しさ第一が目が離せない風流であるが、屋上屋を築るこれでもかの奉祝の強調は少々煩雑、上演稀なもの仕込みの時間などまで考慮すれば分からぬでもない。

狂言方と脇鼓が退き、脇能の舞台整うと「高砂」は半能、翁のシテ安明が住吉明神を勤め正月気分を向地に抱くのが象徴的目出度かった。なお正月の「翁」の舞台、注連縄を張るのが定ではなからうか。(1時間44分・1月25日、第5回名古屋能楽堂定例公演)

「高砂」シテ幸親。脇能の、氣品の尉であるが爪先揃い過ぎて鄙の尉らしくなく、外輪の強さが欲しい。後は熱演。ひたすら大きくを目覚すかの神舞だが少々忙しなくは否めない。キリに阿袖巻上げて常座へ往くところ、全力を尽くしたところあり見えた。(1時間20分)

「草子洗小町」シテ三津子。宮中歌合の晴れ舞台、装束が華麗であり過ぎる気遣いはないが、案に相違、位に拘泥すると思える。洗好み、襷色した紫大口など奪るみすばらしく、それからあめが金に湿っぽく、いつもの元氣められなかつた。収穫は子方の上田頭崇若、口を失せて昂然たる面持ちに著つた氣のなさが如何にも王の風格、貫之・雅章の氣品も捨て難かつた。(1時間22分)

「粟田口」粟田口は刀剣の異称、十二世紀末に名刀匠を輩出した知名に因る。お宝剣は粟田口とてシテ大名・祐一、粟田口の何たるかも知れぬまま都へアド太郎冠者・友彦を連れて還りスツパ靖浩にすかさず、「あはたぐちは人かあ」と輪湯一方ならぬ大名の嘆声か全てを尽くすかである。太刀・小刀を絡み奪つたスツバの肩衣文様が蜘蛛二蜘蛛ノ果なのも象徴的。(40分)

「鶴」禁中を騒がせて頼政に射落された鶴ノ亡霊シテ舟人・祖父江修一がワキ旅僧・雅介に昔を語る前場、妖氣漂い結構なら謡にも表情があり、クセに歯切れのよい型をてきばき見せて小気味よい。「頼政きつと見上げれば、と右に面を颯と切り、雲中に怪しの姿を認めるや上げ端ですつと居立ち射るところ、へはたと当る、と扇を右に持ち替へ「得たりやおう、とすつくと立つところ、など胸が空く。後は赤頭・小飛出・半切・法被。丑三つばかりの夜な夜

な御殿の上に、へ飛び下れば、と正中の数拍子、地(徹二・雅章ら)を受け、地に倒れ忽ち滅せし事、と常座の安座、へ天罰を、と振り下ろす打杖、キリにはうつほ舟に籠められて涙み流れる流し足、など皆面白かつた。(1時間15分・1月31日、青陽会)

「巴」シテ澄子。前は里女、義仲ゆかりの木曾から都に上るワキ僧(元)と共に義仲を祀る神前へ手を合はせ、と下居合掌するところから初回(雅・和ら)僧との知遇を感謝しつつも入相の鐘も物恐ろしい逢魔が時に消去する必然の身の、寂しみに情緒がある。後は女丈夫巴御前の奮戦、そつ無く纏めるがオール女流の地謡陣はさらさらと平板に流れ、修羅物軍語りの底流にある強靱さが足りなからぬと、と非ず。へ今からはこれまでなりと、舞台に入つてからの愁嘆は地の哀調も精彩、形見の小袖と小太刀を捧げて立つてゆくところなど心持ち充分に思えた。(1時間12分)

「舎弟」しやてい、よう来た「と兄・融に言われたも意味が分らず不安なシテ、小三郎、何某・又三郎に問はせ、うつけたことを、と無知に付け込み「盗人」と教えぬ。誤解が招くドタバタ劇に陥らないのは小三郎と融の、てきばきとしたリズムのある問答。(11分)

「須磨源氏」シテ正直。前は権翁。榎立木は出さないが心象に描く若木の桜と対照的な枯枝の負荷、風情の一点景と思うが用いながかつた。全体に朴訥なシテの味は、若木の桜に纏わり光源氏のとを言つと、居クセなど好々爺の印象で後の光源氏ノ亡霊と好対照。後は、へ天も映るや、と露を取るのももどかしい早舞の閑達。初冠(垂櫻・追懸)・紫指貫、赤い鉢巻が雲立湧地紋白単袴衣によく映えた。(1時間16分・2月1日、宝生会)

「文山賊」融がほくそ頭巾の如何にも山賊なら、小三郎は折鳥帽子に赤い頭巾も濁々しい花簪姿に紛う。刺し違えるのを嫌うのも主導権を取るの小三郎、さればこそキリの「ちやつと来い、ちやつと来い」に融は「心得た、心得た」と応える。(13分)

「揚貴妃・台留・千ノ掛」へ九華の帳を、と紫引廻しが下るされ、シテ邦久が緋大口・唐織垂折の姿に唐扇扇を持ち床几に居る。唐織とは実は地場の名古屋友禊の替、牡丹孔雀ノ羽根飛雲の文様は艶麗だが常の唐織に比べると、舞でも型でも直線の美しさが消え、線にやわらかな印象を受ける。へ生死の習ひとて、と立ち、へ馬東に留まり魂は、と宮を三三歩出て佇立のところ、クセは、へただ一人降り来りて、と宮の柱に掴まること、など唐帝を慕い纏る氣持が素直に表われる。序ノ舞の掛りに翁が調子の高い千ノ手を吹くという千ノ掛、台留は連の台(うてな)に留まる心という。へ遠菜の台に伏し沈み、と再び宮に入るシテは正に直り下居シオリ、地(清司・邦弘ら)一杯にシオリ解き立つと宮を出る。囃子(六郎兵衛・富司忠・総一郎)の残り留である。ワキ方士・勝久の唐冠も、シテの唐扇と相俟つて、唐土舞台の文字通り浮世離れした美しい悲恋の世界だつた。(1時間33分・2月13日、第五回定例公演)

「三輪」シテ直夫。後場、小立鳥帽子に玲瓏たる面増が緋大口と金色眩い菊花文長絹によく合、華やかな中にも端正。神樂の幣を肩に替へ、神舞に直ルしなやかさも清々しい。(1時間18分)

「鶴」時絵の立派な籠の中で鶴を囀らせている劍士・友彦に、単刀直入無心に及んでゆく梅若殿の家来シテ祐一。鳥刺の身丈度が立派なだけに、哀れを催す結束への過程で拮抗する両者の力量競べが見もの。(31分)

「鉢木」シテ喜正。若さの深癖が領地を失わせしめたと思わせ一種つっぱり美丈夫の凛々しさは不遇落魄を感じさせず、前後を通して意気軒昂、ならば当今流行(?)の年上の妻君に拘らず、装束付にもあるようにツレは小面・紅入唐織にして貰いたかつた。いざ鎌倉の、瘦馬がいて後退りするもの、悍馬が意に従わないと思える程、しかし気魄の籠つた颯爽立派な常世だつた。ワキ殿明寺は雅介、沙門帽子・白綾着付・白大口・紫水衣も貫禄。(1時間32分・2月22日、九皇会)

- ### 平成10年4月・5月放送予定
- 〔4月〕
- NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時から)
 - 19日「桜川」～観世流～ 五木田武計ほか
 - 26日「花月」～金春流～ 金春晃実ほか
 - NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時から)
 - 3日「鳥帽子折」～観世流～ 梅若恭行ほか
 - 10日「海人」[声刈](部分)～宝生流～高橋 勇ほか
 - 17日「鳥追船」[内外誦](部分)～金剛流～金剛水護ほか
 - 24日「金津地蔵」～和泉流～ 野村万蔵
 - 「子盗人」～大藏流～ 山本東次郎
 - 31日「船辨慶」[鶴・飼](部分)～喜多流～栗谷菊生ほか
 - NHK教育テレビ
 - 4月26日(日)午前10時「羽衣・彩色之伝」観世流～ 観世鏡之丞
 - 日本の伝統芸能「能狂言鑑賞入門」
 - 講師：高桑いずみ(東京国立文化財研究所研究員)
 - 土曜日 午前7時10分～7時40分
 - (再)木曜日 午後3時30分～4時00分
 - ①5月2日、7日「翁(式三番)」 観世左近(25世)ほか(予定)
 - ②5月9日、14日「安宅(1)」 栗谷菊生ほか(予定)
 - ③5月16日、21日「安宅(2)」 同上(予定)
 - ④5月23日、28日「花子(1)」 野村万作・万蔵ほか(予定)
- ※いずれもVTR

代表世話人 岐阜市北一色十丁目六一九一三〇三
黒宮 義輝 (花風会)

〔午後五時頃終演〕

倭文之屋社中
下呂雄風会
一宮竹石会
名古屋和風会
岐阜花風会

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
— 部 100円

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

- [5月]
16日(土) 名古屋観世九草会 (有料) (番組②面)
17日(日) 名古屋異会大会 (無料) (番組②面)
23日(土) 能で観る平家物語シリーズ (有料) (番組③面)
24日(日) 第41回狂言やるまい会 (有料) (番組③面)
~野村又三郎喜寿記念~
30日(土) 松月会 能と囃子の会 (無料) (番組③面)
- [6月]
7日(日) 也留舞会・信誼会合同発表会 (無料)
12日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組③面)
13日(土) 狂言ござる乃座第1回名古屋公演 (有料) (番組④面)
14日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組④面)
20日(土) 能で観る平家物語シリーズ (有料) (番組④面)
21日(日) 全国宝生流学生能楽連盟発表会 (午前)
名古屋宝生会定式能 (有料) (番組④面)

◆熱田神宮能楽殿◆

- [5月]
17日(日) 初陽会大会 (無料) (番組⑤面)
23日(土) たまも会 (無料) (番組⑤面)
24日(日) 名古屋正花会 (無料) (番組⑤面)
31日(日) 幸友会 (無料)
- [6月]
5日(金) 熱田祭奉納能 (無料) (番組⑤面)
20日(土) 全国宝生流学生能楽連盟発表会 (無料)
27日(土) 蒔謡会大会 (無料)

熱田祭奉納能 能3番上演

6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部主催による熱田神宮大祭の協賛「熱田祭奉納能」は、六月五日(金)午前十一時から熱田神宮能楽殿で催される。

演能は、喜多流能「枕草童」(シテ長田隠)、観世流能「巻箱」(シテ星野路子)、宝生流能「鶴岡」(シテ稲川寿一)の能三番はじめ、狂言「船ふな」(野村又三郎、井上祐二)、舞囃子、金剛流「雁」(羽多野良子)、金春流「天鼓」(加藤富貴子)の上演で、シテ方五流の総出演。

入場無料。(番組⑤面掲載)

名古屋能楽堂では開館一周年記念の企画展として、能楽笛方藤田流宗家・十一世藤田六郎兵衛の特別協力により「藤田家伝来名品展」を四月二十五日から五月二十四日まで一カ月間行わたり、同能楽堂展示室で展観中である。

藤田流能の流祖である藤田清兵衛(初世)は、但馬(現兵庫県)出石の出身で、近衛藤山公(信長)に仕えていた、同公のすすめにより名高下川丹波守重次(七左衛門、法名丹意の門人)となった。丹波守は、清兵衛の技に感心し、名笛「青海波」、伝書「梅花集 呂・律」を清兵衛に譲った。

豊田市能楽堂誕生 今秋11月3日 舞台披露

自動車産業の街として発展してきた豊田市は、いま「産業文化交流都市」をテーマに、文化面での交流をはかる魅力的な街づくりをすすめる。平成七年の豊田市美術館の開館についで、今秋十一月に豊田市駅前、コンサートホール・能楽堂・図書館の複合文化施設がオープンする。

この施設は「洋」と「和」の

能楽笛方藤田流宗家 藤田家伝来名品展

名古屋能楽堂 開館一周年記念特別展 5月24日まで

想望と、彼の兄・徳川二代将軍秀忠公の仲介により、寛永六年(一六二九年)に尾張藩へ仕官することになったのである。

「庵之梅」枕物狂」上演

名古屋 野村又三郎師喜寿記念

和泉流狂言方・やるまい会主催・野村又三郎氏はことし喜寿を迎え、これを記念して、五月二十四日(日)名古屋能楽堂、八月三十日(日)東京・宝生能楽堂で公演する。

名古屋公演では、「三老曲」とよばれる別格扱いの曲の「庵之梅」、東京公演では「枕物狂」が上演される。野村又三郎家では、約半世紀ぶりの上演である。

名古屋公演の番組は③面掲載。東京公演の番組は次のとおり。午後二時開演。

狂言「鍋八撰」(野村万之介、野村万蔵、石田幸雄)
「鏡扇」(野村小三郎、井上祐二、松田高義)
仕舞「松尾」(佐野萌)
仕舞「枕草童」(今井泰男)
狂言「枕物狂」(野村又三郎、奥津健太郎、野口隆行、野村小三郎)
能「乱」小書藤行(シテ宝生英照、ワキ宝生欣哉、笛・一増幸政、小鼓・北村治、大鼓・安

今回展示される伝来の名品は、①能管「瓦落」②折紙③浄岳清林居士と香譽貞篤信尼画像④笛彦兵衛伝書(一五二四年九月二十三日)⑤血脈相承⑥下川丹波守重次⑦藤田三郎大夫 教訓状⑧沢庵書状 藤田清兵衛宛(沢庵和尚は藤田清兵衛の叔父(母方の弟)にあたる)⑨梅花集 呂⑩梅花集 律 ⑪大乱 金春七郎⑫天細女命 画像⑬稽古の圖⑭古今稀能集・正徳四年(一七一四年)⑮御能御囃子留⑯高安流協方伝書⑰浄岳清林画像⑱物翁信覚画像⑲沢庵書状 下川丹波守宛⑳稽古目録 寛永四年(一六二七年)十二月十三日⑳頭付 春⑳頭付 秋㉑頭付 下川丹波守伝授 寛永七年(一六二四年)五月三日
入場無料。午前九時～午後五時(入場は午後四時三十分)

高安流ワキ方 豊嶋十郎氏逝去

高安流ワキ方、豊嶋十郎氏は、五月四日午前十時三十分、千葉県市川市の病院で逝去された。享年九十歳。

葬儀・告別式は八日午前十一時から市川市の日本キリスト教団市川三本松教会で行われた。喪主は妻幸(さち)さん。

豊田市能楽堂 平成十年十二月三日開館

- ① 舞台披露 祝賀能「五流家元総出演」
- ② 名匠鑑賞能「人間国宝の競演」
- ③ 狂言づくしの会「中世の笑い」
- ④ 名曲鑑賞会「珠玉の名品」
- ⑤ 中国の歌と踊り「草原情歌」
- ⑥ 邦楽演奏会「名手の競演」
- ⑦ 夜の部
- ⑧ 郷土創作狂言「名譽市民・本多静雄の台本による」
- ⑨ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑩ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑪ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑫ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑬ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑭ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑮ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑯ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑰ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑱ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑲ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ⑳ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」
- ㉑ 豊田市民演能会「能舞台に立つ」

お問い合わせ・お申し込み 豊田市能楽堂 TEL0565-35-8200
チケットぴあ TEL052-320-9999

五月雅日記

(187)

萬葉の花紀行 (21)

えと文 二井 栄逸

センダン
 妹が見し
 棟(アフチ)の花は
 散りぬべし
 わが泣く涙
 いまだ干なくに

—山上憶良(巻五の七九八) —
 任地の大宰府で妻を亡くした大伴旅人(おとおものたびと)の胸中を察して、山上憶良が贈った挽歌であります。
 アフチはセンダンの古名です。
 五月から六月にかけて、淡紫色の美しい花を開き、秋には、小さな黄色の実をいっぱいつけます。



昔は端午の節句にセンダンの花を薬玉にしてシヨウブやヨモギと共にかざったと言われていました。また、西行法師の「撰集抄」にある「センダンは二葉より芳し」と言う一行書きを思い出したりします。しかし、このセンダンはビヤクダンのことで、東インドやマレーに産するビヤクダンの科の香木のことです。

岡崎城二の丸・清謡会 (第六回) 舞と能の夕べ

五月二十三日(土)
 午後一時半(会員の部)
 午後六時(新能)
 会場 岡崎城二の丸能楽堂

(会員の部) (午後一時半)

舞 小袖曾我 母 今川 米子
 五郎 西野 志保
 十郎 中村 正一

巴 水越 弥生 服部 玲子

仕舞 卷 絹 今川 米子
 田 村 金井 邦夫
 丸 西野 志保

経 正 奥村 小浪
 野 杉田 千鶴子
 林 杉本 優

松 風 林 和子

西行 榎山 千子 加藤 茂代

素謡 高橋 千晴
 磯部 三枝子
 手嶋 なみゆき
 山本 博子
 三輪 藤枝子

附祝言 主催 清 謡 会
 44-10877 岡崎市道美旭町五の九
 〇五六四・五二六九〇九

名古屋観世九皇会定例会

五月十六日(土)午後一時始
 名古屋能楽堂

番組
 鞍馬天狗 外山 圭一
 松 風 高木美智子
 網ノ段 加藤 保彦
 鶴ノ段 高橋 徹一

能通 小町
 後見 小林 喜久
 五木田 三郎
 杉江 元
 後藤 嘉津幸
 竹市 学

狂言 泉山伏
 野村 又三郎
 松田 高義
 野村 小三郎
 後見 佐藤 融

西行 櫻
 飯富 雅介
 橋本 幸
 橋本 正樹
 野村 又三郎

附祝言 主催 名古屋観世九皇会
 事務所 名古屋市南区元塩町一―一―一七
 加藤 保彦方

名古屋異会大会

五月十七日(日)十時半始
 名古屋能楽堂

素謡 田 村 鈴木ゆり子
 仕舞 加 茂 塚村 七
 黒田 久子
 山崎 邦子
 岩田 幸子

素謡 杜 若 山本 岬
 連吟 船 弁慶 日和会
 辻村 和子

舞 高 砂 大森 尚人
 吉田 定男
 福井 啓次郎
 竹市 学

海 人 大森 尚人
 中村 成利

仕舞 三 杜 山若 七
 金子 恵津
 藤田 光子

素謡 花 筐 別所 和子
 水井 喜美
 大溪 和子
 澁美公美乃

舞 須磨源氏 永井 喜美
 福井 啓次郎
 竹市 学

仕舞 殺 敦 生 石 盛 佐藤 耕一
 稲川 寿一

附祝言 主催 名古屋異会
 愛知郡東郷町和合ヶ丘二―一―一五
 TEL〇五六―三―一九一―四八七

演能案内

豊嶋彌左衛門師 20年祭追善能

5月17日 金剛能楽堂

都 人間国宝・金剛流の豊嶋彌左衛門氏は昭和五十年逝去されて三十三周年を教へ、豊春会では五月十七日(日)京都・金剛能楽堂で二十年祭・豊嶋彌左衛門師追善能を催す。午後二時始演能は、豊嶋三千春師の能「誓願寺」、豊嶋三師の舞囃子「鞍馬天狗」茂山師一門の「呂運」など。

仕舞「養老」(吉村輝一)「経

海津町歴史民俗資料館 能版画70点を展示

5月24日まで特別展開催

岐阜県海津町の歴史民俗資料館では、四月二十八日から五月二十四日まで、第六回特別展として、「能版画展」(玉野コレクション)を開催している。(本紙2月号にて一部既報)

展示品は、江戸後期から明治期にかけての能・狂言の版画七十余点と能装束模様の版画など。

このコレクションは、犬山城能楽友の会の玉野富夫氏所蔵のもので、將軍主催の能(御奥御能)、勳進能、町入能、京都御所の御能、江戸城の福初式等、六枚続き、三枚続き、一枚続きの版画がすべて展示される。

青山御所、前田侯邸、芝公園楓山の紅葉館の天覧能、その中でも歌舞伎の衣装をつけて舞っている図と、明治の三名人といわれた梅若実が、天覧の際、急病になり、息子が菊慈童を舞わせた図など貴重な資料がある。また六枚続きの勳進能の図は、江戸時代最後の一世代勳進能であり、それ以後は現在にいたるまで一度も行われていない。

能・狂言の研究會

5月から明年1月まで8回

武蔵野女子大能楽資料センター 女子大能楽資料センター

正(鳥崎暢久)「二人静」(豊嶋幸洋、豊嶋晃嗣)「隅田川」(中尾三三郎)「野守」(植田恭三) 舞囃子「鞍馬天狗」(シテ豊嶋三) 狂言「呂運」(茂山千之丞、茂山あきら、茂山正邦) 能「誓願寺」(豊嶋三千春、笛・光田洋一、小鼓・曾和博朗、大鼓・谷口正喜、太鼓・前川光長、主後見・豊嶋三、地謡・宇高通成、田中敏文、豊嶋晃嗣ほか) 入場料一般六千円、学生三千円、後援会正会員・年会費一万円(春の能、秋の能に招待) 申し込み「豊嶋後援会」振替・京都〇一〇三〇・六二八八七。電話〇七五・五六一・五四〇八番。

武蔵野女子大能楽資料センターでは、本年度の能楽資料センター研究会を五月から明年一月まで八回にわたり開催する。同センターは、昨年(一九九七年)は開設二十五周年を迎え、それを記念して「能・狂言」二世紀にわたり講演会を開催、各回とも三百名から五百名を超える聴衆で能楽に対する強い関心が示された。今回の平成十年度研究会も一般の聴講を歓迎している。

五月十八日(日)「名古屋の狂言について」 小林 貴氏 △六月十五日(日)「海外における能楽教育」 リチャード・エマート氏 △七月十六日(日)「連歌と能・狂言」 池田 英悟氏 △九月二十八日(日)「万葉と能」

狂言 びびる乃座

第一回名古屋公演

六月十三日(土)午後二時始

名古屋能楽堂

じゆごめ狂言

小中学生の異流懸演

「じゆごめ狂言」は、五月五日「いりなかくスクエア」ビルで行われた。和泉流、大蔵流狂言をたしなむジュニアが大蔵流狂言「鼻」(以呂波)和泉流狂言「附子」を上演。

出演は丹羽理紗子(中1)牛田明伸(小6)森智一(小5)林泰礼(小4)牛田智之(小3)秋田卓規(小1)秋田篤志(保育園年長組)のみなさん。

名古屋観世会定式能(第3)

六月十四日(日)十二時半始 名古屋能楽堂

能 松 片山 清司 植田隆之亮 河村真之介 藤田六郎兵衛 見留 野村又三郎

狂言 不腹立 野村小三郎 野村又三郎 松田高義 井上礼之助

仕舞 自然居士 梅若 盛義 中川 雅章 加藤 保彦 善知鳥 片山慶次郎 地謡 小島 一英 加賀 敏彦

能 安達原 飯富 雅介 吉田 定男 鬼頭喜太郎 急進之出 飯富 雅介 福井啓次郎 竹市 学

附祝言 片山 清司 地謡 須部 幸親 梅田 邦久 飯田 徹二 後見 片山慶次郎 地謡 高橋 瞭一 梅若 邦久 祖父江修一 武田 邦弘

能で観る平家物語シリーズ 第三回演能

六月二十日(土)午後二時始 名古屋能楽堂

俊寛 武富 康之 赤松 禎英 大槻 文蔵 宝生 河村総一郎 藤田六郎兵衛 間 茂山千三郎 大倉源次郎

お話 井沢 元彦 河村総一郎 藤田六郎兵衛 後見 古橋 正邦 地謡 山口剛一郎 河村 信重 泉 嘉夫 祖父江修一 長山禮三郎 寺澤 幸祐 山本 順之 松浦信一郎

第四十二期・第二回 名古屋宝生会定式能

宝生流十九世宗家継承披露能 六月二十一日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

仕舞 岩船 衣斐 愛 竹内 澄子 胡蝶 戸田 和 地謡 倉本 博雅

仕舞 竹生島 稲川 寿一 地謡 鬼頭 嘉男 馬場 富次郎 辰巳 満次郎 大友 順

小袖曾我 竹内澄子 後藤孝一郎 大野 誠 地謡 戸田 衣斐 愛

連吟 嵐山 水 嘉男 和久 莊太郎

能 松風 ツレ水上 輝和 飯富 雅介 後藤孝一郎 大野 誠

狂言 鱈包丁 佐藤 友彦 後見 井上礼之助

能 石橋 老 當山 孝道 赤松 宝生 和英 白鳥 宝生 英照

後見 辰巳 孝 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛 佐野 萌 地謡 石原 良郎 鬼頭 嘉男 水 上 友 柴田 智幸 當山 孝道 渡邊 茂人 伊藤 浩史 和久 莊太郎 馬場 富次郎 辰巳 満次郎 伊藤 浩史

要会員券 一回券五千円(自由席)年開りシート(全12回)六万円。 藤田六郎兵衛事務所(052-571-3464)

主催 名古屋宝生会 事務所 名古屋市天白区島田二一三〇一 島田橋住宅二一三〇一 電話 FAX 〇五二 八〇三 携帯 TEL 〇三〇 五九九 四三三五

熱田神宮能楽殿演能案内

初陽会大会
五月十七日(日)午前九時半始
熱田神宮能楽殿

番組

Table listing performers and roles for the 'Shoto Tamamo' event, including names like 有馬 正明, 杉本 勉, 高橋 崇俊, etc.

第十回 たまも会

五月二十三日(土)午前十時始
熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Tama-mo' event, including names like 飯富 雅介, 飯富 雅子, 飯富 雅子, etc.

〔御来場歓迎〕

主催 たまも会
(終了予定四時半頃)

名古屋正花会

五月二十四日(日)十時始
熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Nagoya Shohwa' event, including names like 飯富 雅介, 飯富 雅子, 飯富 雅子, etc.

附祝言

主催 名古屋正花会
指導 山本博通
共催 名古屋正花会
指導 山本勝一

熱田祭奉納能

六月五日(金)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Natsuta Matsuri' event, including names like 飯富 雅介, 飯富 雅子, 飯富 雅子, etc.

〔入場無料〕

主催 能楽協会名古屋支部

平成10年5月～6月放送予定

- (5月)
 - NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時から)
 - 17日 「鳥追船」内外版(部分)～金剛流～金剛水蓮ほか
 - 24日 「金津地蔵」～和泉流～野村万蔵
 - 「子盗人」～大蔵流～山本東次郎
 - 31日 「船辨慶」鶴岡(部分)～喜多流～栗谷菊生ほか
- (6月)
 - NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時から)
 - 7日 「玄象」～観世流～角次郎ほか
 - 14日 「加茂」放下(部分)～宝生流～本間孝ほか
 - 21日 「通小町」～金春流～瀬尾菊次ほか
 - 28日 「雨月」新編(部分)～観世流～生一左衛門ほか
 - NHK教育テレビ
 - 5月31日(日)午後3時～5時
 - 能「山姥」～喜多流～塩津哲生ほか
 - 狂言「無布紗」～大蔵流～山本東次郎ほか
 - 日本放送協会
 - 講師：高桑いづみ(東京国立文化財研究所研究員)
 - 土曜日 午前7時10分～7時40分、木曜日再放送
 - ②5月9日、14日 「安宅(1)」 栗谷菊生ほか(予定)
 - ③5月16日、21日 「安宅(2)」 同上(予定)
 - ④5月23日、28日 「花子(1)」 野村万作・万蔵ほか(予定)
 - ⑤5月30日、6月4日 「花子(2)」 野村万作・万蔵ほか(予定)

杉浦賢次氏 能・狂言写真展

26、31日 市民ギャラリー

演能写真家・杉浦賢次氏(刈谷市板倉町二一六一五)は、名古屋能楽堂開館一周年を記念して、五月二十六日(火)から三十一日(日)まで名古屋・中区栄四丁目名古屋市民ギャラリー第4展示室(名古屋市中区役所・朝日生命共同ビル七階)で、杉浦賢次「能・狂言写真展」を企画し、「能・狂言の世界」を開催する。

展示写真は、平成九年四月の名古屋能楽堂舞台落成祝賀能「翁」

狂言台本募集

名古屋城夏まつりで上演

名古屋城夏まつり実行委員会および「花伝の会」(代表・筒方藤田流十一世家元・藤田六郎兵衛氏)は、本紙前号既報のように、ことしの名古屋城夏まつりの能・狂言特別公演のうち、八月十六日の公演について、一般から募集した狂言の台本により上演されることになり、その狂言台本を募集中心である。

募集要項は、既報のとおり題材は自由で、作品は、上演のため狂言方が作者と打合せをして、必要な補作がされるので、台本として完全なものでなくとも応募できる。

作品は原則として未発表、未上演のものに限り、台本の上演権は「花伝の会」に帰属する。

◆仲春から晩春への舞台◆

「第六回名古屋能楽堂定例公演」金春円満井会特別公演・関寺小町と「第七回名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「膏藥煉」 互いの自慢は奇想天外の膏藥の効能、鎌倉方(融)は疾駆して遠ざかる悍馬「生月」を吸い戻し、都方(靖造)は飯山から曳いた巨石を築地越しに吸い寄せた、と多様な技の応酬は、振りに引きに釣り引きも結構だがやや軽い感じが、ぐぐぐと、とくる重さが欲しいが、導入部の舌戦は若者同士の間で、意気の衝突、こちらら精彩。(二十五分)

「鞍馬天狗・白頭」 シテ徹二、前は、兜巾・大格子厚板着付・濃紺大口・福水衣・白襦袢の山伏。何事もなく正中に出て名宣り、外ながら、と右ウケ、花を眺めんと後見屋に退くと、西谷のアイ能力(寺男)友彦は、折から来掛かる東谷のワキ僧・雅介に花見案内の文を手渡す。花見の雅介がさしずめ寺経の幼雅園児なら、遠足責任者はワキが即ち園長、ならば付添う先生ワキツレ僧を加え、雅介の数ももつ増やしたい。さて花の下は能力の余興の、玩具尽しの小舞が愉快だが(よそ見の雅介ばかりだが)、園児の前に得が知られない大きな山伏が現われれば変質者めいて危険、とは現代の世相の構図、触れぬ神に祟り無しとばかり早々に引き揚げるワキの心もよく判かるが面白い。

一人残る牛若丸(子方上田宜照君、きりりとして凛々しく好演)の健気は、シテとの心の交流をしつとりとみせ、シテの、子方への労りも沁々とする。春鐘に耳を澄まし、奥は鞍馬の、と居立つと、「山道のと立ち、へ花ぞしるべなる、と花明かりへ子方を介添するところなどは愛しさも仄かに、優しい。素性明かし、快気は兵法の大事の伝授、雲を踏んで飛

び去る中入は、二ノ松で踏み止まると、含羞振り払うかに走り込む。後は、アイ木葉天狗、祐一の立シヤベリ・触レの後、子方は白鉢巻・襟赤・白地大唐花文縫着付(前同断)、白大口・紫水衣に気品をみせ、長刀を持つ。後シテ面鼻痛悪尉・白頭の魁偉は、金色兜巾・紫地金輪二大唐花文半切、衣紋に着る袴袴衣には更に黄緑水衣を重ね、大掛絡も着ける大天狗の威風である。棚引く雲を象徴して左袖抜くと、八月は鞍馬の僧正が、を受ける地(邦久・邦弘ら)の「谷に、で勾欄に進み颯と面切の、が爽快なら、天狗倒しは夥しや、は常座、唯子(学・嘉津幸・真之介・喜太郎)の高潮に鹿背杖両手に持ち上げて投げ捨てる音の効果も、天狗倒しをイメージして強烈である。

張良・黄石公の語りは床几、「落ちたる香をお取って」と、立って右膝着き取り上げる型も堂々と、悪性はない。舞動を抜き、へそもそも、の返シに床几を立つと、キリは立ち帰るシテを慕う子方が袖に取り纏る一抹の哀愁、トメは三ノ松へ走り拍子踏み、へ梢に翔つて、と左袖被キ太鼓の留、豪気重厚スケールの大きな鞍馬天狗に徹二の面目躍如だった。(一時間十八分・三月十三日、第六回名古屋能楽堂定例公演)

「福の神」 シテ福天・弥右衛門、年越し詣での篤信者ア弥太郎・基照の前に現われると御神酒をねだり、「楽しうなりたいか」などと気を持たせては「元手が要るいやい」と逸らかし、気を引きつつ教訓を垂れる。

その呼吸気合の趣味は、小人の瑣事を笑い飛ばすかの笑ひ留も実におおどか、骨格の大きさは弥右

衛門の面目、能楽界現役最長老の一人として大蔵家三代が共演する「福の神」の目出度である。(二十分)

「関寺小町」 五節の一は七夕、現代も童らは短冊に歌などを書き、葉竹に吊るし星を祭る。ワキ関寺小町・茂十郎、雅児(子方・金春政和)を先立ててワキツレ從僧を伴い、歌道精通と仄閑するシテ繼・信高の許を訪ねるが、歌物語の節々から盤が小町と判り、手を引き祭の庭に誘う。雅児の舞に魅了され、舞う盤の心のうちは、初秋の短夜には懐旧の時を甞る長い序ノ舞も余りに多い、の逆説である。盤は、佳人もおのずから老いさらばえる奇蹟を諦観しつつ、尚それを差しらう淑やかさを残して帰路につく。

三老女の、能の最深奥の秘曲は当然秘曲でもある。盤屋は四注遣に非ず珍しい入母屋遣、淡い萌黄の引廻しが好ましい。先ず囁々寂々とした笛(大五郎)の素晴らしい序奏が「関寺小町」の舞台を整える。雅児は喝食盤・襟赤・白摺着付・白大口・淡茶風鳳文長絹(露赤)、ワキは藍脂色角帽子・襟浅黄・小格子厚板着付・濃緑水衣・小刀、伴うワキツレらと鹿に着く感に座着くと、引廻しが下ろされ床几にシテが凝然と居る。而は、老女の潔癖さを示して整った気品があるとシテ自身の言、友問作の雄か。襟は、白二に非ず淡い、用と茶に見え、白摺着付・朽葉色千鳥二波文縫着付・無紅段替唐織(浦公英ト若松二様文)である。

来し方を季節に重ねて追想し、へ昔に帰る秋はなし、とシオルとこころ、淡々と生は受容してもなお孤愁惻々と迫るが、ワキとの問答は、卒都婆の攻撃型に比して昔歌った梓桐の歌のこと、やんわりと受けとめて納めとした口吻のなか、微かな喜びも覗いて面白い。歌の功徳は貴賤都に無関係と意気投合すれば、初問(汎・光洋・安明ら)は、シテの歌への思いの丈、巧く話を誘導して文堵の、下居のワキへ、「この歌の文字あらば、とアシラフのも自負。更に話すうち、へ(忘れて)年を、で激しく打たれる太鼓(崇志)は、古

の悲しさを呼び醒ますか。素性を知られる含羞も素直に、居グセの中、懐旧はへ思ひし時だにも、とシオルとこころ、しんみりする。へ今は通生の、とワキにアシラフのは隨屋を愛惜の風情、へ鐘の聲、と上ヶ端に直り、更にへ(是生滅法の)理をも、とワキにアシラフ面深くクモルが、小町にして哲理不可解の無念か。

へ飛花落葉の、と短冊外して直り、硯をならし染筆する型どころは能書家信高の面目、へ強からず、とゆつくり筆の穂先を離してゆく迎りの写実が惹きつけ、抑制されよく統制のとれた地も上々。ワキが立ち、「御手を引き申さん」と盤屋に寄って、膝を着き、右手差し出し七夕祭へ促すと、シテは漸く後見から杖を取り、へ百年に、と盤屋を出、へ浅ましやと當座先の床几に掛ける。

子方は、へとても今宵は七夕、とシテに寄って酒を注ぎ、舞になる。身体を振り舞を見るシテの気分も若やき、浮かれて杖持ち立つと、拍子二ツから舞出す。途中杖を扇に替えるが、慎重な中にも信屈した印象の舞は、感かたように古の華やきを求める心が感じられる老女ノ舞である。しかし舞半ばを過ぎて、左手に替えていた扇を、拍子二ツ踏み再び右手に替えてから、ぐらりとといった感じに左手をついて倒れる。すぐ立ち上がり、再び佇立から舞い続けるが、再度倒れてこの度は左手を支えて立つ。主後見の鬼実がさりげなく立ち、シテは氣力をふりしほって舞い続けてカサシて舞台を廻ると舞上げて正中先でワカ、小鼓(純三)の一粒一粒がシテを励ますように鳴るのを聞いたが氣力もここまですべての力を失った。哀れなり老木の花の枝、へさす袖も手忘れ、と腰から落ちる。しかし恐るべし、全身金盃を賭して立つと更に舞い続けるが遂に地の、へ立ち舞ふ袂も離れども、で力尽きて階を背に腰から頼れると無念の思いは地のうちに、従後見(紳・貴覚)の介添でシテは後見座に退く。

へさる程に、以下は鬼実が長袴のまま舞い、切地は杖、盤屋に入つて後見が杖を退く。鬼実は、へ

小町が果の名なり、の返し句一杯に沈み、へけり、と立つて盤屋を出、唯子の残り留、留の後、鬼実は後見座に戻り、シテ信高は従後見の介添で静かに幕を退く。

還暦に勤めた「伯母捨」で信高は「老女の心」を言う。「咬々たる月に対する時、体は動かずとも心は舞うこともある。体は舞っていない、心は沈んでいるかも知れない。舞うもよし、舞わずもよし、天心の月と老女の心は一つのものであるか」と。月を、牽牛織女に置き換えたときも、その心は同じであるか。万雷の拍手は、信高の崇高な役者魂への感動、息を呑む舞台に感銘を新たにシテを支えて好演だったが、子方は、孫と子の三代で動める意義は認められ、少々蓋が立ち無邪気な可愛さは望むべくもなかった。

(一時間三十八分・三月二十二日、金春円満井会特別公演・国立能楽堂)

「成上り」 主・靖造の太刀を竹筒にすり替えられ、言い訳は山芋が酸に、燕が飛魚に、成上るなど逸かすシテ太郎冠者・小三郎。回りとシテは言辭のみならずその動作のまだるさ、折好く主が羽交い締めは捕えたり、又三郎に繩を掛ければ、掛け損ない主を縛り上げるなど、前後の話の展開もちぐはぐ。すっぱを捕えてから繩を縛るのも、笑いは浅薄で小三郎・又三郎のコンビもただ騒々しいだけの印象、力演が報われたとは思えなかった。(十六分)

「忠度」 シテ昭世、笑尉・襟浅黄・茶無地畷斗目着付、朽葉色水衣の洗いな、右に杖、左に木葉人間答は、僧の無智にへ余りに疎かなるお僧の御説、と呆れる表情を面のテリ具合に見せるが、初対面にそれでは、の反省は、須磨の浦は背に山を負うので、余の所にや変るらん、と弁明しつつ話題を外らす趣。へ、嶺の風や、と右上を眺め、大小(総一郎・嘉津幸)前からは胸杖に、へ通浦風、と目付柱上を見る、などテラス面の表情の微妙に心持がよく見える。へ仏果を得んで、とワキに合掌

正しいメガネで しあわせを……

メガネの日進堂

名古屋市中区那古野二丁目20-23 (円頓寺本町)

☎052)571-6181 (代) (駐車場完備)

■営業時間 AM9.30~PM8.00 ■定休日 毎週木曜日

し、中人地(哲生・靖嗣ら)へ夕べの花の、と杖取り立つと笛(学)のアシラヒ送、この迎りの情趣しつとりと上々なら、アイ里人・高義の十二分にも及ぶ居語は立板に水の爽やか。

後シテは面中將・黒垂・梨子打・白鉢巻・襟浅黄・茶地亀甲地・黒地長絹下・太刀は、文武に秀でた公達忠度の氣品を漂わす。へさも忙がはしかりし身の、と床几を立ち、へ一ノ松へ行つて「我も船に乗らんとて」、と袖を返して舞台に戻り合戦譚となるところ、目覚ましい。

就中、駒の手綱を引つ返し、六弥太との組み討ちは、きびきびと且つ柔らかな身のこなしが素晴らしい。へ終には首をと扇をガツクと後ろへ倒す型、へ六弥太に思ふやう、と安座から右膝立てて忠度の死骸を目を遺るところなど、そぞろ寂寥の感、引き締まった好舞台は立廻からキリへ余情も一人だった。後見、馳・衛市。

(一時間三十五分・四月十日、第七回名古屋能楽堂定例公演)

五月雅日記

(188)

萬葉の花紀行

(22)

えと文 二井 栄逸

なし

もみぢ葉の
にはひは繁(しげ)し
然れども
妻梨(つまなし)の木を
手折りかざさむ

どの木も、この木も皆紅葉して
この辺一体に美しい。それにしても、
も、其中で、なつかしい妻とい
う名を持った妻梨の木を折って頭
に挿そう。美しい女性はたくさん
居るのに、どうして自分には妻と
なつてくれる女性が居ないんだろ
う——そのような嘆きがきこえて

それは喜多実先生が楊貴妃の小
書、玉簾を舞われた時のスケッチ
梨の花は、品のいい花で、いく
つもの思い出があります。
私のスケッチ帖には、喜多だけ
ではなく、観世さんや、金剛、宝
生さん等の能姿もかいています
が、其中には、楊貴妃もありま
す。

演能案内

梅若盛義師

「二ころみの会」

能「安宅」上演

梅若盛義師後援会自主公演
東京の「二ころみの会」は、き
たる六月二十日(土)東京
・観世能楽堂で本年度一回目の公
演を行う。

演目は、能「安宅」シテ梅若盛
義、ワキ楠木岑男、子方梅若慎太
郎、山伏・梅若晋矢、同山・梅若
盛彦、馬野正基、橋本雅一、岡田
見一、泉雅一郎、井戸良祐、梅若
善久、梅若善高、アイ・山本泰太
郎、山本東次郎
笛・藤田大五郎、小鼓・鶴沢速
雄、大鼓・安福建雄、地頭・親世
栄夫、地謡・泉泰孝、梅若修一、
池内幸三郎、岡田麗史、梅若恭
徳、石田亀太郎、菰田均、後見・
梅若恭行、岡田朗詠、梅若靖記

なのですが、ワキの「王妃は内に
ましますか」で、引廻しを下ろす
のとは違って、「梨花一枝雨をお
びたる粧の」の地謡で床几をお
ち、右手に扇を持ちたるまま、左
右の手で、すだれを前に押しつけ
て、少しがみながら宮を出て、
作り物のすぐ前で床几にかける演
出でした。

静かにすだれを分けて出る其の
容姿には、他に見られない美しさ
があったのです。
そして「梨花一枝雨をおびたる
粧の」の地謡がすばらしく良かつ
たので、シテの姿を一層美しくさ
せていました。
この楊貴妃を美しくさせた梨の
花も忘れ得ぬ思い出の一つです。



「杜若」(かきつばた)は、
「愛知県」の県花でもある。
展示は、日蔭の糸付杜若初冠、
髪、胴着七宝文髪帯、中啓・妻紅
明皇貴妃花戦國髪扇、伊勢物語写
本(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)、
写真「八橋園」(三河名所
園絵)、写真「燕子花図屏風」
(尾形光琳筆)、真之太刀、能面

「小面」「節木増」「孫次郎」
「若女」写真「杜若」など十九点
(改名・改姓)
・観世流シテ方、久田徹二氏はこ
のたび「久田勘助」と改名された。
・観世流シテ方、瀬戸三津子氏
は、このたび「久田三津子」と改
姓された。

平成10年6月～7月放送予定

(6月)

●NHK・FM能楽鑑賞

(日曜日午前8時から)

- 7日「玄象」～観世流～角寛次郎ほか
- 14日「加茂」放た下僧(部分)～宝生流～本間英孝ほか
- 21日「通小町」～金春流～瀬尾菊次ほか
- 28日「雨月」菊意蓮(部分)～観世流～生一左兵衛ほか

(7月)

●NHK・FM能楽鑑賞

(日曜日午前8時から)

- 5日「教盛」～観世流～梅若万紀夫ほか
- 12日「天鼓」～宝生流～今井泰男ほか
- 19日「千手」～観世流～関根祥六ほか
- 26日「富士太鼓」観世流～片山九郎右衛門ほか

名古屋能楽堂公演案内

第11回

能・久田勘助の会

(久田徹二「能」リサイタル改め)

七月四日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

一調 久田勘助 久田舜一郎

橋弁慶 久田勘助 久田舜一郎

舞囃子

賀茂 久田三津子 河村総一郎 鬼頭喜太郎 久田舜一郎 藤田次郎

仕舞 玄象 久田勘助

休憩十分

式子内親王と定家のお話

武庫川女子大学

文学部教授 大森 亮尚

定家

久田勘助 原大 河村総一郎 藤田次郎
谷田宗二 久田舜一郎
小林 努
間 野村又三郎
後見 上田 拓司 地謡 玉木 孝男 山田 義高
橋岡 慈観 松山 幸親 笠田 義隆
寺沢 幸祐 浦田 保利
祖父江 修一 上田 貴弘

(入場料)一般前売五千元 当日六千元 学生三千元

取扱い「ブレイガイド」チケットぴあ(052・320・9999)

お問い合わせ 久田勘助の会事務所

電話 052・705・1585

佐藤卯三郎 追善
河村 丘造師

第40回朝日狂言会

七月十二日(日)午後一時半開演
名古屋能楽堂

素囃子

今参り

大蔵 右衛門 大蔵 基照 大蔵 吉次郎 大蔵 彌太郎

鞍馬躰

井上 靖浩 野村 小三郎 井上 祐一 今枝 靖雄

泣尼

野村 万蔵 野村 又三郎 野村 万之丞 後見 野村 品人

茸

山伏 友彦 大野 弘之 佐藤 俊裕 今枝 隆徳 木村 哲男 森 智一 井上 智行 後見 井上 礼之助

主催 朝日新聞社

後援 名古屋テレビ

入場料

〔前売り〕指定席 五千元 学生 二千五百円

〔当日券〕自由席 四千五百円 学生 三千円

入場券取り扱い「ブレイガイド」松坂屋、名鉄、丸栄、愛知県芸術文化センター各ブレイガイド

朝日新聞社企画部、各出演者事務所

お問い合わせ 愛知県東郷町和合ヶ丘2-21-10

井上宅(05613・8・6430)

名古屋北区大杉町3-10-5 佐藤宅(052・9

11・8784)

能楽「鏡座」第二回公演

七月十七日(金) 午後六時半開演 名古屋能楽堂

吹取 狂言 男 野村小三郎 何某 野口隆行 女 奥津健太郎

逆矛

入場料 前売 三、五〇〇円 当日 四、〇〇〇円 学生 一、五〇〇円

GALO・21創立5周年記念 手話狂言

演目「盆山」「六地藏」

名古屋観世会

夏の素謡会

七月十九日(日) 午後一時始 名古屋能楽堂

俊寛

仕舞 卷 絹キリ 班 女ケセ 葵 上 素 謡

賀茂

仕舞 賀茂 女キリ 殺生石 素 謡

野宮

仕舞 野宮 親世 清和

融

仕舞 融 親世 喜之

附祝言

第二十回七彩会記念大会

七月二十日午前九時半始 名古屋能楽堂

素謡 玉葛

仕舞 素謡 玉葛 高科 峰子

舞臺子 女郎花

舞臺子 女郎花 小川 清一

七騎落

七騎落 林 泰子

西王母

西王母 岸本 尚之

昭君

昭君 鈴木 美佐

能田村

能田村 飯富 雅介

安宅

安宅 早川 隆一

清経

清経 阪口 泰子

藤

藤 松浦 祥子

花月

花月 渡辺 千恵

五雲

五雲 後見 衣斐

名古屋能楽堂定例公演

七月二十四日(金) 午後六時三十分開演 名古屋能楽堂

右近

右近 玉井 博祐

俊寛

俊寛 飯富 雅介

能

能 後見 衣斐

能で観る平家物語

七月二十五日(土) 午後二時始 名古屋能楽堂

頼政

頼政 観世 栄夫

お話

お話 井沢 元彦

頼政

頼政 後見 泉

電話〇五二(七八二)四一七一

第15回

野村四郎名古屋公演

七月二十六日(日)

午後一時半開演

名古屋能楽堂

「光源氏の恋文」 近藤 富枝(作家)

玉 鬘

仕舞 夕 顔

舞臺子 浮 舟

能 野 宮

野村 四郎

宝生 欣哉

間 松田 高義

後見 赤松 植英

大江 将重

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

武富 康之

山本 孝

藤田 六郎兵衛

柳原 富司忠

赤松 植英

行く春から初夏への舞台

竹尾 邦太郎

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

「通盛」一八八四年(寿永)

「観世会」三世茂山千作十三回忌追善茂山

「狂言会」と第八回名古屋能楽堂定例公演

火入式 熱田神宮御祭戸塚 定吉

御挨拶 熱田市長 松原 武久

清沢 一政 梅田 邦久

観世流能 松 風 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世

後見 今沢 美和 地謡 生駒 里翠 須部 勘助

泉 嘉夫 地謡 高島 良一 久田 勘助

和泉流狂言 文 荷 佐藤 友彦 井上 祐一

後見 玉井 博祐 地謡 久野 幸三 衣斐 正直

宝生流能 殺生石 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭 好信

後見 竹内 澄子 地謡 佐藤 耕司 水戸 輝和

附 祝 言 (終了予定 八時四十分頃)

能楽協会名古屋支部

名古屋市中・熱田神宮

当日券二千円(前売券二千五百円)

取扱い中各プロレイトガイド・チケットぴあ

※雨天順延の問い合わせは熱田神宮能楽殿

電(〇五二一六八二一七五)

レを指すつくつと立つのも決断。カケリの強々とした拍子は討死覚悟の、逸る心もさもありなんと...

か、大きく左へ廻る(喜びの発露)と、六郎妙味を發揮する。序ノ舞は半ば抱擁するように...

「観世」酒乱の夫シテあきらに無体にも叩き出された妻正邦は子を殺して親里へ戻る。...

「右近左近」シテ右近・千五郎、妻・七五三。左近の牛が右近の田を荒し、右近は妻に訴説を相談するが、左近に密かに通じる...

「水掛盤」標題は水争いが骨肉相食む争いになる事例。灌漑用水の整備は農作貧乏を聞くも飢饉は聞かない現代、当事者以外は勤と獄の違いを知る人も少なからう。...

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231) 1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (052) 731-7984
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

- [7月]
- 17日(金) 能楽・鏡座第二回公演(有料)
- 18日(土) GALO21主催・手話狂言(有料)
- 19日(日) 観世会・夏の楽謡会(有料)
- 20日(祝) 七彩色会20周年記念大会(無料)
- 24日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)
- 25日(土) 能で観る平家物語(有料)
- 26日(日) 野村四郎名古屋公演(有料)
- [8月]
- 1日(土) 全国宝生流教授囃託会(有料) 全国大会
- 2日(日) 同上(無料)
- 9日(日) 青陽会定式公演(有料) (番組③面)
- 15日(土) 名古屋城夏まつり特別公演 「能楽」大鼓五流秘曲の会(有料)
- 16日(日) 名古屋城夏まつり特別公演 不易流行・新作狂言を見る会(有料)
- 22日(土) 能で観る平家物語公演(有料)
- 29日(土) 衣斐正宜後援会(有料)

◆熱田神宮能楽殿◆

- [8月]
- 8日(土) 名古屋新能(有料) (番組④面) (熱田神宮境内)

名古屋城夏まつり

8月4日~16日 新能上演

能楽協会名古屋支部協力

真夏の夜のファンタジーとして恒例となった「名古屋城夏まつり」は、ことしは八月四日から開催される。この名古屋城夏まつりのメ

インイベントの一つである「新能」は、年々非常な人気をあつめており、ことしは四日から十六日まで連日上演される。演目および、主な出演は次のとおり。

八月四日(火)「羽衣」和合之舞(高橋肇一)
八月五日(水)「清経」(清沢一政)
八月六日(木)「経正」(古橋正邦)
八月七日(金)「殺生石」(前野郁子)
八月八日(土)「学生能」
八月九日(日)「半華」(今沢美和)
八月十日(月)「杜若」(須部甫)
八月十一日(火)「班女」笹之伝(梅田邦久)

八月十二日(水)「小督」(加賀敏彦)
八月十三日(木)「鉄輪」(近藤幸江)
八月十四日(金)「葵上」(久田三津子)
八月十五日(土)「安達原」(松山幸親)
八月十六日(日)「狸々乱」(梅田邦久・祖父江修一)
入場料(前売大人八百円、小学生二百円、中学生三百円、市内プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾン、ロイヤル、サークルK、JRMなどの窓口にて取扱。問い合わせは名古屋城夏まつり実行委員会事務局TEL052・222・0666

重文・総合指定保持者認定

このほど重要無形文化財(総合指定)の第十次追加認定が行われ、能楽関係五十七人が新たに認定された。能楽協会名古屋支部関係では次の三氏が認定された。(敬称略)
(ワキ方・高安流) 高安勝久、飯富雅介
(小鼓方・幸清流) 福井良治

各地の新能

7月31日、長良川特設舞台

「伝統文化の夕べ」として毎年大きな話題をよんでいる「長良川新能」は、七月三十一日(金)午後五時半から岐阜グランドホテル前河原で催される。演能は、観世流梅若万紀夫氏による能「小鍛冶」、和泉

長良川新能

7月31日、長良川特設舞台

「伝統文化の夕べ」として毎年大きな話題をよんでいる「長良川新能」は、七月三十一日(金)午後五時半から岐阜グランドホテル前河原で催される。演能は、観世流梅若万紀夫氏による能「小鍛冶」、和泉

天王新能

8月2日津島市文化会館

大阪城新能

7月28日 西の丸庭園
読売新聞大阪支社、読売テレビ主催の第十八回「大阪城新能」は七月二十八日、大阪城西の丸庭園で行われる。午後五時三十分開演。

大阪新能

8月11、12日 生国魂神社

能楽協会大阪支部、大阪新能委員会主催の「大阪新能」はきたる八月十一日(火)、十二日(水)の二日間、生国魂神社境内で行われる。

川祭り(尾張津島天王祭)で名高い津島で新能が催されるようになってことし十五年になり、今回はこれを記念して八月二日(日)、大曲「安宅」(シテ本田光洋)と野村万作兄弟を招き狂言「咲嘩」が上演される。またことしは、津島市新文化会館の開館に協賛して、津島市文化会館を会場に於いて屋内で演能される。(津島市文化会館は、名鉄津島線津島駅より徒歩約三分。)

島市観光協会、主管天王新能鑑友会。鑑賞券三千円、学生二千円、中学生以下千五百円。演能は次のとおり。
狂言「咲嘩」(太郎冠者・野村万作、主・深田博治、咲嘩・野村万之介)
能「安宅」(シテ本田光洋、判官・睦上玄太、山伏・辻井八郎、本田芳樹、鬼頭尚久、本田由樹、日下部夏樹、小島芳樹、河村高、山井綱雄、ワキ飯富雅介、笛・鹿取希世、小鼓・後藤孝一郎、太鼓・寛範一、アイ・野村万作、野村万之介、後見横山紳一、謡金春安明ほか)
問い合わせは津島市観光協会(0567・28・2800)

大蔵流狂言「業平餅」

山千之丞、茂山忠三郎、茂山千作ほか
金剛流能「小鍛冶」白頭(シテ金剛水鏡、ワキ福王和幸)
入場料三千五百円(前売三千円) 高次生(中学生以下は無料) 二千五百円(前売二千円)、前売取扱いは「阪急・阪神・京阪各交通社、高島屋、阪急百貨店、大阪読売サービス各プレイガイド、問い合わせは読売新聞大阪本社事業局事業開発部(06・366・1848)

シテ梅若基徳、ほか金春流狂言「松風」

シテ梅若基徳、ほか金春流狂言「松風」(金春晃寒、観世流狂言「難波」(シテ齊藤信隆)▽金剛流能「弱法師」(シテ豊嶋三千巻)▽大蔵流狂言「因幡堂」(善竹幸四郎)▽観世流半能「野宮」(山中義澄)▽観世流能「雷電」(山本博通、山本章弘)ほか狂言、観世流「巴」(大槻文蔵)「阿漕」(山本勝一)入場料三千円(前売二千五百円)、入場券取扱いは「阪急・阪神プレイガイド、近畿日本ツーリスト、神社社務所、各出演者宅。

暑中御見舞 申し上げます

観世清和

幽謳会

片山九郎右衛門

社団法人 鍊仙会

観世鍊之丞

観世栄夫

観世暁夫

梅猶会

大阪国際フェスティバル能

梅若盛義

名古屋観衡会

山本勝一

名古屋正花会

山本博通

井上嘉久

大槻清韻会

大槻文蔵

鳳鳴会

武田志房

幽花会

片山慶次郎 伸吾

名古屋観世九阜会

観世喜正

加藤保彦

高木美智子

高山橋一

(株)大阪能楽会館

大西智久

山中能舞台

山中義滋

〒545 大阪市阿倍野区阪南町六一五-18
電話(06)六九二一三八二五

平成10年上半期、西と東の追善の大能 「十五世福王茂十郎廿三回忌追善能」と 「梅若猶義廿七回忌追善能」

竹尾邦太郎

西は三月十五日、春の彼岸を控える大阪は大規模な追善能楽堂、脇方の催能に相応しい番組は初番に稀曲「松山鏡」、雙物「松風・戯ノ舞留」は「羅生門」、狂言「無布施経」。他に脇方連吟、脇方二番、独吟二番、一調一管、仕舞十一番である。

「松山鏡」先ず作物の鏡台が出る。羯鼓台流用の大きなものでなく、紅緞を掛けた小ぶりの台座に柱を立て、天頂に紅い円環を飾り、その下部に円鏡を取り付けて紅緞を垂らした美しいものである。何事もなく掛飾を着けた子方、大槻一文君が脇座に就く

へ、泣き居たり、とシオリ、クドキとなつて更に地の、あれこそ母よ、とサシテ鏡へ行き、たらたら退つて下居シオルところなど、一文君も型も実に達者で巧く感情移入させられる。ワキ茂十郎もまたがっちりそれを受け、鏡の呪縛を解かんとその用途を力説する語りは、「やあ、いかに娘」、と子方へ進み、「これこれ見候へ」、と介添して立たせ鏡台へ連れ行くところ、詞の動き十二分に發揮する。「思ひ知れ」と娘を納得させれば、鏡に見入る娘に、涙も誘われてシオリ返りも濃密な父娘の情愛の深まり、茂十郎好演である。

ワキと子方、二人がワキ座に座着くと亡妻ノ靈ツレ文蔵(面露女か、襟浅黄・白地露芝文着指袖付・無紅露芝飛燕文縫指袖巻・白練蓋折)は杖つきアシラと出に常座、「子は親に似るなるものと、と眩くが如くの述懐から正中床几に掛かると、後見は杖をひき、ツレは懐中の扇を持つ。述懐は続き、「昔を語り申すべし、のツレに、ハツとする心で声の方を向くワキと、夢驚かし給ふよ、と受ける地に念を押すか、徐にワキにアシラフのはツレ、両者の心理模様も面白い。唐土の賢女に托して彼地の鏡に纏わる奇譚を、ウケセは、床几の居ケセ、今風は單身赴任の夫、現地妻の風聞を悲しむクモル面は、右ウケてほうと目付柱の方を見るところ、また上げ端の後、鶴が飛来して、肩に羽を休め、と左手を右肩に遣るところ、など文蔵印象的に見せる。

憤怒をみせるシテは、ツレに走つて前世の所業を鏡に映さんと、左手でツレの右肩押し引き立て、鏡台前に押し揺るもの凄まじい。舞動はシテの示威、舞上げ鏡に見るのは意外や菩薩の姿とてその不思議に呆れ、独り地獄に戻らんと、飛返つて直ぐ立ちトメルまで、シテ志房、短かい出番に虚勢を張る鬼見物のよさをみせ、子方とワキの絡みツレの胸のうち、シテとツレの掛かり合い、三つのエピソードを順次重ねて構成する一曲を上手く締めた。曲のメーソ・テーマは約五分の三を占める前半の子方とワキの絡み、後半は、無智から邪教に走つて対立する現今の娘と父の關係に似るだろう。(54分)

「松風・戯ノ舞」シテ清和、「影を汲むこそ心あれ」と左手を沙桶に添え、静かに汲む汐の、月光に煌めく幸に見入るところ、積ましかかな下キの連時もしつとりと、宵々に脱ぎて我が寝る狩衣の上ケ端あと、クセの纏綿たる情緒は抑えても溢れる官能の匂い。物者に平形見の烏帽子と紫長袖(金銀二千鳥文を着れば、暮る思は磯馴松にも行平の幻を見る陶酔境。へ立ち別れ、以下の舞は小書・戯ノ舞の心、短冊に戯れ寄る恋情は、舞上げて、遠山松、と退り幕を見込むところ、左袖を颯と内へ返して、磯馴松の、と松を抱くところ、思いの丈、直ぐ切地、眞義(徳三)となり、一ノ松で左袖返し松を見込むと地の裡にシテ・ツレ幕に入りワキ(弥三郎)留、美しく匂やかな余情である。(1時間37分)

「無布施経」シテ忠三郎、当然の布施をアド施す、千之丞に願忘れされて貰えず、うろうろするところ、飽くまでも布施は頂戴しよう、の独り言に、思い煩う眞摯な執念は決して卑しくはならず、その心理描写は見事。千之丞の阿吽の呼吸も老練。(33分)

「羅生門」鬼神(シテ水蓮)が羅生門に棲むという巷間の風聞をめぐる争論の綱(ワキ和幸)と保昌(江崎敬三)。鬼神の存否確証など無益、と酒宴の一座に諷められはして、徒な保昌への挑戦に非ず、と頼光(福王智登)の許可に勇躍赴く。若者の血気は弥盛心の勇ましき、めりはりの利いた詞の明晰に和幸颯爽たるところをみせて爽快。

後場は、馬の立ち疎む感から鞭を捨てて壇上の綱、上からのびた鬼神の手でむんずと兜重頭型付白鉢巻を巻り取られるや、飛び降りて逃れ、姿を現わした鬼神と格闘となるのも凄絶。偉丈夫水蓮に伍して美丈夫和幸、の舞台の構図が極まり上々。(47分)

東は三月廿九日、東京観世能楽堂、番組は秘曲「娘捨」と重置「道成寺」、狂言「見物左衛門」。他に猶家ゆかりの諸家など仕舞十番である。

「娘捨」シテ盛彦、前は面曲見。初回(奉行六郎)へ残り秋の、と常座に入り、「薄霧も立ち渡り、とはかなげな風情に右ウケルところ、寂寥はシテの心の中も。後は頬と口辺に皺のある小ぶりの可愛い面は能か。白大口に青海波地紋の白地長袖は金の芒に霞文様、俗世の汚濁を歲月に晒した無垢の姿は、しかし、へ夢か現か、のワキ岑男へ、へ夢とはなや夕暮に、とアシラフのも含羞なら、結足にも老いの姿、清澄な月下の世界に身を曝す哀しみをすら感じさせ、浄土世界を描く舞ケセもあくまで静か。へ天冠の間に花の光輝き、と頭上に指す右手の扇を下ろすところは、一条の光の象徴か。序ノ舞は扇扱いから運歩に至る老いの表情の繊細、舞の半ば、スミで扇左に取り、廻つて脇正に直り、退つて常座に安座すると、扇面に映る月を眺めると、扇面に映る右ウケて天空の月を見、再び扇面に月を見る。所謂弄月ノ型の、シテの沁々とした感懐は、そこに亡父の面影を偲ぶか、そして亦、そこには亡父が遠に舞うこと無かった三老女を手向ける思いも感じ

られて然るとする。キリは、うかうか現れ出た軽率の悔い、ワキとワキツレを見送ると、シオリつつ正中に出、へ独り捨てられて老女が、とシオリ続け下居、切地にシオリ解いて膝を抱くと、地一杯を聞いて立ち、常座へ進んで幕見て踏み留め、大小笛の残り留、孤愁しんと沁みるかの舞台だった。間は万之介、大五郎、速雄・純・元信の囃子、後見は鏡之丞、朗詠・泰孝。(2時間19分)

「見物左衛門」愚園呂左衛門を誘い合わせるの深草祭見物も、先方は先刻出掛けたとあつての独り見物のシテ万作、話術の巧みは活き活きとした顔の、就中、眼の表情に生きる。制限が早いとて、九条の古御所内外の佇まいを鑑賞するところなど、微細にわたり追真。(17分)

「道成寺」シテ盛彦、前の面は、情痴の匂いがある近江女に非ず泥眼の無気味、襟白二・白地金鱗着付黒地金立湧二絞腰巻・金地撫子大蝶文唐織笠折、すうりとした姿に凄味を漂わせ、乱拍子(小鼓・結拍)をそつなく踏み(粘り)が足りなくもないが、鐘入(鐘後見・盛彦)は鮮やかに吸い込まれて消える。アイは万作・万之介、兩人同時に鐘に触るのが珍しく、「熱や熱や」と耳を掴む。ワキ語は閑の重厚、貫録に舞台がひきしまる。

鐘が上がる、後シテは下居に双手を挙げて鐘を支える型。立つて唐織を胸高に巻くと先ずスミへ行き、追跡するワキを威嚇、腰をひねって面切り、逆襲に転ずるのも柔らかな身のこなし。爪先立ってざりざり巻く柱巻も蛇体を彷彿とさせ、キリは、へ又起き上つて、と飛び返つて一氣に幕へ走つて飛ぶ。スピード感のある舞台だった。(1時間40分)

今回の西と東の催能は、「松山鏡」「羅生門」がワキ方の重い習物なら、「娘捨」「道成寺」は言わずもがなシテ方の重置、前二者のワキ、後二者のシテは、それぞれ流儀の家元と名家を継承する親子の關係、そして何れも亡父・亡祖父への手向けの披キである。芸の伝承の意義・重味を痛感させられる。

夏休み親子能楽教室

ことしも八月三日(月)、四日(火)の二日間、名古屋能楽堂で「夏休み親子能楽教室」が開催される。

【スケジュール】

八月三日(月) 午前十時から午後二時半まで。ビデオ鑑賞、仕舞、謡の体験と実演。

八月四日(火) 午前十時から午後二時半まで。仕舞、謡の練習、仕舞、謡の発表会。

◎参加要件 必ず親子一組で申し込み(小学四年生から中学生までの方と保護者)

◎募集定員 親子二十五組、五十人

◎参加費 親子一組千五百円

◎申込み方法 往復はがきに、(住所・氏名・年齢・性別・学校名・学年・自宅電話

暑中御見舞 申し上げます

観世芳宏門人会
観世芳世
観世芳世
観世芳世
観世芳世

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須田政久
高島良一
今沢美和

泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3-8-2
電話(052)831-3111

武田謳楽会
武田欣司
武田邦弘

久田観正会
久田勘
馬場信至
玉木孝男
星野路子
久田野一

石井流大鼓方
吉田定男氏逝去
大鼓方・吉田定男氏はかねて病氣療養中であつたが七月四日午後九時十分、多臓器不全のため逝去された。享年七十歳。葬儀は六月廿九日午前十時から名古屋市北区若葉通の愛昇院で執り行われ、多数の会葬で生前の活躍をしのび冥福を祈つた。喪主は妻洋子さん。

吉田氏は名古屋出身。石井流大鼓方として多年にわたる能楽の振興に貢献された。重要無形文化財(総合指定)保持者、日本能楽会会員。

名古屋 修 会
梅若 修 一

松音 会
泉 泰 孝

佳泉 会
泉 雅 一郎

春梅 若善 高

山本 眞 義
山本 章 弘

初陽 会
武田 宗 和

上田 観正会 能楽堂
上田 観正会 TEL078-15113
浅井ビル 電話052-733-3736

大公 拓 貴 介
威 司 弘

名古屋城 花伝の会特別公演

8月15日 能楽大鼓

五流秘曲の会

8月16日 新作狂言を見る会

盛夏八月の四日から催される名古屋城夏まつりの特別イベントとして、「花伝の会」藤田六郎兵衛氏のプロデュースによる「能・狂言特別公演」が八月十五日(土)十六日(日)の二日間、名古屋能楽堂で開催される。

◎八月十五日の公演
「能楽・大鼓 五流秘曲の会」

能楽界の大鼓(おおつづみ)が五流、「石井」「大倉」「葛野」「観世」「高安」の各流儀からの出演で、各流儀独自の曲、各流儀の楽器の扱いの違い、また同じ曲での演奏の違いなどを聞く。

神楽式「揉の段」
舞・井上祐一、井上靖浩
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、小鼓・柳原富司、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・亀井広忠
一調「勸進帳」「三井寺」
一調「天鼓」ほか。

他の出演者

大鼓方・亀井広忠(葛野流)河村純一郎(石井流)河村大(石井流)白坂信行(高安流)守家由訓(観世流)山本孝(大倉流)山本哲也(大倉流)シテ方・梅田邦久、片山清司、観世曉夫、観世栄夫、山本順之
小鼓方・大倉源次郎(大倉流家元)笛方・杉市和、太鼓方・助川治
◎八月十六日の公演
「不易流行 新作狂言を見る会」

名古屋城夏まつり実行委員会と花伝の会が募集した新作狂言発表会。いわば、名古屋発掘の狂言初公演。
演出は井上祐一、井上靖浩、佐藤友彦、佐藤融、野村小三郎ほか。

新作発表のほかに、本多静雄作「孤山伏」 佐藤友彦作「二文酒」上演。

開場は両日とも午後一時、開演は午後二時。
入場料は各日とも全自由席四千円(税込)、なおこの会のチケット半券で名古屋城夏まつりに入場できる。

問い合わせ、チケットぴあ(052-320-9999)名古屋城夏まつり実行委員会事務局(052-222-0666)

演能案内

青陽会定式能(第42期)

八月九日(日)

十時半 開演

名古屋能楽堂

道明寺 舞臺子
中川 雅章 河村眞之介 助川 龍夫
柳原富司忠 大野 誠

班 女舞子 三村 恵子
大江 山 久田三津子

班 男舞子 三村 恵子
清沢 一政 飯富 雅介 河村大 藤田六郎兵衛

班 女舞子 三村 恵子
清沢 一政 飯富 雅介 河村大 藤田六郎兵衛

薄暮から梅雨寒への舞台

「九皇会」 「第四一回やるまい会」と「大阪梅猶会」

竹尾 邦太郎

「通小町」 ツレ里女(実)は小町ノ霊・宜夫、花橘の一枝、とワキ僧(元)へのアシラヒが慎ましい。中人は無くツレは後見座にクツログが、市原野辺に住む姥ぞ、と言ふからには若い女で通ずのは少々不自然。シテ深草少将怨霊・直也。一ノ松で塚を出る心に被衣を脱ぐ。面瘦男・黒頭・菱文厚板着付・浅黄大口・白襟水衣(肩上げ)の姿は、花尾招かば、と右手で招くと、打たるると離れ、と舞台へ入りツレの袖を取るところ緊迫する。百夜通

いを言うシテ、ツレ掛合は、君を思へば徒然、と笠を持つと、涙の雨か、と立廻。あらかの雨か、と両手で捧げる笠で面を蔽うのが象徴的なら、ツレを詰問するかの掛合は、虚言や、と拍子強く踏み、地(喜正・啓吾ら)へ眺め眺めは数々多き思ひ哉、と数拍子踏み立立ちの心の心象風景も面白い。辛からじ、と膝着き安座は、百夜通いも後一夜の憔悴感も見え、為に、唯しや、と肩並やかせて居立つ意気込みの表現が利く、キリは一転ハッピーエンドのため

か、一体に深刻味はさほど感じられなかった。(56分)
「山伏」 第太(小三郎)の何やらうつつた言動を案じる兄(高義)、シテ山伏・又三郎に加持を乞う。「別業があつて」と勿体ぶる山伏の、一変「そなたの頼みならば」とにやける風は、中世の男色模様も仄見え、以て外の邪気と容態見立てて「それ山伏といふ山伏なり、何と聞えたことか」と特がるのもええ、恰好しいの媚。どの話まはりも悪が憑き、「ハホー」と叫ぶよるよると退いて行くところは哀れ好色山伏の成れの果、又三郎一家の巧演。(17分)
「西行様」 閑居幽棲様り花を愛でたい西行(ワキ勝久)、着流しが好ましが小格子着付・白大口・黒水衣が改まる。「花見んと群れつつ人の来るのみぞ、風流人士とは云え閑入客があれば心穏やかでない西行ではあるが、

何人も桜の魅力には抗し難いと納得、「あたら桜の谷にはありける」と床几を立てて右手の扇で誘えば、ワキツレ花見客三人すうと切戸へ入るのも順調。
夜桜見物の趣向に西行が下居すると、「花の下臥して、と引回しが取られシテ老桜ノ精・喜之、白垂・風折・襟浅黄・小格子厚板着付・萌黄大口・金地鶴菱文単狩衣の姿で端々と床几に居て気品を見せる。小ぶりの面は舞尉だらうか、柔和な印象は桜の谷に不満を言う問答にも遣り込める強さはなく、花に浮世のと面だけワキにアシラフとこるなど詳々論ず様である。地(三郎・喜久ら)へ朽ちてあたら桜の、と立ち作物出る、と、御法なるべし、とシテワキ共に下居の合唱は有和の気分。花の名所尽しの舞グセは、春の錦燦爛たり、と拍子強く踏むのが象徴的な、クセ切、蹴つ並までも花

は大堰川、とスミからカザシて大きく廻り正中、井堰に雪や、と左袖返シ左右(サイウ)、へかかるらん、と左ウケ太鼓(喜太郎)開いて左袖払い戻すところは景観描写の具象も素晴らしい。序ノ舞の閑雅は舞の中、扇左に替えスミから常座、右袖軽く巻き上げて右ウケ数刻は、春の夜の臘の時間の静止と思える。待て暫し、とワキへ招き、白むは花の、と作物上の花を指シ、小倉の山陰に、とサシて廻り、花の枕の、と左袖外へ返シ膝枕の態に膝をつき、夢は、と立って地の返しに数拍子、花を踏んで、と右にツマミ扇に乗込ミ、トメは定型、寂び寂びとした風情もあくまで端正なシテ喜だつた。(1時間18分・5月16日・九皇会)
「八幡前」 有徳人(友彦)の舞臺集に応募するシテ萬葉、無芸では不適格とあつて付け焼刃でもと何某(幸

雄)の知恵を借りに出かけるが、「芸というものは今習うて今役に立つものではござらぬ」と諭される。道に挑む者には耳に痛い向きもある科白だが、それをさりげなく言わせるところが亦狂言の面白さ、何某はシテを俄射手に仕立て上げ、水鳥を射損じさせて秀句を詠ませ、その機智で有徳人の決心を買おうとの算段である。初々しい萬葉と、琴入戦略の片棒を担いで楽しもうという幸雄、コンビの活きがよく、秀句を詠み送せず失敗の後味も苦くはない。因に八幡は石清水八幡宮、秀句は「いかにばかり神も嬉しと思ふらん、八幡の前に鳥居(射)立てたり」。太郎冠者は融。(37分)
「磁石」 シテすっぱ忠三郎に身売られしかるアト田舎者千之丞の報復、銭をめぐるトラブルは金氣(かなけ)の太刀に及び、きびきびとし(⑥面へつづく)

半部

後見 星野 路子 佐藤 融
梅田 邦久 地謡 高島 良一 須部 江修一
須部 孝男 高橋 敏彦
玉木 孝男 加賀 敏彦
古橋 正邦 高島 良一 加藤 保彦
正邦 高橋 敏彦 加藤 保彦

因幡堂

後見 久田三津子 河村眞之介 大野 誠
武田 邦弘 地謡 柳原富司忠
井上 靖浩 星野 路子 加藤 保彦
三村 恵子 中川 雅章
前野 郁子 久田 三津子
松山 幸親 古橋 正邦

土蜘蛛

後見 三村 恵子 河崎 勲 鬼頭 好信
久田 三津子 後藤 孝一 鹿取 希世
助川 龍夫 西村 信広
今枝 靖雄 瀬戸 洋子 加賀 敏彦
久田三津子 古橋 正邦
松山 幸親 中川 雅章
清沢 一政 須部 孝男

附祝言

主 催 青 陽 会

暑中御見舞

申し上げます

金 春 信 高
金 春 安 明
千167 東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話03(3333)2571

宝生英照

金 春 欣 三
奈良市法蓮南町一四
電話074(2)217929

名古屋巽会

辰巳孝

春 敲 会
名古屋春栄会
金 春 晃 実
金 春 穂 高
廣 瀬 瑞 弘

近藤乾之助

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電話059(8)231026

金剛永謹

喜多山本才
愛知県高浜市青木町三丁目七の五
電話056(6)531618

廣田後援会

廣田幸稔

福王茂十郎

菊扇会会

廣田泰三

宝生欣哉

千166 東京都練馬区小竹町一五〇一五
電話03(3397)7330
03(3395)4795

平成10年7月~8月放送予定

(7月)
 ◎NHK・FM能楽鑑賞
 (日曜日午前8時から)
 19日 「千手」(親世流) 関根祥六ほか
 26日 「富士太鼓」(親世流) 片山九郎右衛門ほか

(8月)
 ◎NHK・FM能楽鑑賞
 (日曜日午前8時から)
 テーマ(名演ふたたび)
 2日 「熊野」ほか(親世流) 親世寿夫ほか
 9日 「正尊・起請文」ほか(宝生流) 野口兼資ほか
 16日 「松風」ほか(喜多流) 後藤得三ほか
 23日 「鶴詞」ほか(金剛流) 豊嶋弥左衛門ほか
 30日 「花折」ほか(相泉流) 六世野村万蔵ほか

◎NHK教育テレビ
 (8月9日午後9時~11時)
 第25回NHK古典芸能鑑賞会から
 半能「井筒」(親世流) シテ梅若六郎
 ワキ森常好

た攻防のテンポは快調。先の「八幡前」の、秀句詠むのにいららさせられた展開を、一気引き締める忠三郎・千之丞の力量は流石。ただ一ヶ所、狸は詞に陥穽があったがそれも消し飛んだ。宿主・伸元(34分)

「庵之梅」三老曲の一、秘曲。又三郎家では先代又三郎信英が一九四二年(昭一七)、布池能楽堂に於ける九早会(初世親世喜之三回忌追善)出勤以来五六年ぶりの上演は当代又三郎信廣が喜寿を自祝し満を持しての披露である。

引廻しを掛けた舞屋は大小前、紅梅が華やぐ梅立木は正先に置かれ、梅見の若い女房衆(小三郎・清活・健太郎・融・隆行)が狂言下り端(六郎兵衛・孝一郎・総一郎・龍夫)に乗り浮き浮きと登場する。様子を窺う一同は、庵で小歌を口ずさむシテ老尼・又三郎の好機嫌を察して案内を乞う。「妻戸を開き」と引廻し取ると、「殖生の宿のいぶせきも、の地(祐一・友彦)の裡にシテは庵を出る。淡い水色の花帽子・面尼・白綾の上品な姿は右手に中啓を持つ。一同は持ち寄る歌を老尼に見せ、勤められ規矩を枝

に吊るすなど、やがて酒宴に盛り上がる。賑々しい女房衆の小謡に興じ、小舞に見とれる老尼だが、まさかの舞を所望されて一旦は顔を背けはし「舞うてもみませうか」とその気。この当りたるの機微は、単に小舞一番の挿入というだけではなく、最奥の小舞「爰は住吉」を後進に伝える責任もあろう。爪先立ちのヒヨコヒヨコした運びの舞は、へろへろの舟は、と轆を操る型も残の色気、舞上げてつくり正座すると、乾いた声で「ハハハ」と笑う辺りも意味深長である。家苞にと梅の枝を勧め、キリは地の裡に庵を出て一同を見送ると、再び庵に正座して額を突き出す態がいかにやれやれの風、幕に退く時は橋懸手前で一才停り、一ノ松では停つて左手で腰を叩くというの珍しきつた。総じて「関寺」と「西行桜」を足して割つた雰囲気があり、又三郎の老尼堂に入つてた。(32分)

「鐘の音」元服の息子に黄金造の太刀を佩かせたい主(礼之助)、金(かね)の値を聞かせに太郎冠者・祐一を鎌倉へ遣る。鎌倉は栗田口の流れを汲む相州鍛冶の正宗で有名だが、一方では鎌倉五山

などを持つ寺どころでもあ。早合点はこまめに喜々と鐘の音を聞いて廻る祐一の一途、張り切る程に可笑しく、話を聞いて憮然とする古武士の風格の礼之助には、ぶつきら棒の叱責の中にも微笑する温かみを感じられて、ほのぼのとした一番になった。(26分)

「六地藏」真仏師を許称するシテすっぱ小三郎、仲間(健太郎・隆行)を語らい六体の地藏を求める田舎者(高義)を騙しにかかるが、三人場所を運んで六体に見せるにしても折衝係のすっぱが仏師を兼ねては少々忙しなく、どたばた劇に墮ちかねない。和泉流他派はプラス一だが又三郎家は太鼓流と同じか。田舎者の肩衣文様が太鼓で、すっぱ仲間のそれが花札と将棋駒、象徴的ではあった。(33分・5月24日・第41回やるまい会)

「通小町・雨夜ノ伝」女人の心を知らず慕う男はストーカーか。困惑する女は百夜通いを強制するが九十九夜に男は斃れ、怨念は今に揺曳する。前ツレ修一は文字通りの市原野辺の姥、露芝文白摺着付に無紅縫箔巻は黒練水衣を着け、木葉入籠を持つ。僧(ワキ利宣)への日参は宿

怨から解放されて後生を願う伏線でもあろうか、いざ名を問われれば口もりかけて立ち、一ノ松では「跡甲ひ給へ」と遠くワキにアシラヒ、へかき消す様に、と小廻り二度、返す句を二ノ松で聞いて静かに幕へ退いて行くところ、她と僧の顔すしつとりした劇空間がうららしい。

後場は、她を小町の化身と察したワキが、跡を叩きつと草庵を出る前に吹かれる笛(雅義)のアヒラヒが、秋風落葉の市野原へ誘う。後ツレありし日の小町は面若女・襟赤・着付同断・赤浅黄段秋草文唐織、僧に授戒を願えば、幕内から美しい声で遮るシテ深草少将怨霊・善高、一ノ松被衣の下へはや帰りに給へやお僧達、も涙味である。

へめめども、と被衣を撥ねれば、面復男・黒頭・宝尽文摺着付・浅黄指貫・白練袴衣(エモン)の姿、雨を通う心に運び、へ打たると離れし、と橋際際のツレとの対面も、強々とした言葉でツレを呪縛するが、笠を持っては立廻りの巧妙、頭上にかざり左へ廻り正先から一ノ松に抜けると小鼓(達達)に合わせ、左右膝着き膝行は間中手探りの奇立ち、拾うとカザシ、へあら暗の夜や、を

鮮やかに実感させる。へわれをば待たじ虚言や、笠でツレを指すと、へ曉は、の数拍子、何もツレをなじる心なへ、我が為、と激し、へ夜も明けよ、では笠をかざして面道フのも怒り治まりきれない表情に思える。辛苦の末はやつと九十九夜、と指折り、へ今は一夜よ、と最後に小指折つてすつと立つところ、正にへ嬉しや、の心。待つ日になつてへ急ぎ行かん、と大小前へ行き正中へ、へ笠も見苦し、と右後ろへ笠捨てて扇を開くのも逸る心を抑えかねる様子、へあら忙しやすははや、とすたすた前へ出るも幕を見込むも、大団円を予見させて面白かつた。(1時間5分)

「水掛壺」男・幸四郎、無造作な鉄の担ぎ様に万事大まかと思いきや、田の水にかけたは無頓着ではない。鯉・隆司の田が干上がるうと容赦なく我田に水をひく。「この様な日照りがちには取り勝ちや」と口尖らせて嘯くところや、鯉との衝突にむきになり、水掛けが途二無二泥掛けになつてゆくところなど、頑固な中の飄逸味が実にユニーク(29分)

「杜若」シテ里女・和男、黄昏、偶々足を止め杜若

たいという思いがあった、といふのは、能楽ジャーナル第21号(98・1・1)に「能と女の身体」と題して、天野道映氏が鶴沢久師の能「藤山」(97・11・26、鏡仙会青山能)を、実に面白かつたと言いついておられたからである。そのなかで天野氏は、演者から受けた感銘は「澄んだ輝き」であり、この「澄んだ輝き」は才能と芸の鍛練の結果で演者個人の芸風であるが、女性の身体というペースも無関係ではないと思うと言われている。

鶴沢久師の「草子洗小町」での舞は端正で美しかったが、この日最も感動したのは居舞子「杜若」恋之舞の地に魅入る旅僧(ワキ隆之亮)を見始め、伊勢物語は八橋の故事をも語り宿を供し、過ぎし日に業平の残し置く衣冠を着けてみせる。若女・襟白亦撫子文白摺着付・紅白段唐織(帆船舟二水草文)の可憐は、物着に初冠・段縫箔巻・業平菱文紫長袖の姿も美しく、内面の充実ぶりを示す。舞グセの典雅は抒情を斥けた澄明感にあると思え、序ノ舞はゆつたりと舞う。キリは正中ワキ柱に向いて左袖返し、雲ノ扇にへ夜も白々と、明ければ、短夜の、旅僧の隙に残るは紫の幻影、和男実実の舞台。(1時間11分)

「安達原・白頭」シテ患美子病氣代動は盛彦、三月「道成寺」を披いた自信は後シテ鬼女の、ワキ金次郎との折にしなやかな立ち回りを見せ、キリのへ漂い廻る安達原の、飛返りなどシャープで鮮やかだが、瘦女・白頭にて艶色練水衣の前シテ老女の、内面から滲み出る凄味は却て見るべきもの、梓梓輪を廻す辺りもそつち無いは、挙措進退はシオリや連びなど、細部には若さが感じられた。(1時間10分・6月6日・大阪梅猶会・大阪能楽会館)

観能随想 寄稿

楽しかった 「松月会」

「松月会」能と囃子の会(五月三十日、名古屋能楽堂)は、充実した会であった。午前九時十五分始、終了は八時近くになったのではなからうか。

久田舜一郎師の素人のお弟子の会だが、各地からの参加である。二番の能、数多くの独調、一調の謡、囃子の舞など、これも各地からのプロの能楽師の方の出演でさらびやかなプログラムであった。小鼓をうたれる松月会の会員の

方達にとつては、この上ない晴れの日であったと思う。

能「羽衣」のクセの少し前から、囃子「融」舞返まで拝見させていただいた。能「羽衣」のシテは山本眞義師で和合之舞である。シテの天女は若々しく優美で魅力的であった。そしてすがすがしい、なんといつても天人なのである。能「弱法師」のシテは久田徹二氏盲目之舞の小書でイロエの個所が舞になる。囃子の会だから劇的なものより、舞歌の比重の高いものになるのは当然だが、基本的には能は、舞歌による詩的なのだと思う。

もうひとつ、この機会に鶴沢久師の謡と舞をみて頂き

たいという思いがあった、といふのは、能楽ジャーナル第21号(98・1・1)に「能と女の身体」と題して、天野道映氏が鶴沢久師の能「藤山」(97・11・26、鏡仙会青山能)を、実に面白かつたと言いついておられたからである。そのなかで天野氏は、演者から受けた感銘は「澄んだ輝き」であり、この「澄んだ輝き」は才能と芸の鍛練の結果で演者個人の芸風であるが、女性の身体というペースも無関係ではないと思うと言われている。

鶴沢久師の「草子洗小町」での舞は端正で美しかったが、この日最も感動したのは居舞子「杜若」恋之舞の地に魅入る旅僧(ワキ隆之亮)を見始め、伊勢物語は八橋の故事をも語り宿を供し、過ぎし日に業平の残し置く衣冠を着けてみせる。若女・襟白亦撫子文白摺着付・紅白段唐織(帆船舟二水草文)の可憐は、物着に初冠・段縫箔巻・業平菱文紫長袖の姿も美しく、内面の充実ぶりを示す。舞グセの典雅は抒情を斥けた澄明感にあると思え、序ノ舞はゆつたりと舞う。キリは正中ワキ柱に向いて左袖返し、雲ノ扇にへ夜も白々と、明ければ、短夜の、旅僧の隙に残るは紫の幻影、和男実実の舞台。(1時間11分)

「安達原・白頭」シテ患美子病氣代動は盛彦、三月「道成寺」を披いた自信は後シテ鬼女の、ワキ金次郎との折にしなやかな立ち回りを見せ、キリのへ漂い廻る安達原の、飛返りなどシャープで鮮やかだが、瘦女・白頭にて艶色練水衣の前シテ老女の、内面から滲み出る凄味は却て見るべきもの、梓梓輪を廻す辺りもそつち無いは、挙措進退はシオリや連びなど、細部には若さが感じられた。(1時間10分・6月6日・大阪梅猶会・大阪能楽会館)

たいという思いがあった、といふのは、能楽ジャーナル第21号(98・1・1)に「能と女の身体」と題して、天野道映氏が鶴沢久師の能「藤山」(97・11・26、鏡仙会青山能)を、実に面白かつたと言いついておられたからである。そのなかで天野氏は、演者から受けた感銘は「澄んだ輝き」であり、この「澄んだ輝き」は才能と芸の鍛練の結果で演者個人の芸風であるが、女性の身体というペースも無関係ではないと思うと言われている。

鶴沢久師の「草子洗小町」での舞は端正で美しかったが、この日最も感動したのは居舞子「杜若」恋之舞の地に魅入る旅僧(ワキ隆之亮)を見始め、伊勢物語は八橋の故事をも語り宿を供し、過ぎし日に業平の残し置く衣冠を着けてみせる。若女・襟白亦撫子文白摺着付・紅白段唐織(帆船舟二水草文)の可憐は、物着に初冠・段縫箔巻・業平菱文紫長袖の姿も美しく、内面の充実ぶりを示す。舞グセの典雅は抒情を斥けた澄明感にあると思え、序ノ舞はゆつたりと舞う。キリは正中ワキ柱に向いて左袖返し、雲ノ扇にへ夜も白々と、明ければ、短夜の、旅僧の隙に残るは紫の幻影、和男実実の舞台。(1時間11分)

「安達原・白頭」シテ患美子病氣代動は盛彦、三月「道成寺」を披いた自信は後シテ鬼女の、ワキ金次郎との折にしなやかな立ち回りを見せ、キリのへ漂い廻る安達原の、飛返りなどシャープで鮮やかだが、瘦女・白頭にて艶色練水衣の前シテ老女の、内面から滲み出る凄味は却て見るべきもの、梓梓輪を廻す辺りもそつち無いは、挙措進退はシオリや連びなど、細部には若さが感じられた。(1時間10分・6月6日・大阪梅猶会・大阪能楽会館)

暑中御見舞
 申し上げます

植田和光会
 植田隆之亮
 〒673 明石市松ヶ丘4の3 A6-301
 電話 FAX 078-919-1137

高安流岡 同門会
 岡 次郎右衛門
 清水 利宣
 高坂 康弘
 森野 晴蔵
 北田 耕三
 塩田 耕三
 村山 耕三
 伊藤 久弘
 谷口 雅信

亀井 俊一
 忠雄
 保雄
 幸友会
 幸友会
 幸友会

福井 啓次郎
 福井 良久
 福井 良治
 柳原 富司
 桂 会
 後藤 孝一
 嘉津 幸

谷口 正喜
 〒602-0915 京都市上京区中立売通
 室町スカイハイツ610号

河村 真之介
 〒602 京都市上京区仁和寺街道千本西入
 コスモテイル四〇二号
 電話(〇七五) 四六二一四二一五

飯島 佐之六
 〒920 金沢市香林坊2-8-17

前川 光隆
 前川 光長
 大藏狂言会
 大藏彌右衛門
 大藏彌太郎
 大藏吉次郎
 〒215 川崎市麻生区岡上四三八一
 電話(〇四四)九八七二一八七番

茂山 千作
 千五郎
 千三郎
 正邦
 茂

「おことわり」暑中廣告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。願不同と併せ何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

親世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
部 100円

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆ (能楽関係のみ)

- (8月)
- 15日(土) 名古屋城夏まつり特別公演 「能楽」大鼓五流秘曲の会 (有料)
 - 16日(日) 名古屋城夏まつり特別公演 不易流行・新作狂言を見る会 (有料)
 - 22日(土) 能で観る平家物語公演 (有料) (番組②面)
 - 29日(土) 衣斐正宣後援会能 (有料) (番組②面)
- (9月)
- 6日(日) 大衆能改メ「初秋能」 (有料) (番組②面)
 - 11日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組③面)
 - 13日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組③面)
 - 15日(火) 和泉流狂言大会 (無料)
 - 19日(土) 名古屋観世九郎会定例能 (有料) (番組③面)
 - 20日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
 - 23日(水) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)
 - 26日(土) 能で観る平家物語 (有料)
 - 27日(日) 鉄道観世会全国大会 (無料)

◆熱田神宮能楽殿◆

- (9月)
- 5日(土) 尾州座公演 (有料) (番組③面)
 - 12日(土) 中日文化センター発表会 (無料)
 - 23日(火) 鳳鳴会大会 (無料) (番組④面)

四日市新能

10月9日能「殺生石」
四日市新能実行委員会、四日市市文化振興財団主催による「四日市新能」は、ことし第十回を迎え、きたる十月九日(金)に四日市・鶴の森公園で開催される。能と狂言に親しむ会四日市研究会協力。番組は次のとおり。

豊田市主催による「ころも新能」は八月二十八日(金)豊田市美術館で、宝生流宗家・宝生英照師が来演能「巴」が上演される。

入場料二千円、七時開演。演目は、仕舞「杜若」(シテ近藤乾之助)、狂言「茶壺」(シテ井上靖浩) 能「巴」(シテ宝生英照、ワキ飯富雅介)

「狂言」純太郎(野村又三郎) 邦久、ワキ高安勝久 入場料(全自由席) 前売二千二百円(当日三千円) 高校生以下五百円。

前売り取扱いは四日市市文化会館(〇五九三・五四・四五〇)チケットぴあ、ジャスコ四日市店、文化センター白揚、市役所売店。

東海各地で新能

日南市文化振興財団主催による「四日市新能」は、ことし第十回を迎え、きたる十月九日(金)に四日市・鶴の森公園で開催される。能と狂言に親しむ会四日市研究会協力。番組は次のとおり。

「狂言」純太郎(野村又三郎) 邦久、ワキ高安勝久 入場料(全自由席) 前売二千二百円(当日三千円) 高校生以下五百円。

前売り取扱いは四日市市文化会館(〇五九三・五四・四五〇)チケットぴあ、ジャスコ四日市店、文化センター白揚、市役所売店。

大衆能改め 初秋能

9月6日2部制で開催

能楽協会名古屋支部の催しとして、長年にわたり行われてきた「大衆能」は、本年か

ら「初秋能」と名前をかえて九月に開催することになり、きたる九月六日(日)第一部(午前十時半始)第二部(午後二時始)の二部制で行われる。大衆能は、能楽協会名古屋支部主催により「大衆普及能」の名で昭和三十五年からは、昭和三十八年から「大衆能」の名で、愛知文化講堂、熱田神宮能楽殿で開催され、熱田祭奉納能、新能、歳末助け合い協賛能、名古屋能楽堂定例公演とともに、能楽協会名古屋支部主催の重要な催能行事として続けられてきた。ひろく社会に対して能の門戸を開こうという大衆能の目的をさらに高揚させ、芸術の秋にふさわしく改名された「初秋能」の発展が期待される。

番組は、第一部・観世流能「蟬丸」宝生流能「黒塚」狂言「伊文字」、第二部・観世流能「夕顔」観世流能「天鼓」狂言「雁渡」。(番組②面掲載)

能面へのいざない

岐阜県博物館(関市) 9月25日~11月25日

はじめに能衣装、世阿弥自筆書状その他能楽関係資料約百点を特別展示して一般公開する。

石川、福井、岐阜の三県にまたがる白山の山麓の寺社で

岐阜県博物館(関市) 9月25日~11月25日

岐阜県博物館(岐阜県関市) 白山山麓から「能面」をテーマにした展示が行われる。

暑中御伺 熱田神宮能楽殿 運営委員会

委員長 熱田神宮 二橋 一彦
権宮司 権宮司 一彦
委員 同

は能面が多く残されている。これらの古面は神社の神事能や猿楽等で使用されてきたもので、現在の「能」で使用されている古面も含まれている。

今回、岐阜県博物館が行う特別展示「能面へのいざない」(白山山麓から)では、白山山麓の神社の能面や、岩手県平泉の中尊寺の「若女」(にやくじよ)、大和地方の能面、世阿弥自筆の謡本、白山信仰関係の資料等約百点が展示される。

〔開催要項〕
期日 九月二十九日(火) 十一月十五日(日)

会場 岐阜県博物館(岐阜県関市小屋名) (岐阜県百年公園内)、電話〇五七五(二八)三一一。

〔入場料〕一般六百円、大学生三百円、高校生二百円、小・中学生百五十円(二十人以上団体割引あり)

※出張資料の一例
岐阜県上郡白鳥町の長流白山神社の厨面ほか二点、岐阜県久瀬村小津の白山神社の古面、関市春日神社の能衣装(神事能で使用)▽行人札(箭笠中宮神社、室町時代の白山入峯札)▽世阿弥自筆書状(配所の佐渡より金春禅竹に当てた書簡、世阿弥七十歳)

〔関連事業〕
特別上演会 郡上郡白鳥町 長流「延年」十月二十五日、午後一時

特別講演会 昭和女子大学 教授・後藤淑氏、十月四日午後一時三十分

〔問い合わせ〕岐阜県博物館(電話〇五七五二二八三三)

金剛流 金剛巖宗家 逝去

4日 金剛能楽堂で金剛流葬

シテ方金剛流二十五世宗家・金剛巖氏は八月一日、肺炎のため京都市の病院で逝去された。享年七十三歳。

告別式は四日午後二時から中京区の金剛能楽堂で金剛流葬で執り行われた。喪主は長男・永謙(ひさのり)氏。

暑中御伺

名古屋能楽堂

名古屋市中区三の丸一―一―
電話〇五二(二三一)〇〇八八

暑中御見舞 申し上げます

名古屋観世会

熾研能会

梅若万紀夫
梅若万佐晴

野村四郎

大垣浦声会

積古場 大垣市伝馬町大垣別院
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八
電話(〇七五七)一七〇三〇

浦田保親
浦田保浩
浦田保利

財団法人 鎌倉能舞台

中森晶三
中森貫太

名古屋橋岡会

名古屋市中区丸の内五ノ三
山田紀子方

名古屋淡交会

三橋岡 慈観
久田三津子

下田雄三

雄誠会中部地区連合会

名古屋和調会
一宮竹石会
岐阜花調会
下呂雄調会
倭文之屋社中

笙月会中 川雅章

洗心会 奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(〇七五七)二〇七六七番

翠生謡会

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 岐阜・四日市
翠生 駒里 翠

賀水会

桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花農の会
加賀敏彦

観修会 祖父江修一

多治見市日ノ出町2の2
電話(〇五七二)二二一三五六

猶患会 熊沢恵美子

名古屋市中東区平野ケ丘3―176
日車マンション四〇四

名古屋能楽堂公演案内

能で観る平家物語シリーズ

八月二十二日(土)午後二時始
名古屋能楽堂
お話し 井沢元彦

能巴

梅若 六郎 福王 茂十郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
後見 山中 貴博 地謡 久保誠一郎 上田 祐司
赤瀬 雅則 武富 康之 阿部 信之
山本 正人 寺澤 幸祐 大槻 文蔵
主 催 観世流シテ方 大槻 文蔵
藤田流笛方 藤田六郎兵衛

第14回 衣斐正宜後援会能

八月二十九日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞 江口キリ 近藤乾之助

能枕 慈童

衣斐 愛 高安 勝久 河村純一郎 助川 龍夫
西村 信広 柳原富司忠 竹市 学
後見 水上 輝和 久野 幸三 佐野 英登
東川 光夫 地謡 稲川 耕司 水井 優

狂言 佐渡狐

佐藤 融 井上 靖浩
後見 井上 祐一

能善 知鳥

飯富 雅介 河村純之介 鹿取 希世
間 井上 祐一 福井啓次郎
後見 寺井 良雄 久野 幸三 東川 光夫
佐野 登 地謡 佐藤 耕司 近藤乾之助
鬼頭 嘉男 和久 莊太郎

附祝言

大衆能改メ

初秋能

九月六日(日)二部制
名古屋能楽堂
第一部(午前十時半始)

衣斐正宜後援会事務所
〒466 名古屋市昭和区御器所3-23-19
TEL 052-882-5600

蝉丸

中川 雅章 久田 勘助
杉江 元正 河村真之介 鹿取 希世
西村 信広 後藤嘉津幸

伊文字

(和泉流狂言) 松田 高義 野村又三郎
後見 今沢 美和 地謡 黒田 孝博 加藤 保彦
梅田 邦久 松山 幸親 祖父江 修一
加賀 敏彦 清沢 一政

黒塚

(宝生流能) 竹内 道子 飯富 雅介 河崎 勲 鬼頭 喜太郎
橋本 幸 福井啓次郎 竹市 学
井上 靖浩

夕顔

(観世流能) 前野 郁子 高安 勝久 河村真之介 大野 誠
後見 近藤 幸江 地謡 星野 路子 高橋 啓一
泉 嘉夫 須山 幸親 梅田 邦久

雁磔

(和泉流狂言) 大野 弘之 佐藤 友彦
後見 井上 祐一

天鼓

(金剛流狂言) 飯富 雅介 寛 敏一 助川 龍夫
高橋 啓一 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

附祝言

主 催 能楽協会名古屋支部
後援 愛知県・名古屋市
前売券 二千五百円(当日券三千円)
前売り取り扱い市内プレイガイド、チケットぴあ、チケット
セゾン、出演者宅

暑中御見舞

申し上げます

芳韻会 稲生 芳雄
半田市船入町三十一
電話〇五六九〇八八五

幸誦会 近藤 幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話〇五六四〇二五二九

重陽会 菊池 重郷
犬山市大山宇相生五九一六
電話〇五六八〇四五〇一

恵誦会 三村 恵子
〒45 西尾市住吉町三一―二
電話〇五六三(五七)二五九四番

光盛会 熊沢 光俱
〒45 小牧市篠岡3-2-11
電話〇五六八七九一九五八七

千早会 八神 孝充

臘月会 加藤 春枝
多治見市音羽町一―一〇一三
電話〇五七二(二三)七二六五

松盛会

小松 勝憲
松舞台
〒511 三重県桑名市西別所一〇六一の五
電話〇五九四(二三)四四八二

惠美寿会

衣斐正宜

衣斐正宜後援会

〒466 名古屋市昭和区御器所3-23-19
TEL 052-882-5600

佐野 由於
〒150 東京都渋谷区東2-14-21
金沢市泉野町四丁目12-14

倉本 雅
摂津市千里丘東3丁目11-13-302
電話〇七二六(二四)七二二六番

宝生流 嘉宝 会
名古屋市中区川名本町二ノ五

司宝 会
名古屋市中区白鳥町二丁目三〇一
島田橋住宅三三三電話〇三三三三三

豊嶋 三千春
豊嶋能の会
豊春 会

金剛流 松野 恭樹
〒616 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL 〇七五(四六)二二四八番
FAX 〇七五(四六)二六〇九八番

金剛流 吉川 周子
名古屋市中区西崎町三三六
電話(五七)七六一―二二五七

宇高 徳成
金剛流景雲会
能を楽しむ会
宇高通成後援会
宇高通成面乃会
国際能楽研究会

徳成 成成
〒606 京都市左京区高野泉町四〇
TEL FAX 〇七五七〇一〇七九三

徳成 成成
〒606 京都市左京区上高野藤田町二
TEL 〇七五(七〇)一〇一〇五五

徳成 成成
〒791 松山市山越四丁目二―三三八
TEL FAX 〇八九九二四一八五五四

徳成 成成
〒791 松山市山越四丁目二―三三八
TEL FAX 〇八九九二四一八五五四

徳成 成成
TEL FAX 〇五二(八八)二一五六〇番

本田 光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三三三三八六二六四一

伊勢金春会 宇仁 田吉 邦
伊勢市八日市場町5-16
電話〇五九六(五二)九九八

長田 驍後援会
〒514 津市高野尾町三三三―一四六
電話〇五九二(〇六)九九七番

和楽会 和谷 衡市
〒516 伊勢市中島二丁目26-12
電話〇五九二(〇六)一五九番

名古屋高安会
高安 勝久 飯富 雅介 杉江 元久
橋本 幸 稻川 耕司 水井 優

谷田 宗二郎
〒603 京都市北区衣笠街道町31-7
電話〇七五(四六三)四八七五番

森 常好
東京都世田谷区世田谷一―47-12
電話〇三(三四二六)四八五三

名古屋能楽堂定例公演

九月十一日(金)午後六時半始

仕舞 鐘之段

久田三津子

地謡 黒山

狂言 貫聳

野村小三郎

地謡 泉

仕舞 雨之段

関根 祥六

地謡 中川

能 班女

是川 正彦

河村真之介

鹿取 希世

(入場料)

前売一般 四千元
学生 二千円
当日一般 四千五百円
学生 二千五百円

協賛 能楽普及事業実行委員会
能楽協会名古屋支部
前売取扱いは名古屋能楽堂(052-231-0088)チケットぴあ(320-9999)チケットセンター(290-9999)市内各プレイガイド

名古屋観世会定式能(第四回)

九月十二日(日)十二時半始

能 清経

谷田宗二朗

柳原富司忠

竹市 学

後見 小島 一英

地謡 松山 幸親

梅田 邦久

狂言 簸屑

佐藤 友彦

井上礼之助

大野 弘之

仕舞 遊行柳ケ

浦田 保利

本川 雅章

鉄輪

野村 四郎

地謡 梅田 邦久

能 船弁慶

飯富 雅介

河村真之介

助川 竜夫

後見 浦田 邦久

地謡 高島 良一

須部 甫

古橋 正邦

附 祝言

清沢 一政

小野村 一四郎

英

(当日券)八千円

主催 名古屋観世会 (終了四時頃)

名古屋観世九皇会定例能

九月十九日(土)午後一時始

外山 圭一

高橋 英明

杉江 元

河村総一郎

大野 誠

能 江口

高安 勝久

福井啓次郎

佐藤 友彦

融

狂言 鬼継子

井上 祐一

佐藤 融

融

能 天鼓

飯富 雅介

吉田 定男

後藤孝一郎

助川 龍夫

附 祝言

間 井上 靖浩

事務所 名古屋南区元塩町一丁目一七番

電話 052-611-3659

加藤 保彦

熱田神宮能楽殿演能案内

尾州座公演

九月五日(土)午後一時始

能 融

梅田 邦久

高安 勝久

福井啓次郎

上田 慎也

狂言 川上

野村又三郎

野村小三郎

松田 高義

藤田 六郎兵衛

附 祝言

後見 青木 道喜

武田 欣司

地謡 高島 良一

松山 幸親

主 尾州座

附 祝言

清沢 一政

祖父 江修一

渡井 義邦

平成10年8月~9月放送予定

(8月)

◎NHK・FM能楽鑑賞

(日曜日午前8時から)

テーマ(名演ふたたび)

16日「松風」ほか(喜多流)後藤得三ほか

23日「鶴飼」ほか(金剛流)豊嶋弥左衛門ほか

30日「花折」ほか(和泉流)六世野村万蔵ほか

(9月)

◎NHK・FM能楽鑑賞

(日曜日午前8時)

6日「小督」(観世流)浅見真州ほか

13日「鉄輪」小鍛冶(宝生流)当山興道ほか

20日「野宮」(喜多流)友枝昭世ほか

27日「蟬丸」(金剛流)松野恭恵ほか

ワキ方富安流
山崎 俊輔
大牟田市大字歴木一四八ノ一
高泉団地一三二二

大倉源次郎
〒154-0005 東京都世田谷区三宿2-13-4
TEL(03)3419-2539

富耀会
柳原富司忠
〒466 名古屋市中区昭和区滝川町47-147
サザンビル八事2-1703
電話(八三三)一〇三二番
小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内
(丸善前)

呉竹会
寛 敏一

長生会
鬼頭喜太郎
好信
愛知県中島郡平和町城西
電話(〇五六七)一九六〇番

助川 龍夫
助川 治夫

青春流太鼓
青耀会
上田 悟
〒594-1153 和泉市青葉台58-4
電話(〇七二五)八五二一
名古屋市中区丸の内二二三
名古屋市中区丸の内二二三
電話(〇五二二)一四〇三〇

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話(〇五六一)五三三三
電話(〇五六一)五三三三
電話(〇五六一)五三三三

野村万蔵
野村万之丞
野村良介
東京都豊島区南長崎六-15-13
電話(〇三三九)五〇一五二八番

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606 京都市左京区北白川東小倉町28
電話(〇七五)七〇二〇二番

名古屋狂言共同社

井上 菊次郎
井上 礼之助
大野 弘一
井上 祐一
佐藤 友彦
佐藤 融
今井 靖雄

狂言やるまい会

野村又三郎
野村小三郎
〒460 名古屋市中区正木二丁目16-25
電話(〇五二二)三三三三(七五五三番)

鳳の会
林和利
井上祐一
佐藤友彦

楽 謡 庵 舞 台
名古屋市中区栄区滝川町四七-183
電話(八三三)七〇〇一

朝日カルチャーセンター

小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

狂言 なのり座
井上 靖浩
佐藤 融
野村小三郎

花 傳 の 会
事務局 名古屋西區新道2-7-17
電話052-571-3464
(FAXとも)

ウシマド写真工房
〒602-8381 京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六二二三
FAX(〇七五)四六二二三

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-16-14
電話(二六二)二八三番

彰 諷 閣
名古屋市中区植田西二-18-02
電話(〇五二)八〇五-1330
名古屋市中区鳴海町有松裏40-9
電話(〇五二)六二二-1423

能 楽 の 友 社

(おことわり)暑中お慶の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

熱田神宮能楽殿演能案内

鳳鳴会 大会

九月二十三日（秋分の日）

熱田神宮能楽殿 午前十時始

番 組

素謡 千手

兵頭 善茂 榎木 映夫 奥田 昌人 地謡 佐川 勝貴 松木 千俊 武田 文志

定家

村上 郁子 長谷川京子 地謡 須藤 明宏 小川 志房 祖父江修一

隅田川

大坪 重造 村上 清 地謡 清沢 宗一 武田 文志 小島 一英

仕舞 鶴亀

佐藤 正弘 石井 鏡子

素謡 大原御幸

法皇 小島 一英 内侍 松木 千俊 祖父江修一 三川 敏平 武田 志房 地謡 高橋 瞭一 小川 志房 清沢 宗一

囃子 放下僧

吉田 明 安福 建雄 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

求塚

浅井 一元 安福 建雄 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

盛久

大本 仁之 安福 建雄 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

素謡 正尊

起請文 征山 忠 松井 弘 地謡 清沢 宗一 小島 一英 藤田六郎兵衛 祖父江修一

能 杜若

山崎佐東子 高井 松男 山崎 哲生 柳原富司忠 助川 龍夫 藤田六郎兵衛

素謡 山姥

祖父江修一 矢野 義章 佐藤 正弘 地謡 清沢 宗一 武田 文志 藤田六郎兵衛

番外 清経

松木 千俊 武田 文志 高井 松男 安福 建雄 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

附 祝言

後見 中川 雅章 地謡 須藤 明宏 高橋 瞭一 祖父江修一 小島 一英 武田 文志 明宏

主 催 鳳 鳴 会
幹 事 武 田 志 房
松 井 弘
電話 〇五六二九二一〇三三五
豊明市間米町敷田二二五一一〇一

長梅雨の舞台から

第九回名古屋能楽堂定例公演

第一回ごさる乃座「観世会」

「宝生会」

竹尾 邦太郎

「鬼瓦」 長期の在京から園元に戻るシテ何某・高義、太郎冠者（又三郎）を伴い暇乞いに因幡堂に詣る。鬼瓦に目を留めた何某は、いかつとも滑稽なその御面相に細君との類似を見つけ、尋常ならぬ驚きを隠したく欠点不細工を一々あばきたるかのようになり取り出し、懐しんで泣くのが当事者以外には実に可笑しいが案外細君の尻に敷かれて何某の船酔いで、腹の中では罵詈雑言に溜飲を下げてゐるのかもしれない。高義、大真面目の好演。（11分）

「殺生石・女体」 「女体」は「金剛」と「狂乱ノ楽」（「富士太鼓」）と交換した小書で、番組の材料を豊富にしただけで編入したもの。自分はまだ進まなかつたが、職分たちの希望を容れた結果である。（以下略、喜多実著「演能初心」）という。大小前、一畳台上に石を出す。ワキ女翁道人（雅介）は沙門帽子・襟浅黄・小格子着付・白大口・黒水衣・金襴掛袴も貫袴、能力頭巾・襟茶・黒無地髪斗目・茶括袴・濃明黄襦袢水衣のアイ能力（小三郎）を伴うが、私子を持たせないのも珍しい。飛鳥の落ちる異変に驚くアイ、シテ騒が幕内から呼掛け、ワキと問答の裡に一ノ松、面増・襟白赤・金襴文白揃着付・紅白段秋文章襦袢は美しいだけにそこはかとなく妖気を孕む。「いや委しくは」と伏目にはんやり一ノ松を見るところ、何物まじしき、の初問（政允・成信ら）に

「野子は犬に、と長袴の脚をバツと前へ投げ出すのは犬の疾駆の様（さま）、犬をぞ射たりける、と左袖返してワキにアシラフのは得意の表情である。就中、草を分けて、と右左に長袴捌いて台を下り、騎射に獲物射伏せる型から、即時に命を徒らに、と後ろ向きに台に跳び上がり床几に掛けるところ胸がすく。キリは地の留、鋭利な剃刀の切れ味のような舞台だった。（1時間2分・6月12日・第九回名古屋能楽堂定例公演）

「佐渡狐」 佐渡に狐は居ないのを取って居ると強弁するものも賭け録（物を賭けて勝負すること）の魔力、負けては業腹と事前工作のシテ佐渡ノ百姓・万作、なり振り構わぬ大胆な贈賄作戦で御奏者・万之介を巻き込み共同戦線を張るところ、申し人間の性（さが）をあらからさまに見せて厭味に耐えず、向きになる越後ノ百姓・萬斎を軽くいなして勝負を楽しまし、且つ舞台を染しむ風情は流石老練。（29分）

「髭鬚」 天皇即位後、初にいなめ祭（大嘗祭）に露払い（犀ノ鉾）の大役を拝命のシテ大髭・萬斎、男子の本懐とばかりに身鏡切つても仕度を妻・小三郎に命じるが、にべもなく拒絶されて打擲に及ぶ。当世なら家庭内暴力のセクハラ、激怒する妻はウーマンパワーを結集し、悪の根源はむさい大髭とばかりにんでんに長刀・鏡・鎌・鉾・鋸・熊手・刺股の得物を取って逆襲する。迎え撃つ萬斎は、旗差し物も美しく飾りたてた櫓で大髭を防御し、いざ好き敵ごさんなれとばかりに櫓門をバツと開いて打つて出る。何だか黒沢の「乱」か「影武者」の一場面を戯画化して見る様な按配だが、そう云えば萬斎は若き武司時代、「乱」で弱法師と鱈丸を足して二で割ったような鶏丸役だったの思い出す。映画の、孤影悄然とは異なり、こちらは雅気横溢、最後は魅入られたように大毛抜にひきつけられて大髭を引き抜かれる末路、クサメ留に萬斎愛嬌。（25分・6月13日・第一回ごさる乃座）

「松風・見留」 シテ松風・九郎右衛門、ツレ村雨・清司のコンビが上々。連吟に、沙汰む女の、憂き世の日のなりわいを言う前半から哀れ深い。「奇せては帰る片男波、の返しの、結足は行平を誘う松風の心の丈の表れ、胸騒ぎの心を背逆の田鶴に仮託するかに左へ面遣ひするもの印象的である。沙汰むの愛し気に丁尊で、沙汰車は紐を肩に受けて扇をずらせてゆくだけ、心で曳いて沙汰かなや、と拍子一つ軽く踏む。ワキ旅僧・隆之亮との出遇いは、由りけな松の話から素性現れ、懐旧が慈嘆となる。シテ・ツレ連吟の名調である。クセ（慶次郎・邦久ら）に小立鳥帽子・紫長袴（下り藤二木賊文）を沁み見やると、へなほ思ひこそは深けれ、のシオリ、切々の思いが極まる。上ヶ端の裡にシオリ解いて床几を立ち、取れば面影に、と長相掻き抱き小廻り、退ると伏し沈む、と常座に安座、長相を掛け懸入るのも哀切である。物着の昂りは松に平の幻影を見る狂気、立ち別れ、とシオリのままシテは二ノ松に抜け、ツレは地前に着くと、囃子の裡に戻り中ノ舞（六郎兵衛・舞一郎・真之介）、舞上げ、磯馴松の、と松を柔らかに抱くように寄りかかると美しい。懐かしや、と退りシオリ暫時、破ノ舞に松の向こうを廻つて一ノ松に抜けると、舞のトメに扇左にカザシ舞台の松を見込む所謂小書の「見留」から切地、へ松に吹き来る、と招き扇に戻り、へ我が跡帯ひて、と膝着きワキに合掌、へ暇申して、と扇開いて立ち、へ帰る波の音、を足拍子に聞かせ、へ須磨の浦かけて、と扇平二上ヶ端サシ、下ろすとへ松風ばかりや、の地の裡に暮に入り、ワキは常座に膝着いて松を見、返シに立ち右ウケ詰めて留、情趣に富む舞台だった。（1時間52分）

二井栄逸師画抄集

'99能画カレンダー

●予約特価 1部 1800円(郵送の場合送料とも1部 2200円)(2部以上の場合送料は一率600円)
●ハガキで部数記入のうえ、当社へ予約申込み下さい。予約期限 11月15日

能楽の友社(詳細次号)

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

演能カレンダー

名古屋能楽堂

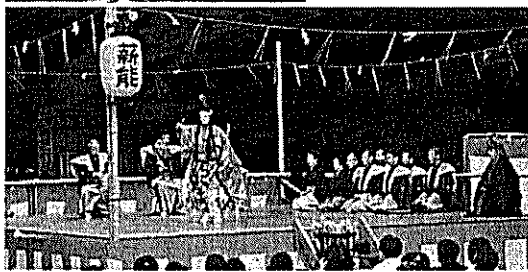
- [9月]
20日(日) 名古屋宝生会定式能(有料)
23日(水) 名古屋能楽鑑賞会(有料)
26日(土) 能で観る平家物語(有料)
27日(日) 鉄道観世会全国大会(無料)
[10月]
1日(木) 法曹謡曲連合大会(無料)
3日(土) 架松会大会(無料)
4日(日) 梅若猶義27回忌追善能(有料)
9日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)
10日(土) 武田謡楽会秋季大会(無料)
11日(日) 邦謡会社中発表会(無料)
17日(土) 湧 蕪 能(有料)
18日(日) 松謡会秋の大会(無料)
24日(土) 能で観る平家物語(有料)
25日(日) 三交会大会(無料)
31日(土) 青陽会定式能(有料)

熱田神宮能楽殿

- [10月]
4日(日) 名古屋泉楽会秋季大会(無料)
18日(日) 狂言・鳳の会(有料)
24日(土) 猶惠会秋の大会(無料)



第33回名古屋新能
「名古屋新能」は、ことし第三十三回を迎え、八月八日熱田神宮神楽殿前で能三番、狂言一番、仕舞の上演で催された。



宝生流能「井筒」物着

10月17日 第10回清華能

小鼓方・福井啓次郎氏が主宰する「清華能」は、ことし第十回を迎え、きたる十月十七日(土)名古屋能楽堂で開催される。午後一時三十分開演。
今回は宝生流の演能で、能「井筒」物着、狂言「狐塚」舞囃子「岩船」、一調「一調一首の上」。

企画展「能面展」
名古屋能楽堂では、九月十九日から十月十八日まで一カ月間にわたり「能面展」を開催する。今回は当地区で能面制作指導にあたっての協力を得て開催。とくに金剛流シテ方宇高通成師も協力出展される。開催要項は次のとおり。入場無料。
会期 九月十九日(土)～十月十八日(日) 午前九時～午後五時
会場 名古屋能楽堂・展示室
展示内容 能面五十三点
筋系二面、財系五面、女面十四面、男面十二面、神霊系四面、怨霊系六面、鬼神系十一面
協力の方々 磯部聖雲、宇高通成、黒澤孝子、平井幸復、保田紹雲の名氏。

名古屋宝生会定式能(第42期)

九月二十日(日) 午後一時始

名古屋能楽堂

能天鼓

玉井 博祐
杉江 元
後藤孝一郎 竹市 学

仕舞 枕慈童

辰巳満次郎
倉本 雅

雲雀山

衣斐 正直

能半部

大坪 喜美雄
高安 勝久
河村総一郎 藤田六郎兵衛
福井啓次郎

狂言 瘦松

大野 弘之
後見 井上禮之助

能鞍馬天狗

飯富 雅介
河村真之介 鬼頭喜太郎
後藤嘉津幸 大野 誠

附祝言

主 宰 名古屋宝生会
事務所 名古屋市中区島田二丁目一〇
島田橋住宅二丁目二二〇
佐藤 耕司 方

第18回 名古屋能楽鑑賞会

九月二十三日(祝) 午後一時半始

名古屋能楽堂

解説 演出家 村 尚也

狂言 千切木
梅若 久紀
梅若 紀長
梅若 万紀夫
野村 万斎
石田 幸雄
月崎 晴夫

能朝長

工藤 和哉
野村 万斎
柚原 弘和
大倉源次郎
藤田朝太郎
金春 国和

問 後見

中村 義澄
地謡
水野 晴志
長谷川 泰二
八田 達弥
伊藤 清高
西村 高夫

主催 名古屋能楽鑑賞会
事務局 名古屋市中区大幸4丁目19番26号田方
電話(052) 722-4000

会員無料
臨時会員 指定席 一万二千元、一万円、七千五百円
申し込み、お問合わせは事務局へ

能で観る平家物語(第六回)

九月二十六日(土) 午後二時始

名古屋能楽堂

能清経

上田 拓司
大槻 文蔵
宝生 開
白坂 信行
藤田六郎兵衛

追 加

後見 泉 康之
武富 泰孝
地謡
山口剛一郎 赤松 慎英
寺澤 幸祐 久田 徹二
山本 正人 齊藤 信隆

梅若猶義二十七回忌追善能

十月四日(日) 十二時三十分始

名古屋能楽堂

能采女

梅若 修一
本正 正樹
河村総一郎 藤田六郎兵衛
美奈保之伝 橋本 幸
後藤孝一郎

狂言 無布施経

後見 梅若 盛彦
梅若 盛彦
梅若 猶彦
地謡
井戸 良祐
井戸 和男

舞囃子 当 麻

岡田 朗詠
寛 鉦一
鬼頭喜太郎
福井啓次郎 鹿取 希世

仕舞 藤 戸

岡田 晃一
井戸 良祐
井戸 和男

三 輪

菊池 重郷
梅若 猶彦
地謡
小松 勝彦
梅若 盛彦

天 鼓

梅若 盛彦
高安 勝久
寛 鉦一
鬼頭喜太郎

能恋重荷

梅若 盛彦
高安 勝久
寛 鉦一
鬼頭喜太郎

追 加

後見 梅若 盛彦
梅若 盛彦
梅若 猶彦
地謡
小松 勝彦
梅若 盛彦

仕舞 藤 戸

岡田 晃一
井戸 良祐
井戸 和男

三 輪

菊池 重郷
梅若 猶彦
地謡
小松 勝彦
梅若 盛彦

天 鼓

梅若 盛彦
高安 勝久
寛 鉦一
鬼頭喜太郎

能恋重荷

梅若 盛彦
高安 勝久
寛 鉦一
鬼頭喜太郎

(入場料)
A席 一万円、B席 七千円
自由席 五千円、学生席 二千円
お問い合わせ先 名古屋名東区
平和ケ丘3-76 日車マンション404
TEL 052-782-6973

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通慈恵町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7 9 8 4
FAX (052) 733-2 8 3 7
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円
— 部 1 0 0 円

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

- (10月)
18日(日) 松 謡 会 秋 の 大 会 (無料)
24日(土) 能 で 観 る 平 家 物 語 (有料) (番組①面)
25日(日) 三 交 会 大 会 (無料) (前号既報)
31日(土) 青 陽 会 定 式 能 (有料) (番組①面)
- (11月)
1日(日) 名 古 屋 金 春 流 友 会 (無料)
金 春 流 能 (番組②面)
3日(祝) 名 古 屋 市 民 芸 術 祭 98 主 催 事 業 羽 (番組②面)
7日(土) 郁 謡 会 大 会 (番組②面)
9日(日) 名 古 屋 観 世 会 定 式 能 (番組③面)
13日(金) 名 古 屋 能 楽 堂 定 例 公 演 (番組③面)
15日(日) 名 古 屋 室 生 会 定 式 能 (番組④面)
21日(土) 能 で 観 る 平 家 物 語 (番組④面)
22日(日) 久 田 観 正 会 秋 季 大 会
29日(日) 故 奥 善 助 先 生 追 善 大

◆熱田神宮能楽殿◆

- (10月)
18日(日) 狂 言 ・ 鳳 の 会 (有料)
24日(土) 猛 恵 会 秋 の 大 会 (無料)
- (11月)
21日(土) 観 修 会 大 会 (無料)
22日(日) 狂 言 ・ な の り 座 公 演 (番組②面)
23日(祝) 名 古 屋 和 泉 会 別 会 (有料)
28日(土) 秋 の 清 謡 会 (無料)

「産業文化交流都市」をテーマに文化面での交流をはかる魅力的な街づくりをすすめる豊田市では、既報のように、いよいよきたる十一月三日文化の日に「豊田市民能楽堂」が開館する。

当日は午後三時から舞台披露祝賀能を開催、能楽シテ方五流の宗家が総出演して華を飾る。さらにひきつづき、十一月十四日には「名匠観賞能」として人間国宝の

豊田市能楽堂開館へ 11月3日 舞台披露祝賀能

観賞が行われる。舞台披露祝賀能は、「翁」宝生流宗家・宝生英照、半能「石橋」大獅子「観世流宗家・観世清和、舞獅子「高砂」喜多流宗家・喜多六平太、「革紙洗」金剛流宗家・金剛水護、「狸々」金春流宗家・金春信高の諸師、狂言「末広がり」和泉流・野村万蔵師が来演。また十一月十四日の「名匠観賞能」は、能「菊慈童・遊舞之楽」

の逸品もふくまれ、とくに足利義輝公より拝領の桐、織田信長公より拝領の大鼓、豊臣秀吉より拝領の大鼓などとも出展される。大鼓方大倉流は、金春禪竹より出て、徳川義直公が名古屋に名家になったとき、五代大倉仁左衛門が尾州侯に仕えることになり、奈良在住のまま、役の度ごとに尾張に出て維新まで尾州侯につかえた(十四世大倉繁次郎氏談)「能楽」

名古屋能楽堂では、能・狂言はじめ伝統芸能、文化にかかわる古文書、伝書、文化財等の展示企画をたて、ほとんど毎月行われてきた新企画による展示を行い、能楽堂を訪れる多くの来観者に観賞の機会を与え、好評を博している。(観賞無料)

この企画で、とし春には、名古屋能楽堂開館一周年を記念して能楽笛方・藤田流宗家・十一世藤

田六郎兵衛師の特別協力により「藤田家伝来名品展」が開催され話題をよんだ。そしてこのたび秋をかざる企画として、きたる十月二十四日(土)から十一月十五日(日)まで、「能楽大鼓方・大倉家に伝来する、大鼓、伝書類」の出展による特別展が催されることになった。

出展は、大鼓など十数点、文書類十一品目で、これまで門外不出

の逸品もふくまれ、とくに足利義輝公より拝領の桐、織田信長公より拝領の大鼓、豊臣秀吉より拝領の大鼓などとも出展される。大鼓方大倉流は、金春禪竹より出て、徳川義直公が名古屋に名家になったとき、五代大倉仁左衛門が尾州侯に仕えることになり、奈良在住のまま、役の度ごとに尾張に出て維新まで尾州侯につかえた(十四世大倉繁次郎氏談)「能楽」

大鼓方秘蔵の伝来名品展

信長、秀吉よりの拝領桐 11月15日まで 名古屋能楽堂特別展

- 釣鐘文様時絵大鼓
- 南音羽村作(室町時代)
- (文書類)
- 瓦落之和文
- 囃伝書条々
- 四座先祖書 宣
- 由緒勅書 大倉七左衛門
- 享和三(一八〇三)年十二月家伝本書 正徳五(一七二五)年
- 御成記御能組 元和九(一六二二)年二月、寛永十三(一六三六)年頃まで
- 御能組 寛永元禄初まで
- 能囃子組
- 元禄年中頃於尾州名護屋浄玄八左衛門 勳進能之有書
- 此通相極り興行不取調申説有
- 当時 入門銘之拍 享和元(一八〇一)年四月
- 晉文 西川七三郎執立 津田吉左衛門 寛政十二(一八〇〇)年十月

能で観る平家物語

- 観世鉄之丞、時田大五郎、金春想右衛門ほか、狂言「千鳥」茂谷千作、野村万蔵ほか、能「鉢木」粟谷菊生、宝生附の諸氏が来演する。
- さらに豊田市民能楽愛好者による「豊田市民演能会」が十一月二十一日、二十六日、二十七日、十三日、二十六日、二十七日に行われる。
- 問い合わせは、豊田市民能楽堂(電話0565・35・8200)
- なお豊田市民能楽堂では、自主公演の優先予約、割引などさまざまな特典をもつ「友の会」の会員を募集している。

忠度

- 観世 榮夫
お話 能
井沢 元彦
名古屋能楽堂
十月二十四日(土) 午後二時始

三交会大会

- 十月二十五日(日) 午前九時半始
名古屋能楽堂
- 主催 観世流シテ方 大槻文蔵
藤田流笛方 藤田六郎兵衛
- 主催 三交会
久田三津子

蝉丸

- 林 賢一
中田 恵子
杉江 元
桐元 正樹
西村 信広
井上 靖浩
柳原真之介
大野 誠

青陽会定式能(第42期)

- 十月三十一日(土) 十二時半開演
名古屋能楽堂
- 能組
- 仕舞 放下僧小歌 星野 路子
三輪 生駒 里翠
- 子方久田 勘吉郎
久田 勘助
- 自然居士 杉江 元
飯富 雅介
柳原富司忠
- 問 井上 靖浩
- 後見 久田三津子
武田 邦弘
星野 路子
前野 郁子
玉木 孝男
松山 幸親
高橋 正邦
- 後見 久田三津子
武田 邦弘
星野 路子
前野 郁子
玉木 孝男
松山 幸親
高橋 正邦
- 後見 久田三津子
武田 邦弘
星野 路子
前野 郁子
玉木 孝男
松山 幸親
高橋 正邦

能井筒

- 加賀 敏彦
高安 勝久
河村総一郎
福井啓次郎
鹿取 希世

狂言 菊の花

- 後見 前野 郁子
梅田 邦久
地謡 三野 路子
高島 幸江
高島 良一
加藤 雅章
- 吉橋 正邦
武田 邦弘
飯富 雅介
河村真之介
後藤嘉津幸
大野 好信

能大

- 後見 今沢 美和
久田 勘助
地謡 瀬戸 洋子
高島 幸親
高島 良一
梅田 邦久
清沢 一邦

附祝言

- 後見 今沢 美和
久田 勘助
地謡 瀬戸 洋子
高島 幸親
高島 良一
梅田 邦久
清沢 一邦

青陽会

- 主催 青陽会

〔御来場歓迎〕
※詳細9月号掲載

〔愛知県文化振興基金事業〕

青月雅日記

(190)

つゆくさの色

えと文 二井栄逸

徳富蘆花が、「みみづのたわごと」の中に、つゆくさのことを、「花ではない。あれは色に出でた露の精である」と、絶妙の言い方をしているが、まさしく露の精が雫々としてささやき交しているかのようなのである。萬葉人がこのつゆくさをつきくさ(鴨頭草、または月草)として次のような歌を残している。

百(もも)に千(ち)に人は言うともつゆくさの移ろふ情(こころ)われ持たためやも(巻十二の三〇五九)

あんな人のどこがいの、と、人は色々言うけれど、私の気持ちには変らない。他人の噂や言葉でかわるような浮ついた恋ではない。と、色つきやすいつゆくさをたとえに、巧みに愛を表現する女心に、昔は、つゆくさの花の汁を衣にすりつけて染めていた。よく染めつくことからつゆくさの名前が生まれたが、水や光に弱く、染めた色も早くあせてしまう。そのつゆくさの移ろいやすさにたとえたのがこの歌である。

そこで、私がなぜ、つゆくさの花をここに持ち出したかというところ、制作している経緯が着す長編(ちようけん)の色がつゆく草

熱田神宮能楽殿演能案内

狂言 なのり座公演 (第3回)

十一月二十二日(日)

午後二時開演

熱田神宮能楽殿

井 礎

井上 靖浩
佐藤 融

釣 針

井上 靖浩
佐藤 融

狂言小舞

野村又三郎
大野 弘三郎
佐藤 友彦
今枝 靖雄
鹿島 俊裕
野村小三郎
井上 祐一

全席指定 S席三、五〇〇円(正面)

A席二、五〇〇円(脇・中正面)

B席一、〇〇〇円(二階席)

チケット取り扱い||チケットぴあ(052-320-9999) 市内

お問い合わせ||名古屋女子大学林研究室(052-852-9436)キヤラリーA.C.S(052-835-3780)

二井栄逸師画抄集

'99能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1999年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

◎予約特価 1部1800円、郵送の場合送料とも1部2200円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円)

◎予約申込み期限11月20日(それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)

◎お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受け付けはいたしません。FAXの受け付けは致します。) FAX番号 052-733-2837

能楽の友社

申し込み先

〒464 名古屋市千種区千種2-18-18
FAX 052-733-2837
振替口座 00800-6-36393

秋の清謡会

十一月二十八日(土) 九時半始

熱田神宮能楽殿

素謡「三井寺」「富士太鼓」「紅葉狩」「高砂」「景清」「隅田川」
舞囃子「野宮」「江口」「松虫」「龍田」「経正」「融」「松風」ほか
か仕舞十番 (入場無料・御来場歓迎)



色であることに起因するからである。やはり花鳥風月を愛した平家の若武者には、つゆくさ色の長相がよい。くれないと藍を交ぜた色は、何度もぬる内に、青みの中に紫を秘めた、薄く透明感のあるつゆくさ色が生まれる。

あの詩人の三好達治が、情熱の調べをつゆく草にたくして次のよう

な詩を残している。
かえる日も無きいにしへをこはつゆく草の花のいろはるかなるものみな青し
海の青はた空の色
やはり青は永遠の色、ひたすらにかぐわしき青春の日々の色なのである。

名古屋金春流友会

十一月一日(日) 午前九時十五分始

名古屋能楽堂

金春流 能

十一月一日(日) 午後二時始

名古屋能楽堂

放下僧小歌 佐藤 俊之
網ノ段 高橋 忍
通小町 金春 安明 地謡 高橋 伸一
野守 吉場 広明 地謡 河村 高汎
小池 信之

前 金春 異実
後 金春 穂高
飯富 雅介 眞 鉦一
杉江 幸元 福井啓次郎 大野 誠
橋本 幸元 井上 靖浩

文 荷

主人 野村小三郎 太郎 野村又三郎
後見 井上 靖浩

老 松

横山 伸一
高橋 汎
地謡 伏原 靖二
金春 信高 地謡 佐藤 穂高

楊貴妃

本田 光洋 高安 勝久 河村真之介 鹿取 希世
玉麗 間狂言 野村又三郎 後藤孝一郎

付 祝 言

(五時五十分頃終了)

入場券五千円(自由席) 学生席三千円
名古屋市民芸術祭'98主催事業 翔
十一月三日(祝) 午後一時始
名古屋能楽堂

名古屋金春流友会

十一月三日(祝) 午後一時始

名古屋能楽堂

〔狂言〕和泉流「寝音曲」野村小三郎、佐藤 融
〔二十絃等〕龍田の曲「長唄演奏」橋本 幸元
料金三千円/全自由席、前売||チケットぴあ、中日サービスセンター、芸文PGなど

郁 諷 会 大 会

十一月七日(土) 午前十時半始

名古屋能楽堂

連吟 竹生鳥 名古屋大学観世会
王之段 名古屋大学観世会
仕舞 鶴 龜 熊谷 晃子
蟬 丸 福島 中子
笠之段 天野 到

舞囃子 養 老 伊藤 明美 眞 鉦一 鬼頭喜太郎
敦 盛 名倉 恵子 福井啓次郎 鹿取 希世
胡 蝶 水野 臣子 眞 鉦一 鬼頭喜太郎
松 風 加藤 尚子 松本 ちづる
女郎花 中野 裕子 眞 鉦一 竹市 学

舞囃子 菊 蕙 志津 明子 眞 鉦一 鬼頭喜太郎
葛 城 野口千鶴子 柳原富司忠 鹿取 希世

仕舞 嵐 山 石本 純子
網之段 岩永 徳子
野 守 米田 真理 河村真之介 鬼頭喜太郎
熊 野 佐治 光幸 久田舜一郎 大野 誠

舞囃子 高 砂 赤尾 正 河村真之介 鬼頭喜太郎
山 姥 渡辺 郁子 河村真之介 助川 龍夫
井 筒 久田 勘助 久田舜一郎 大野 誠

舞囃子 鈴 木 京子 高安 勝久 河村真之介 助川 龍夫
和合之舞 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

舞囃子 葵 上 大島 修 赤尾 正
熊 坂 前野 郁子 河村真之介 助川 龍夫
附 祝 言 天野 到 関根 真爾 大野 拓也

〔御来場歓迎〕 主催 郁 前野 郁子
(終了予定五時頃)

伊勢の能・狂言団体に新風 設立

3 保存会で「継承会」

11月14日記念能「能楽まつり」開催

室町時代末期から今日まで四百五十年間、伊勢の伝統の能楽を保持して伊勢三座の流れを汲む「一色能」と「通り能」、そして同じく室町時代より狂言を嗜み、江戸時代に和泉流に転じた「馬瀬狂言」の三つの保存会は、ことし六月一日に「伊勢の伝統の能楽を継承する会」(継承会)を設立、伝統の能楽の保存継承に努め、交流を深めるための諸事業を企画しているが、その活動の一環として、きたる十一月十四日に、第一回設立記念大会として「伊勢の伝統の能楽まつり」を開催を決定している。



「一色能」「通り能」および「馬瀬狂言」の三団体は、国、県、市の文化財に指定されており、それぞれに輝かしい伝統を保持しているが、毎年欠かさずことなく、元の神社の例祭の奉納能を開催、個々に活躍してきたが、これまでに築き上げた伝統をさらに一段と高め、将来に向けての保存継承を重視して、今後、一年一回の合同発表会を定期的に行うことを決定している。

きたる十一月十四日に催される継承会結成記念大会「伊勢の伝統の能楽まつり」は、能「羽衣」「結城」の二番、狂言「瓜盗人」「棒縛り」「萩大名」の三番のほか狂言、独吟が予定され、入場無料で来観が期待されている。午後一時始。会場は伊勢市黒瀬町の伊勢市生涯学習センター(電話0596・21年3月15日所演)

現在、「一色能楽保存会」の会員は八十名、通り能保存会は五十名、馬瀬狂言保存会は三十名で合わせて百六十名で継承されておられ、これら三団体が一堂に会して伝統の能楽を披露することはこれまで行われたことはなく、新しい時代にむけての新組織の誕生と活動の展開が注目されている。

新たに誕生した「伊勢の伝統の能楽を継承する会」(継承会)の会長には森本幸生氏、事務局長には土谷喜八郎氏がそれぞれ就任。土谷事務局長は「三つの保存会で継承会を設立、能楽の町・伊勢の伝統の能楽の将来を展望、能楽を通じて交流と親睦を図り、お互いが足りないところを補いあい、助け合って一致団結して守り伝えていきたい」と決意している。今後は皆様の期待にこたえて積極的に公演を行い、広く市民の皆様はじめ関係の皆様にご理解いただき、継承会の趣旨をご理解願ひ、より一層の指導とご支援をお願いして、伝統の能楽の保存継承に引き続きでも役立ちたいと語っている。

なお、事務局の電話は0596・22・1720。

(写真)「一色神社例祭奉納能」行われた狂言「萩大名」平成10年3月15日所演

第一回継承会結成記念大会

伊勢の伝統の能楽まつり

平成十年十一月十四日(土)
伊勢市生涯学習センター

- | | | | | | |
|-----|-----------|-------|--------|--------|-------|
| 狂言 | 瓜盗人 | 中谷 洋明 | 中北 豊 | 河原儀太郎 | 馬瀬狂言 |
| 後見 | 林 喜久郎 | 地謡 | 中北 幸利 | | |
| 仕舞 | 半 蔀 | 中川 久子 | 久谷 憲之 | | |
| 阿 漕 | 藤波 富子 | 地謡 | 石原 喜八郎 | | |
| 後見 | 石原 慎一 | 地謡 | 石原 隆明 | | |
| 仕舞 | 高 砂 | 石原 慎一 | 久谷 憲之 | | |
| 後見 | 石原 喜八郎 | 地謡 | 石原 隆明 | | |
| 仕舞 | 桜川 出口 | 清美 | 地謡 | 吉村 美代 | 小西 修一 |
| 後見 | 中川 せつ子 | 八田 英治 | 地謡 | 中川 せつ子 | 森本 幸生 |
| 仕舞 | 小鍛冶 北林 康弘 | 地謡 | 吉村 美代 | 小西 修一 | |
| 山姥 | 八田 秋二 | 地謡 | 中川 せつ子 | 八田 英治 | 幸生 |
| 後見 | 八田 幸生 | 地謡 | 中川 せつ子 | 八田 英治 | 幸生 |

狂言 棒縛り

中北 完治
中北 喜久生

- 後見 河原儀太郎
中北 久寿生 地謡 中林 慶三郎

能 羽衣

石原 進
石原 慎一

- 後見 河原儀太郎
石原 清蔵 大形いく子
石原 純子 藤本利三郎

狂言 萩大名

竜田 才松
喜多 芳夫

- 後見 野北 稔
後見 野北 稔

能 結城

八田 英巳
出口 隆治

- 石原 清蔵 大杉いく子
石原 純子 藤本利三郎

附 祝 言

後見 八田 秋二
地謡 吉村 美代

- 出口 兼子 北林 康弘
中川 せつ子 森本 幸生
出口 清美 八田 英治

能 結城

八田 英巳
出口 隆治

- 石原 清蔵 大杉いく子
石原 純子 藤本利三郎

附 祝 言

後見 八田 秋二
地謡 吉村 美代

- 出口 兼子 北林 康弘
中川 せつ子 森本 幸生
出口 清美 八田 英治

能 結城

八田 英巳
出口 隆治

- 石原 清蔵 大杉いく子
石原 純子 藤本利三郎

附 祝 言

後見 八田 秋二
地謡 吉村 美代

- 出口 兼子 北林 康弘
中川 せつ子 森本 幸生
出口 清美 八田 英治

附 祝 言

後見 八田 秋二
地謡 吉村 美代

- 出口 兼子 北林 康弘
中川 せつ子 森本 幸生
出口 清美 八田 英治

名古屋観世会定式能(第五回)

十一月八日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

- 武田 崇史
武田 志房
高安 勝久
河村総一郎
藤田六郎兵衛

富士太鼓

高安 勝久

- 佐藤 友彦
高島 良一
古橋 正邦
本田 勲
梅田 邦久
須部 一政
久田 勘助

鳴子遣子

井上礼之助

- 井上 靖浩
後見 井上 祐一

仕舞

武田 邦弘

- 小島 一英
地謡 中川 雅章
武田 宗和
古橋 正邦

笙之段

武田 邦弘

- 小島 一英
地謡 中川 雅章
武田 宗和
古橋 正邦

玉之段

武田 宗和

- 古橋 正邦

女郎花

井上 祐一

- 河村真之介
後藤孝一郎
鹿取 希世

附 祝 言

梅田 邦久
地謡 高橋 敏彦

- 松山 幸親 祖父江修一
加藤 保彦 小島 一英
高橋 敏彦 武田 宗和
中川 雅章

平成年11年度 名古屋観世会予定番組

会場 名古屋能楽堂

- 第一回 二月十四日(日) 十二時半始
翁 観世 清和 手 観世 芳宏
舞子 高 砂 武田 志房
- 第二回 四月十一日(日) 十二時半始
花 籠 片山 清司
片山九郎右衛門
- 第三回 六月十二日(日) 十二時半始
頼 政 観世 喜之
三 輪 梅若 盛義
- 第四回 九月十二日(日) 十二時半始
歌 占 小島 一英
観世 晚夫
- 第五回 十一月十四日(日) 十二時半始
海 士 観世 野村 四郎
養 老 岡根 祥人
藤 戸 観世 芳仲

名古屋能楽堂定例公演

十一月十三日(金) 午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

- 狂言 栗 焼
太郎冠者 茂山千之丞 主人 茂山千五郎
後見 茂山 茂
- 狂言 萩大名
大名 野村又三郎 太郎冠者 野村小三郎
亭主 松田 高義
後見 井上禮之助
- 狂言 禰宜山伏
山伏 井上祐一 茶屋 大野 弘之
後見 井上 靖浩

平成10年10月~11月放送予定

(10月) ◎NHK・FM「能楽鑑賞」
(日曜) 午前8時~8時57分

18日 「花 籠」(金春流) 高橋 汎ほか
25日 「班 女」(観世流) 山本勝一ほか

(11月) ◎NHK・FM「能楽鑑賞」
(日曜) 午前8時~8時57分

1日 「辛都婆小町」(観世流) 武田志房ほか
8日 「楼 鼓」(宝生流) 高橋 章ほか
15日 「恋 重 荷」(観世流) 橋岡久馬ほか
22日 「鶴 小町」(観世流) 浦田保利ほか
29日 「腰 折」ほか狂言・山演者未定

◎テレビ放送 11月2日現在予定なし

謡曲名所めぐり

栄謡曲クラブが企画
コースは光明寺十輪寺
一勝持寺などを予定。会費は一万
五千元、申し込みは、名古屋市中
種区星ヶ丘二一五〇一三〇
七、三口謙介方、電話052・7
81・8856。能楽の友後援。

謡曲愛好者によるグループ活動
として、二十五年にわたって自主
運営されてきた栄謡曲クラブ
(代表三口謙介氏)は、このたび
「錦秋の洛西を訪ねる」謡曲名所

名古屋宝生会定式能（第42期）

十一月十五日（日）午後一時始

名古屋能楽堂

Table listing cast members for '名古屋宝生会定式能' with names and roles.

Table listing cast members for '葛城' with names and roles.

Table listing cast members for '能車 僧' with names and roles.

盛夏から秋への舞台

大槻能楽堂改築十五周年記念・安宅競演

第十四回衣斐正宜後援会能

竹尾 邦太郎

「大槻能楽堂」シテ大名あきら、亭主・忠三郎との応接に曲趣の盡...

附 祝 言

佐藤 耕司、和久莊太郎、三橋 茂三、鬼頭 嘉男...

能で観る平家物語（第八回）

十一月二十一日（土）午後二時始

Table listing cast members for '能で観る平家物語' with names and roles.

屋 島

森本 幸治、河村 博、野村 萬斎...

（清和）・流流ノ伝（文蔵）など、は達達から立ち舞、スミで酒を...

Main body of the article discussing the performance, cast, and historical context of the plays.

親世流・金剛流
宗家本発行元

檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
— 部 100円

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

- (11月)
 - 21日(土) 能で観る平家物語(有料)
 - 22日(日) 久田観正会秋季大会(無料)(番組①面)
 - 29日(日) 故奥善助先生追善大会(無料)(番組②面)
- (12月)
 - 5日(土) 万作を観る会(有料)
 - 6日(日) 歳末助け合い運動協賛能(有料)(番組②面)
 - 11日(金) 名古屋能楽堂定期公演(有料)(番組③面)
 - 12日(土) 名古屋大学観世会定期自演会(無料)
 - 13日(日) 壺泉会(有料)(番組③面)
 - 19日(土) 能で観る平家物語シリーズ(有料)(番組③面)
 - 20日(日) 藤谷観正会(無料)
 - 23日(祝) 能を楽しむ会名古屋公演(有料)(番組③面)

◆熱田神宮能楽殿◆

- (11月)
 - 21日(土) 観修会大座公演(無料)
 - 22日(日) 狂言・能のり会別会(有料)
 - 23日(祝) 狂言・能のり会別会(無料)
 - 28日(土) 秋の清謡会(無料)(番組②面)

秋の褒章

紫綬褒章に 野村四郎氏

文化の日になむ秋の褒章受章者が発表され、能楽界から観世流

シテ方・野村四郎氏(六一)が紫綬褒章を受章した。十一月三日

紫綬褒章は、学術・文化の分野で贈られるもので、多年にわたる能シテ方として優れた技量を示し、伝統芸能の発展に寄与した功績が顕彰された。

歳末助け合い運動

協賛能

能楽協会 12月6日公演
名古屋支部

出演で開催される。この歳末助け合い運動協賛能は、毎年能楽協会名古屋支部の主催で行われ、今回は第三十回目となる。昨年は愛好者の協力により、義援金として、愛知県、名古屋市にそれぞれ二十七万二千五百円、合計五十四万四千五百円が寄付された。演能は、宝生流能「歌占」(シテ衣斐正宣) 喜多流能「楊貴妃」(シテ長田駿) 観世流能「菊慈童」(シテ三村恵子) 狂言「六地藏」(シテ大野弘之) 金春流舞囃子「高砂」(シテ伊藤雄二) 金剛流仕舞「藤戸」(シテ吉川周子)

津市文化賞に
長田驍氏受賞
津市は十一月四日、ことし初めて選考した文化賞に、喜多流シテ方・長田驍氏(六〇)を決定、九

能「姨捨」上演
柳原富司忠師が
職分30周年記念能
幸清流小鼓方・柳原富司忠師(富福会主宰)は新春一月三十一日(日)名古屋能楽堂で「職分三十周年記念能」を開催、梅若六郎師による能「姨捨」の上演をはじめ、能「菊慈童」(野村又三郎師) 狂言「酢童」(野村又三郎師) さらに観世流、宝生流、喜多流による一調「難波」「八島」「雲林院」「土車」「絃上」が上演される。

法政大学HES
主催能楽講座
法政大学エクステンションスクール(HES)主催「能楽講座」は、初心者を対象とする「能楽講座」は、初心者を対象とする「能楽講座」は、初心者を対象とする

久田観正会秋季大会
十一月二十二日(土) 午前九時半始
名古屋能楽堂

奥善助先生追善大会

11月29日 誠交会主催

奥善助先生は、学術・文化の分野で贈られるもので、多年にわたる能シテ方として優れた技量を示し、伝統芸能の発展に寄与した功績が顕彰された。

梅若猶義27回忌追善
能「鶯鷓小町」上演
大阪能楽会館で、能「鶯鷓小町」(シテ梅若善高)「船弁慶」(シテ梅若善高)「蟬丸」(シテ井戸和男、ツレ池内光之助)の能三番はじめ狂言「入間川」(善竹幸四郎ほか)舞囃子「融」(梅若修)ほか狂言で開演。

平成10年11月～12月放送予定
(11月) ●NHK・FM 能楽鑑賞
(毎週日曜日 午前8時～8時57分)
15日 「恋重荷」(観世流) 橋岡久馬ほか
22日 「鶯鷓小町」(観世流) 浦田保利ほか
29日 「孫登」(和泉流) 野村万作
「腰折」(和泉流) 三宅右近

(12月) ●NHK・FM 能楽鑑賞
(毎週日曜日 午前8時～8時57分)
6日 「景清」(観世流) 藤波重満ほか
13日 「俊寛」(宝生流) 近藤乾之助ほか
20日 「正尊」(金剛流) 豊嶋訓三ほか
27日 「通盛」(観世流) 藤井徳三ほか

●NHK 能・狂言テレビ放送
①12月6日(日)午後3時～4時 「二世金剛殿を偲ぶ」 能「泰山府君」
②12月27日(日)午後3時～4時 「豊田市能楽堂開場」 能「鉢木」
③12月31日(祝)午前7時～8時 「98年能楽界の話題から」

能	巻	緒	三井寺	安宅	求塚	砧	高砂	杜若	定家	玉之段	辛都婆小町	鶯鷓小町	玄象	葛城	山姥	藤戸	遊行柳	番外	附祝言	
飯富 雅介	河村真之介	後藤孝一郎	大野 誠	山瀬アサノ	久田 勘鶴	松山 幸親	嘉夫	泉	服部善美子	服部善美子	泉	服部善美子	泉	服部善美子	泉	服部善美子	泉	服部善美子	泉	服部善美子

〔入場無料〕
主催 久田観正会
(五時半頃終了予定)

豊田市能楽堂開場記念

12月5日 郷土創作狂言

12月12日 名曲鑑賞会

十一月三日にオープンした豊田市能楽堂では、舞台披露祝賀能に...

熱田神宮能楽殿演能案内

秋の清謡会 (第三十一回)

十一月二十八日(土) 午前九時二十分始 熱田神宮能楽殿

- 番外 狸々 清沢 一政 須部 甫... 素謡 富士太鼓 中村 正一 今川 米子... 三井寺 水越 弥生 金井 邦夫...

- 師・井上清浩、巫女・堀田恭子、巫女・山本愛、後見・佐藤友彦... 景清 高橋 千晴 榎山 茂代... 紅葉狩 都築 照治 福嶋 武憲...

- 故奥善助先生追善会 十一月二十九日(日) 午前十時始 名古屋能楽堂... 神歌 千才加賀 敏彦... 富士太鼓 吉田 勝巳 杉山 範彦...

- 協賛能 (第三十回) 十二月六日(日) 午前十一時始 名古屋能楽堂... 六地藏 大野 弘之... 楊貴妃 飯富 雅介... 菊慈童 高安 勝久...

※協賛能の収益金は、愛知県と名古屋に寄附させていただきます。

平成11年度 名古屋宝生会予定番組

会場 名古屋能楽堂

●第一回 一月二十四日 素謡 翁 辰巳満次郎 東北 辰巳満次郎 小鍛冶 竹内 道子 ●第二回 六月二十日 生田敦盛 玉井 博祐 社 若沢 宝生 英照 大 会 衣斐 正直 ●第三回 九月十九日

演能の記録

豊春会秋の能

京都 金剛流・豊春会(豊嶋三千春)は、十月十八日(日)金剛能楽堂で「秋の能」を開催。演能は能「落葉」(シテ豊嶋三千春)舞囃子「熊坂」(豊嶋訓三)仕舞五番、狂言は「柿山伏」(茂山あきら、丸山やすし)「落葉」は「雷」(墨染桜)な

かいづの狂言

海津町歴史民俗資料館 岐阜県海津町・海津町教育委員会、海津町歴史民俗資料館主催による「かいづの狂言」は十一月一日、海津町民俗資料館能楽舞台で開催。

二井栄逸師画抄集 99能画カレンダー 好評を頂いております能画カレンダー1999年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。◎予約特価 1部1800円、郵送の場合送料とも1部2200円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円) ◎予約申込み期限11月25日(それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい) ◎お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受け付けはいたしません)FAX番号 052-733-2837

第17回 新作能面展

名古屋・電気文化会館で 日本能面巧芸会(林龍雲会長)は、きたる十一月二十五日(火)から二十九日(木)まで名古屋市中区栄二丁目の電気文化会館五階・東キヤ

故梅若春雄師 33回忌追善会

春鶯会 演目は「瘦松」(大野弘之、佐藤友彦)「狐塚」(佐藤融、今枝靖雄、井上祐一) (シテ親世暁夫)の上演。なお明年'99自主公演のお正月恒例の「翁」は三日(日)四日(月)の二日間上演。いずれも「翁」のほか狂言一番、能一番の上演。

第7回あさひ能

湊川神社で開催 社団法人上田親正会主催の第七回「あさひ能」は、十一月十四日(土)、湊川神社・神能殿で開催。

大槻能楽堂 自主公演能

大槻能楽堂の自主公演能 「能と狂言」は、十一月十日(水)能「通小町」雨夜之伝(シテ親世暁之丞)能「紅葉狩」曳揃(シテ齊藤信隆)

名古屋能楽堂定例公演

十二月十一日(金)午後二時三十分開演 名古屋能楽堂

狂言 文蔵 主人 佐藤 友彦 太郎冠者 佐藤 融 後見 井上禮之助 (和泉流) 祖父江修一 梅田 邦久 飯富 雅介 河村総一郎 福井 良治 助川 龍夫 舞囃子 熊坂 泉 嘉夫 河崎 勲 鬼頭喜太郎 大野 誠 地謡 高橋 敏一 八神 孝充 加賀 正彦 藤原 一政 (親世流) 後見 生駒 里翠 地謡 高島 良一 加藤 保彦 八神 孝充 古橋 正邦 高橋 敏一 武田 邦弘 清沢 一政

壺泉会能

十二月十三日(日) 午後一時半始 名古屋能楽堂

仕舞 泉 泰孝 鶴田 博 泉 嘉夫 八神 孝充 実盛 泉 泰孝 地謡 鶴田 博 泉 嘉夫 八神 孝充 狂言 泉 泰孝 後見 井上礼之助 主 高義 松田 高義 後見 井上礼之助

鐘の音

太郎冠者 野村又三郎 松田 高義 後見 井上礼之助

船弁慶

山本遼太郎 泉 嘉夫 和泉 英基 植田隆之丞 林 洋史 柳原富司忠 藤田六郎兵衛 船中之語 替装束 野村小三郎

演能解説

名古屋能楽堂定例公演 「乱」(みだれ) 「乱」の能を高度に変形させた演出を「乱」あるいは「狸々」と称します。 (狸々)とは中国の伝説上の妖怪で、海中に棲み酒好きで朗らかな性質を持つていとされてい

能で観る平家物語 (第九回)

十二月十九日(土) 午後二時始 名古屋能楽堂

お話 井沢 元彦 養母 親世暁夫 観世 暁夫 宝生 欣哉 井藤 鉄男 大倉源次郎 藤田六郎兵衛 梅村 昌功 茂山千五郎 清沢 一致 西村 高夫 祖父江修一 浅井 文義 古橋 正邦 親世 暁之丞 花伝 正 藤田 六郎兵衛 大槻 文蔵

藤谷観正会大会

十二月二十日(日) 午前十時始 名古屋能楽堂

能「清経・替之型」(シテ斎藤大二郎)能「狸々」(シテ藤井大子) 舞囃子「石橋」(シテ白綾基之) 素謡九番、舞囃子四番ほか仕舞など

能を楽しむ会 名古屋公演

十二月二十三日(祝) 午後二時始 名古屋能楽堂

解説 岡山大学助教授 小野 芳朗 主 藤谷 観正会 藤谷 音彌 舞 枕玉 之之 之之 之之 段 段 段 松野 恭慈 金剛 永謙 豊嶋三千春 地謡 松野 百々 廣田 幸司 竹市 幸司 竹市 幸司 宇高 通成 河村総一郎 藤原富司忠 柳原富司忠 竹市 幸司 宇高 通成 福王茂十郎 山本 順三 柳原富司忠 竹市 幸司 宇高 通成 天野 幸輔 田中 敏文 都丸 伸一 松野 恭慈 都丸 伸一 松野 恭慈 宇高 通成 松野 三春 宇高 通成 松野 三春

宇高通成後援会

前売券五千円(当日券六千円)自由席 取扱所 名古屋能楽堂、各プレイガイド、出演楽師方、宇高通成後援会 TEL・FAX 052・701・0793 TEL・FAX 052・852・2324 名古屋能楽堂事務局 前座(まえぞわ)方、TEL・FAX 052・852・2324

名古屋能楽堂公演案内

柳原富司忠

職分三十年周年

記念能

平成十一年一月三十一日（日）

正午始め

名古屋能楽堂

能 組

能 菊 慈 童

梅田 邦久 飯富 雅介 河村 総一郎 助川 龍夫 高安 勝久 杉江 元 船戸 昭弘 鹿取 希世

後見 山本 博通 地謡 須部 甫 古橋 正邦 久田 勘助 清沢 一政 祖父江 修一

一 調 難 波 藤井 徳三 福井 聡介

狂言 酢 薑 野村又三郎 野村小三郎 後見 松田 高義

◆仲秋の舞台から◆

第三回尾州座公演 第十一回定例公演

観世会 九皇会 宝生会

竹尾 邦太郎

〔川上〕 十年來百のシテ夫・又三郎、大願成就して目は開くも川上地蔵の御告げはアド妻・小三郎を離別が条件の厳しさである。今日まで在るのも猷身的な妻のお陰といえ、光の世界を取り戻した夫たる男の、十年の歳月に「様子（容色）が変る」妻への心の揺れを、又三郎細かく見せ、一悶着あるも結局は妻の介護のもとでの安穩な生活を選ぶが、現代の老人問題を思う時、男の哀感もあからさまに思着せがましくぬくと妻を頼る深慮遠謀も仄見せるか甘郎の息の合った舞台。（37分）

〔融・十三段舞返〕 シテ邦久、前は沙汰む老翁、田子は紐に手を掛けず一ノ松に出、一セいで田子を下ろすとサシ・下歌・上歌を略しワキ僧・勝久との問答の裡に常座。シテ語の中、秋風素漠の塩釜の景を、一貫之も詠めて候、とワキにアシラフとこの風情をみせる。げにや眺むれば、と地（邦弘・磯道ら）が受けて直りつつ目付柱の方を見、へうら淋しくも、と荒廢の跡を右から左へ面遣ヒに眺め、へ老の波、に左腰を抱えて古を恋したうも甲斐なく、安座双シオリの迎りも秋の哀れ切実である。

能 姨 捨

梅若 六郎 福王 和幸 山本 孝 金春徳右衛門 福王 茂十郎 森本 幸治 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

附 祝 言

柳 富 原 富 司 忠 会

入場料（全席指定）S席 一五、〇〇〇円 A席 一三、〇〇〇円 B席 一〇、〇〇〇円 C席 七、〇〇〇円
十二月一日（火）前売開始
お申込み・お問合せ
名古屋市中区尾道町四七―一四七
サザンビル八事二―七〇三
柳原富司忠
TEL・FAX（〇五二）八三二―一〇三二

名所教え済み、へ先づいざや、と一ノ松から田子を担って戻り、へ持つや田子の浦、とこの度は左右とも紐を手繰って絞り、正面框一杯に出て左、右、と汲み上げて田子に映る月を見るのも上々。中入はへ沙汰りに、と天祥と田子を背から捨て、一ノ松に膝つく返シに立ち、ずいずいといつた感じに入るのが最早老翁に非ず、融ノ大臣を予見させて面白い。後は小立鳥帽子・淡黄指貫・紺直衣（立派文）の波さ。へ白河の波の、と笛前から扇を投げ、へ曲水の盃、と正中先から拾うと両手に捧げ、へ受けたら受けたり、と四ツ拍子、へ遊舞の袖、で叩るよに飲み干し遠拝から舞になる。十三段は、常は五段の早舞を、小書が無くともシテが興趣赴くま、に時を忘れて舞返す趣向で、舞の終りに扇を閉じ指型をするのが囃子方への知らせであるという文字通り即興の面白さがあったらしい。舞半ば、膝つき遠拝から立つと舞は盤渉調、ナガシで三ノ松へ抜けて舞台へ戻ると、急ノ舞は太鼓のナガシ大小笛アシラヒで再び

「眞髪」家庭内暴力は酷いの勢い、妻（高義）を別、又三郎の許へ追いやる夫・小三郎も覚れば吾子共々不自由は否めない。貫い下げに向いてへらくと型通り御機嫌伺いは鉄面皮に小三郎殺さなせれば、「某も愛することは」と冷やかに頭だけでアシラヒ「身共はちと用がある」と立つところなど、いつもの伝で踏を踏むことになると、それを畏れ逃げたい気持ちは又三郎も微妙にみせる。揚げ句は勇の畏れ通り元の鞘に収

シテは秋草文段唐織を菊文段唐織に替えて脱下げ、髪は元結に、髪帯も赤地銀香櫛文を扇箔地楕圓菊文に替えて若女、襟白二が些か狂女の位を高くする。それからぬかカケリは割合おとなしく、狂ひ舞は、へ（独り寝の）淋しき枕して、膝つき扇に替ると後見がひく。クセ中へさるにても我が夫の、と立ち二ノ松へ行くと、へ欄干に立ちつくして、は右手の扇を左袖に抱くように遠く右上方へ空を眺める憂愁の表情が惹きつける。中ノ舞の寂しき、キリの扇面を見るのも惜ましかつた。地は祥六・勘助ら、囃子は希世・啓次郎・眞之介。（1時間26分・9月11日・第11回定例公演）

「清経」シテ芳宏、規矩正しくさっぱりした印象の舞台。クセの型どころの極めもきききと、名残の横笛を吹き、弥陀浄土を希求してへ西に傾く月を、雲ノ扇に舞へ眺め、六字の名号を六ツ拍子に踏み、へ船よりかっぱと、ノリ込む入水自裁の迎りの風景もいっそ爽やか、それだけに余情は希薄に思えた。

「天鼓・弄鼓ノ舞」シテ喜之、前は小書で白垂・唐帽子姿、愛息が天から授かる鼓と共に命まで奪われた悲しみに斟酌なく、今また唐冠・白大口・側次のワキ勅使（雅介）に宮中へ呼出される非情である。へ天の鼓を打たうよ、と鼓指して左足踏み出すも氣力萎えるかのところ、クセ中ではへ明暮の時の鼓の、と居立ち鼓見据えるも、へうつつとも、と腰を落とシシオルところ、など無念を伝えて涙える。へ心も危きこの鼓、と撥を取り打てば、鳴る音は愛息の暴君を悔悟させる魂の力か、老父自身開き入る心持はまさかの思いである。へ君も哀れと思し召し、と撥取り落し退つて安座双シオリは有難さに非ず、愛息との魂の交流の嬉しさであるに違いない。

中入はアイ靖浩の送込、後シテは拾法被脱ぎ下ゲも暗れやかに盤渉楽（六郎兵衛・孝一郎・眞一・龍夫）を撥で舞う。舞の途中で一ノ松に抜け袖被キ見込むと戻って鼓を打ち、聞き澄ましてもう一度打つと鼓の向うを廻るのは、鼓に戯れはしや廻るいわゆる弄鼓ノ舞。キリからトメへは型の連続に忙しき思いがするものだが、型をこなしてゆくのは無い、流れに流れてゆくやかな躍動感、へ水に戯れ波を穿ち袖を返すや、の乱れ足から膝をつき、袖を返して鼓を見込む迎りの巧さも光った。（1時間15分・9月19日・九皇会）

「天鼓」シテ博祐。宝生は常も前は白垂・唐帽子、ワキ元は洞烏帽子・白大口・袷袴衣だった。非命の愛息を思い老いを叩つところから宣言に鼓を打たされる前場の、層所に引かれる羊の様な弱々しさは、へ龍顔に御涙を浮かめ給ふぞ有難き、と撥取り落し、退り下居合掌に納めさせられる。後シテは半切・唐織重折、着付の赤地縫箔が華やく、へ呂水の波は、と抜き足二ツからへ拍子と打つなり打つなり、の六ツ拍子は文字通り鼓舞、へ手向けの舞楽は有難や、と作物の鼓を打ち楽（学・孝

まるが、それにしても子は鏡とは必ずしもなり得ない当今の世相は如何なものか。（28分）

「破扇」「手まめなお方」とは小まめに用を申しつける主・礼之助への軽侮面当てか、太郎冠者・友彦は扇茶を石臼で挽かされる單調な仕事に厭気と睡魔である。朋輩の泣で小舞「七ツ子」の足拍子を目覚ませようとする次郎冠者・融も諦めて、悪戯心は鬼の面をきせてしまふ。外出から戻り鬼に外開を揮る主、錯覚を起し喚き悲しむ太郎冠者、素知らぬ顔の仕掛人・次郎冠者、三様の性格描写が中々。（37分）

「瘦松」別称「女山賊」、略奪品吟味の山賊・弘之の際に薙刀を掠めた女・友彦の逆襲。「二跡（全財産）を盗られてこれが何と往かれるものか」の女の執念と、「女に似合はぬワシ事をおしやる」の賊の弱気が口振りにも表われて明快。（18分）

「鞍馬天狗」シテ耕司、前は大格子厚板・白大口・黒水衣、直面に怪しき見えぬのは人柄か。後は大徳見の魁偉そのまま、働キに大天狗の鬱勃の気せ可。子方はもつと覇気が欲しかった。（1時間6分・9月20日・宝生会）

正しいメガネで しあわせを……
メガネの日進堂
名古屋市中区那古野二丁目20-23（円頓寺本町）
☎052>571-6181（代）（駐車場完備）
■営業時間 AM9.30~PM8.00 ■定休日 毎週木曜日

観世寿夫記念

法政大学能楽賞(第20回)

山本順之氏 田口和夫氏 受賞

法政大学(清成忠男校長)は、一九七九年(昭和五十四年)に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設立し、すでに十九回の贈呈を重ねているが、本年も、各方面の識者

受賞者の略歴

山本 順之氏

観世流シテ方。日本能楽会会員。1938年(昭和13)7月19日に観世流シテ方山本博之の四男として大阪に生まれる。父博之、観世寿夫・鏡之丞に師事。初舞台は4歳の仕舞(老松)。

田口 和夫氏

文京大学文学部教授。文学博士。1936年(昭和11)2月13日に埼玉県に生まれる。58年(昭和33)に東京教育大学大学院文学研究科修了(修士課程)。都立城北高校教諭、東京学芸大学附属高校教諭の後、67年(昭和42)より静岡英和女学院短期大学に専任講師として勤務。同大学助教授・教授を経て、83年文京大学に移り、現在に至る。

この間、(翁・道成寺・望月・碓)等を披く。96年(平成7)には「山本順之の会」を発足、亡父博之、師寿夫の追善の意を込めて初回に空(塔婆小町)を演じた。鉄仙会を中心メンバーとして活躍する傍ら、国立能楽堂の企画公演や橋の会での復曲能(希世等)・復曲・新作活動にも積極的に参加している。師の薫陶を受けた播磨の技術と豊かな表現力に加え、気品のある芸風で、謡の巧さ

により推薦された候補者について、選考委員(稲田太郎・法政大学常務理事、観世寿夫、馬場あき子、西哲生、表章、西野春雄、山中玲子の諸氏)が慎重に選考した結果に基づき、第二十回の受賞者として、観世流シテ方、山本順之氏、文京大学教授・田口和夫の両氏を決定した。

なお、贈呈式は、「催花賞」の贈呈式と合わせ、明年一月十三日(例年六時より、赤坂プリンスホテル)で行われる。

山本 順之氏

〔贈呈理由〕的確な技術の上に立った堅実にして華麗な氏の能は、昨年の(江口)本年の(大原御幸)など、近年とみに安定度と深みを増している。謡の巧さと地頭としての実力も評価が高く、多くの能の成功に大きく寄与している。

には定評があり、地頭としての力量は抜群。70年(山姥)の演技で大阪文化祭賞、76年(碓)〔女郎花〕の演技で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。78年無形文化財総合指定。長兄勝一氏、次兄眞義氏も観世流シテ方として大阪で活躍している。趣味は、旅行と読書。

元国立能楽堂事業部企画制作課長。1945年(昭和20)8月7日、金沢市に生まれる。1964年(昭和39)早稲田大学第一文学部哲学科に入学。学生時代に出会った狂言に哲学の実践の場を求め、早稲田大学狂言研究会で活躍した。

催花賞

油谷 光雄氏

元国立能楽堂事業部企画制作課長。1945年(昭和20)8月7日、金沢市に生まれる。1964年(昭和39)早稲田大学第一文学部哲学科に入学。学生時代に出会った狂言に哲学の実践の場を求め、早稲田大学狂言研究会で活躍した。

〔受賞者〕(たぐち かずお) 〔贈呈理由〕近著「能・狂言―中世文芸論考―」は、広く中世文芸全般を視野に入れて能・狂言の形成を論じてきた氏の、長年の研究の集大成であり、新見に満ちた論考の数々は、能・狂言研究の水準の高さを示す見事な業績である。

催花賞

油谷 光雄氏

法政大学は服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、一九八八年(昭和六三)四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽継子方の功労者を顕彰する「催花賞」を設けている。その「催花賞」の第十回受賞者として、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員の選考の結果、元国立能楽堂事業部企画制作課長・油谷光雄氏を決定した。

〔受賞者〕(あぶらたに みつお) 〔贈呈理由〕国立能楽堂の設立準備および開場から十五年、公共の開かれた場としての能楽堂の理想をめぐり、主に企画制作の分野で、卓抜なセンスと努力によって新鮮な公演を実現し、能楽の普及・振興に多大の貢献をなした。

油谷 光雄氏

68年(昭和43)3月卒業後、福村出版等に勤務。83年(昭和58)9月の開場をめぐり80年度に国立能楽堂設立準備室が設置されたが、氏は81年9月同準備室に入社し、福田安男主任の下、企画制作の要として、公演事業はもとより、後継者養成・展示公開・資料整備・広報手段研究など、能楽堂が直面する諸問題の全領域にわたって、原案の作成、資料の準備、関係者との交渉等に当たった。開場15年を迎えた今日、国立能楽堂の運営が好調に展開してきた背後には、職務に精励する範囲を超え、能楽を愛する者の立場から国立能楽堂のあるべき姿を追求して精根の限りを尽くした氏の努力と貢献があった。近年、病を得て国立能楽堂の現場を離れ、国立劇場芸術部主任専門員の職に就いたが、本年6月21日、52歳の若さで急逝した。

佐藤友彦 舞台生活50周年記念

狂言 鳳の会 第19回公演

平成十一年一月十日(日) 午後一時三十分始 名古屋能楽堂

素囃子 獅子 大鼓 寛 鉦一 太鼓 助川 龍夫 小鼓 後藤孝一郎 笛 大野 誠

末広かり 果報者 井上 祐一 大野 弘之

因幡堂 男 佐藤 融 女 今枝 靖雄

木六駄 太郎 友彦 若原 井上 祐一 伯父 井上禮之助

入場料(全席指定) A席四千元 B席三千元

名古屋女子大学短大教授 林 和利

名古屋清韻会

平成十一年一月十五日(祝) 午前九時半始 名古屋能楽堂

千手 加藤美知子 内田寿美枝 浅井 庸子

藤戸 志方つね子 伊藤るり子 森 清子

玉 山下貴美子 雲雀山 長瀬 砂絵 鉄輪 西岡 隆子 山姥 光崎 照子 女郎花 名倉 菊子 殺生石 加藤美智子

舞囃子

船弁慶 川崎あきこ 寛 井啓次郎 鹿取 希世

花月カッコー入り 山本 淳子 寛 井啓次郎 鹿取 希世

松風 谷口 寛子 寛 井啓次郎 鹿取 希世

天鼓 白木喜美子 寛 井啓次郎 鹿取 希世

歌 占クセ 加藤新一郎 大江山 北原良一郎 箆 加藤 千一

道明寺 殿高 博子 河村真之介 助川 龍夫

野宮 長島みつこ 河村真之介 大野 誠

融 佐久間美親 河村真之介 助川 龍夫

弱法師 佐藤 尚雄 浅川 基夫

花筐 山本研二郎 前田和子 鬼頭貴代子 河村新一郎 藤田六郎兵衛

卒都婆小町 奥村 久枝 勸進帳 平岩 明

難波 富士道周明 采女 美奈保之信 古井 佐幸 河村新一郎 藤田六郎兵衛

三輪 御牧 紀代 河村真之介 鬼頭 喜太郎

頼政 渡辺 節子 河村新一郎 大野 誠

善知鳥カケリ入 福間 克彦 河村新一郎 藤田六郎兵衛

高砂八段之舞 桑原 信夫 河村真之介 鬼頭 喜太郎

放生川 番外 仕舞 大槻 文蔵 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

〔御来場歓迎〕 主催 名古屋清韻会 (終了予定五時過)

名古屋観世会定式能 (初回)

平成十一年二月十四日(日) 十二時半始

名古屋能楽堂

翁

観世 清和 三番 佐藤 井上 祐一 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛

高

舞 唯子 武田 志房 後藤 嘉津幸 竹市 好信

張

野村 又三郎 野村 小三郎 井上 礼之助 高義

東

屋 北七 観世 芳伸 藤井 徳三

小

鍛治 藤井 完治 梅田 邦久 雅章

◆NHK新春放送◆

教育テレビ40周年記念

新春 能・狂言

放送時間は3日共 午前7:00~7:50

NHK教育テレビ

①1月1日(日) 能「嵐山・白頭」(金剛流)

前シテ:広田隆一 後シテ:金剛水蓮

②1月2日(日) 狂言「栗焼」(大藏流) 茂山千作ほか

狂言「金同」(和泉流) 野村又三郎ほか

③1月3日(日) 能「小鍛治・重考黒頭」(観世流)

シテ:観世 清和 ワキ:宝井 閑

新春 謡曲・狂言 ラジオ放送

放送時間は3日共 午前11:00~11:50NHK-FM(本放送)

(さらに同じ日の午後19:00~19:50、NHKラジオ第二放送にて再放送)

①1月1日(日) 番囃子「田村」(金春流) シテ:金春 信高

②1月2日(日) 狂言「地蔵舞」(大藏流) シテ:若竹 忠一郎

狂言「葉平餅」(和泉流) シテ:野村 万蔵

③1月3日(日) 番囃子「百萬」(宝生流) シテ:宝生 英照

(日本の伝統芸能「能・狂言鑑賞入門」) (再放送) 講師 高桑いづみ 聞き手 平野 啓子 土曜日 午前7時10分~7時40分 (再) 木曜日 午後3時30分~4時 ①12月26日(出)「翁(式三番)」 二十五世観世 左近ほか 1月7日(休) ②1月9日(出)「安宅(1)」 粟谷 菊生ほか 1月14日(休) ③1月16日(出)「安宅(2)」 同上 1月21日(休) ④1月23日(出)「花子(1)」 野村 万作 野村 万蔵 1月28日(休) ⑤1月30日(出)「花子(2)」 同上 2月4日(休)

花

観世 敦夫 片山 清司 森本 幸治 飯森 正直 山本 順三 河村 大 大野 誠

附 祝 言

後見 武田 邦弘 地謡 高島 良一 古橋 正邦 須山 幸親 梅田 邦久 須藤 徳三 藤井 徳三 芳宏

主催 名古屋観世会 (終了四時半頃)

※初回に限り当日券の発行はありません。(会員券) (年五回分) 自由席二二、〇〇〇円 指定席三三、〇〇〇円

◆仲秋から晩秋への舞台◆

「梅若猶義廿七回忌追善能」(第十二回)

「第十八回鳳の会」と「観世会」

竹尾 邦太郎

強く、石に立つ矢、とわが身を励まし、いかに軽く持たうよ、と射める様に重荷を付けたら、と射る様に丹精の菊を投げ捨てる中入は、憤怒爪先から放散する勢いである。

後場は、白頭・大悪尉・大鱗箔・着付・金大鱗・三龍ノ丸・文武切・金地飛雲・文給法被の怨霊となつて木葉付鹿背杖の音を轟かせ、女御への密かな愛情が無惨にも白日に曝される屈辱に報復する。あきらめしや、と金縛りのツレを胸杖にハツタと睨むところから、強く拍子一ツ踏んで立廻の威嚇、更に鹿背杖の両端握り足拍子二ツの気勢はツレの背を押えつけ、鹿背杖捨てると腰の打杖を抜き持つて打ち据え、介添にツレを立たせるとみせて再度打杖で肩を押えつけて下居させるまで、シテの雷鳴はまた下居の口へ、重荷と云ふも、とシテは逆手の打杖と共に超能力で天秤棒を持ち上げるとたらたら正中に退つてツレを睨み、重き苦しみ、を担わせんと押し潰さんばかりに左右と重荷を両肩に押しつけ、涙まじりにツレは双シオリである。へさて懲り給へや懲り給へ、と反省を促すシテは正中へ重荷を持つて退き、キリになる。ツレのへ跡形は、の合掌に、シテは背を向けたま、左袖返すが、へ終には跡も、と袖を戻し返して打杖を捨て、更にはへ消えぬべしや、と菊を拾うところは、恨みの雲散霧消を暗示する。

「これまでも、と常座へ往くシテを見送るツレに、へ葉守の神となりて、と右手の菊でツレを指シ、へ千代の影を守らんや、と袖被キ払って返シ句に右ウケ袖返シ詰めて留。黄菊一輪を活かした盛義抜群の演出だった。囃子は希世・啓次郎・鉦一・喜太郎、地謡は修一・生香ら、主後見を朗詠。(1時間8分・10月4日・猶義27回忌追善能)

「狐塚」 狐塚の田の番に遣られ、群鳥を威嚇している間は気も紛れる太郎冠者、融れれば融れればは氣もそそろである。朋輩の誼で次郎冠者・靖浩が、淋しかろうと主・友彦が、相次ぎ見舞うも疑心の太郎冠者は狐と見誤り、次々に縛り上げて松葉燵にする。この辺り面白がる風が強いが、佳え逆上する様な気分が欲しいし、次郎冠者にも、暗闇で主に近付くところ手探りの不安が欲しかった。

「三井寺」 世相芳しくないといふことが起り占いの類が流行ること、今昔を問わない。攫われた吾子を尋ね、都は清水寺門前ノ者アイ祐一の夢合せに従い三井寺に赴くシテ母・邦久、アイの温みが一縷の望みを感じさせる。後場は観月の庭、子方を先立て従僧二人を伴う小格子・白大口・紫水衣・小刀は大寺の住僧の風格ワキ雅介、アイ能力・友彦に子方を慰めさせるが小舞「風車」は少々騒々しい印象を受ける。シテは唐織着流シを紺地裾襦袢二股文縫箱履巻・黒水衣、着付の白摺箔も花菱七宝繁文を露芝文のものに替え、女笠に狂ひ笠を担う。狂おしいカケリから心も逸る道行は、能力の撞く暁の三鐘を一ノ松に聴き、へ葉も鐘を撞くべきなり、と舞台に入る勢いも逸る気持。鐘ノ段は、へ狂女なれば、と合掌し四ツ拍子の熱意に鐘を撞く許しを乞うところ、また、へ我も五障の雲暗れて、と少し手繰った紐の下を滑り抜けたところ、など型に調子の氣持を表わし面白。しかし、吾子に邂逅する喜びまでの時間の曲折には、狂おしい気分はあるにしても心の揺れの振幅は浅く、全般は寂し沈んだムードに思われた。子方中辻掛太郎君には後見が付き無難。トメは二ノ松だった。なお作物を出すのに種木が鐘に触れて音をたてたのは雑。(1時間32分・10月9日・第12回定例公演)

「狐塚・小唄入」 シテ太郎冠者又三郎。「狐塚」の異式演出、眼目は小書通り「小唄を謡うて鳥を追はうと存する」に在る。精彩は鳴子を引くに掛けた「引くもの尽し」、へ引けや引け引けこの鳴子引いざいざ鳥を追はうよ、と鳴子紐を引きながら謡い舞う裡、興に乗り自己陶醉する姿に又三郎巧者ぶりを見せる。次郎冠者・小三郎、主・高義、のアンサンブルのよき、暮れての狐塚の怖さは殆どない。(32分)

「井筒・物置」 シテ泰明、一面節木増・白二・撫子文白摺箔着付・金槍地唐花文唐織。松韻を聞き、へ定めなき世の夢心、と出て下居、水桶置き合掌するところ、小書に腰巻を着込むので少々窮屈

は否めないが、へ何の音にか、と立つとワキ常好との門答を省き、初回(泉・乾之助)はへ松も老れたら、へ今度は何寺へ来て舞うて下され、へ捨て台詞に羅如(22分)

「首引」 人を食う、とは人を小馬鹿にした様な言動、シテ親鬼・祐一が愛娘の小アト姫鬼(融)の食い初めにあてがったのがアトを言うクワリから中入地へ言ふや注連縄の、までは床几に掛り、ワキへのアシラヒの淑やかさは美しい地謡と相俟ち佳人の人物を浮彫りにする。

「大般若」 僧・友彦、施主(弘之)宅で巫女・融と鉢合わせ。有難い大般若経も巫女の神楽に調子を狂わされてお手上げながら、中に立つ施主も右往左往である。憤激の僧に巫女にも言い分、両者唾み合い譲らないところ親子競演が迫力。向う意気は強いがよく見れば艶めく巫女の神楽の舞。涎流さんばかりにその振りを真似る僧の好色ぶりは、見答められれば、「今度は何寺へ来て舞うて下され、へ捨て台詞に羅如(22分)

「首引」 人を食う、とは人を小馬鹿にした様な言動、シテ親鬼・祐一が愛娘の小アト姫鬼(融)の食い初めにあてがったのがアトを言うクワリから中入地へ言ふや注連縄の、までは床几に掛り、ワキへのアシラヒの淑やかさは美しい地謡と相俟ち佳人の人物を浮彫りにする。

「富士太鼓」 シテ志房、亡夫形見の鳥兜と舞衣を着る物着の折、子方崇史君、たまたま嘆き込みそうになってこらえるのが、亡父の面影を母に見て胸に込み上げるのを健気に耐える風で怪我が功名。崇史君、シテとの連時も立派で存在感を見せ巧かった。(1時間13分)

「鴨子遣子」 鴨子だ、遣子だ、と自説を曲げない靖浩と融、裁定を茶屋・礼之助に委ねるが、一論する物は中から取れ(所属の定まらない物は第三者が取つてしまえ)、と虚を衝き向人の小刀を操縦する。礼之助のボーカルフエイスが妙。(25分)

「女郎花」 シテ喜之、女郎花の原から石清水八幡宮へ旅僧・欣哉を案内してはや日暮、御暇申し候べし、と辞去のつもりが更に女郎花と男山の関係を問われ、引き留められた思いか、「あ何ともなや」の語気強く、洗い洗いがちまけようの気分が感じられ面白かった。(1時間15分・11月8日・観世会)

「訂正」 本紙十一月号④面「仲秋の舞台から」(竹尾邦太郎氏筆)の記事中、「鞍馬天狗」のなかで「大天狗の鬱勃の氣せ可」とあるのは「鬱勃の氣を見せ可」の間違いでした。お詫びして訂正します。(編集部)

「訂正」 本紙十一月号④面「仲秋の舞台から」(竹尾邦太郎氏筆)の記事中、「鞍馬天狗」のなかで「大天狗の鬱勃の氣せ可」とあるのは「鬱勃の氣を見せ可」の間違いでした。お詫びして訂正します。(編集部)

「訂正」 本紙十一月号④面「仲秋の舞台から」(竹尾邦太郎氏筆)の記事中、「鞍馬天狗」のなかで「大天狗の鬱勃の氣せ可」とあるのは「鬱勃の氣を見せ可」の間違いでした。お詫びして訂正します。(編集部)